

# 田向2遺跡

第1・2次発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第218集



2015

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター



た む か い  
**田 向 2 遺 跡**

第 1・2 次 発 挖 調 査 報 告 書

---

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 218 集

平成 27 年

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター







遺跡遠景（南西から）



3区SB36 堀立柱建物跡完掘状況（東から）



4区 SD60 遺物出土状況（北西から）



4区 SD60 出土遺物

# 序

本書は、公益財団法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 年 4 月 1 日に財団法人から移行）が発掘調査を実施した、田向 2 遺跡の調査成果をまとめたものです。

田向 2 遺跡は、山形県内陸部中央に広がる山形盆地北端の村山市に位置しています。本遺跡は、最上川右岸の山麓斜面の微高地標高約 94m の低地部に位置する平安時代の集落跡と考えられます。市内には、数多くの遺跡が分布し、現在までに 150 以上の遺跡が登録されています。時代は旧石器時代から中・近世と多岐にわたっています。

この度、東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設事業に伴い、事前に工事予定地内に包蔵される、田向 2 遺跡の発掘調査を実施しました。調査の結果、平安時代を主体に近世、近現代の遺構が確認されました。平安時代の遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡などが確認されました。出土遺物は、平安時代の土師器を主体に須恵器、近世、近現代の陶磁器などが出土しました。中でも一部の土師器は、器形から 10 世紀後半頃と考えられるものが出土しました。10 世紀代の土師器の出土は、県内でも出土例が少ないとから、貴重な資料と言えます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先のつくり上げた歴史を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちに課せられた重要な責務と考えます。その意味で本書が文化財保護活動の普及啓発や、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりますが、当遺跡を調査するに際し御支援、御協力いただいた関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月

公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 管野 滋

## 凡　例

- 1 本書は、東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設に係る「田向2遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 既刊の年報、速報会資料、調査説明会資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。
- 3 調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所の委託により、公益財团法人山形県埋蔵文化財センター（平成24年4月1日に財团法人から移行）が実施した。
- 4 本書の執筆は、安部将平、菅原哲文、三浦勝美が担当し、三浦秋夫、小笠原正道、黒坂雅人、伊藤邦弘、齊藤敏行、須賀井新人が監修した。本書の執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章 安部将平  
第Ⅱ章 安部将平  
第Ⅲ章 第1・2節 安部将平  
第3節 安部将平、菅原哲文、三浦勝美  
第4～7節 安部将平  
第Ⅳ章 第1・2節 株式会社加速器分析研究所  
第3～5節 バリノ・サーヴェイ株式会社  
第Ⅴ章 第1～3節 安部将平

- 5 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系（世界測地系）により、高さは海拔高で表す。方位は座標北を表す。
- 6 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は下記のとおりである。

ST…堅穴住居跡・堅穴状遺構	SL・EL…歩跡	ED…住居内溝	EK…住居内土坑	
SB…掘立柱建物跡	EB…建物跡柱穴	SK…土坑	SD…溝跡	SE…井戸跡
SP…柱穴・ビット	SX…性格不明遺構	RP…登録土器	P…土器片	S…礫
W…木片	M…金属			
- 7 遺構・遺物実測図の縮尺・網点の用法は各図に示した。
- 8 遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を表す。
- 9 基本順序および遺構覆土の色調記載については、2008年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」によった。
- 10 遺物観察表において、括弧内の数値は図上復元による推定値を示している。
- 11 本書を作成するにあたり、下記の方々から御指導と御助言をいただいた。（敬称略）  
秋田県横手市教育委員会 信太正樹 烏田祐悦 佐藤知也

## 調査要項

遺跡名	田向2遺跡		
遺跡番号	208-127		
所在地	山形県村山市大字字取字田向		
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所		
調査受託者	財團法人山形県埋蔵文化財センター（平成 22 年度） 公益財團法人山形県埋蔵文化財センター（平成 24 ~ 26 年度）		
受託期間	平成 22 年 4 月 1 日 ~ 平成 23 年 3 月 31 日 平成 24 年 4 月 6 日 ~ 平成 25 年 3 月 29 日 平成 25 年 4 月 1 日 ~ 平成 26 年 3 月 31 日 平成 26 年 4 月 1 日 ~ 平成 27 年 3 月 31 日		
現地調査	平成 22 年 5 月 17 日 ~ 8 月 27 日 平成 24 年 5 月 23 日 ~ 8 月 10 日		
調査担当者	平成 22 年度	調査課長 課長補佐 調査研究員 調査研究員	阿部明彦 伊藤邦弘 三浦勝美（調査主任） 大場正善
	平成 24 年度	調査課長 考古主幹 主任調査研究員 調査員	齊藤敏行 伊藤邦弘 菅原恒文（調査主任） 安部将平
	平成 25 年度	整理課長 調査員	黒坂雅人 安部将平（整理主任）
	平成 26 年度	整理課長 調査員	伊藤邦弘 安部将平（整理主任）
調査指導	山形県教育厅文化財保護推進課（平成 22・24 年度） 山形県教育厅文化財・生涯学習課（平成 25・26 年度）		
調査協力	東日本高速道路株式会社東北支社山形工事事務所 村山市教育委員会 山形県教育厅村山教育事務所 村山東根土地改良区		
業務委託	地形・遺構測量（俯瞰撮影）業務 国際航業株式会社（平成 22 年度） 株式会社シン技術コンサル（平成 24 年度） 基準点測量業務 株式会社三和技建（平成 22・24 年度） 理化学分析業務 株式会社加速器分析研究所（平成 24 年度） パリノ・サーヴェイ株式会社（平成 25 年度） 遺物保存処理（金属製品）業務 株式会社吉田生物研究所（平成 24 年度）		

発振作業員	石川英子	伊藤悟	井上正三郎	太田邦子	大類寛	小川勝男	奥山利男
	橋川敏雄	工藤隆悦	後藤光夫	小松薫	今野啓治郎	齋藤弘治	佐々木栄一
	佐々木幸治	篠原幸一	篠原登	佐藤章	佐藤孝子	菅原一雄	鈴木忠雄
	高橋ちう子	竹井均	武田静子	田村佐代子	丹野幸一	長岡忠	早坂富次
	細矢智子	松本榮	間宮慶彦	三澤國昭	村岡元三	森田栄一	八鍾正清
	横山政利	渡辺勲二	(五十音順)				
整理作業員	加藤道雄	小林美喜	清水佳子	堀浩子	渡部真紀	(五十音順)	

# 目 次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の経過	1
3 グリッドの設定	2
4 整理作業の経過	2
5 資料比較検討	4
II 遺跡の位置と環境	
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
III 調査の成果	
1 遺構の概要	11
2 基本層序	11
3 平安時代の遺構	11
4 奈良・平安時代の遺物	15
5 近世の遺構と遺物	16
6 近現代の遺構と遺物	17
7 その他の遺物	17
IV 理化学分析	
1 放射性炭素年代測定(1)	58
2 樹種同定(1)	60
3 放射性炭素年代測定(2)・炭化材樹種同定(2)	61
4 住居跡覆土中の火山灰分析	65
5 土器内面付着物の分析	67
V 総括	
1 検出遺構について	69
2 平安時代の遺物について	70
3 まとめ	73
報告書抄録	卷末

## 表

表1 調査工程表	2	表4 土師器・須恵器観察表(1)	53
表2 遺跡地名表	8	表5 土師器・須恵器観察表(2)	54
表3 SB25・36 捶立柱建物跡観察表	29	表6 土師器・須恵器観察表(3)	55







# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

田向2遺跡は、国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所による東北中央自動車道（東根～尾花沢間）の建設事業に伴う緊急発掘調査である。

平成8年に建設省東北地方建設局山形工事事務所（当時）により東北中央自動車道相馬尾花沢線（東根～尾花沢間）が計画された。建設事業の内容は、東北内陸部の産業、経済、文化の広域的な交流・連携の促進はもとより、緊急時における代替および迂回等のネットワーク機能の強化を目的としている（国土交通省2011）。この事業計画は、平成14年に開通した東北中央自動車道（上山～東根間）と尾花沢新庄道路を接続するため、東根市羽生～尾花沢市尾花沢に至る延長23kmの高速道路建設事業である。平成21年8月7日に県教育委員会文化財保護推進課（現文化財・生涯学習課）により事業予定期内についての詳細分布調査（試掘調査）を実施し、1.5m×13～20mのトレンチ計4本（総面積109.5m<sup>2</sup>）を設置し、その結果トレンチ1～3から遺構（柱穴、溝跡・遺物（土師器・須恵器）を検出した。トレンチ4からは遺構・遺物共に検出されなかった。遺跡範囲は、試掘場所より北側及び西側に広がるものであると推定された。

試掘調査の結果を受け、平成22年2月24日に山形県教育委員会から事業主体者である国土交通省山形河川国道事務所に対し、本遺跡の詳細分布調査報告が行われた。その後、同事業関連で削除される範囲について記録保存のための緊急発掘調査を実施する運びとなり、財團法人山形県埋蔵文化財センター（当時）が国土交通省山形河川国道事務所から委託を受けて、平成22年度に発掘調査（第1次調査）を実施する事となった。また平成22年度に事業範囲内の用地未買取地は買収完了後試掘調査を行った後、平成24年度に第2次調査として発掘調査を実施した。なお、同じ東北中央自動車道（東根～尾花沢間）建設事業に伴う発掘調査は現在（平成26年度）までに本遺跡を含む19遺跡を数える。

## 2 調査の経過

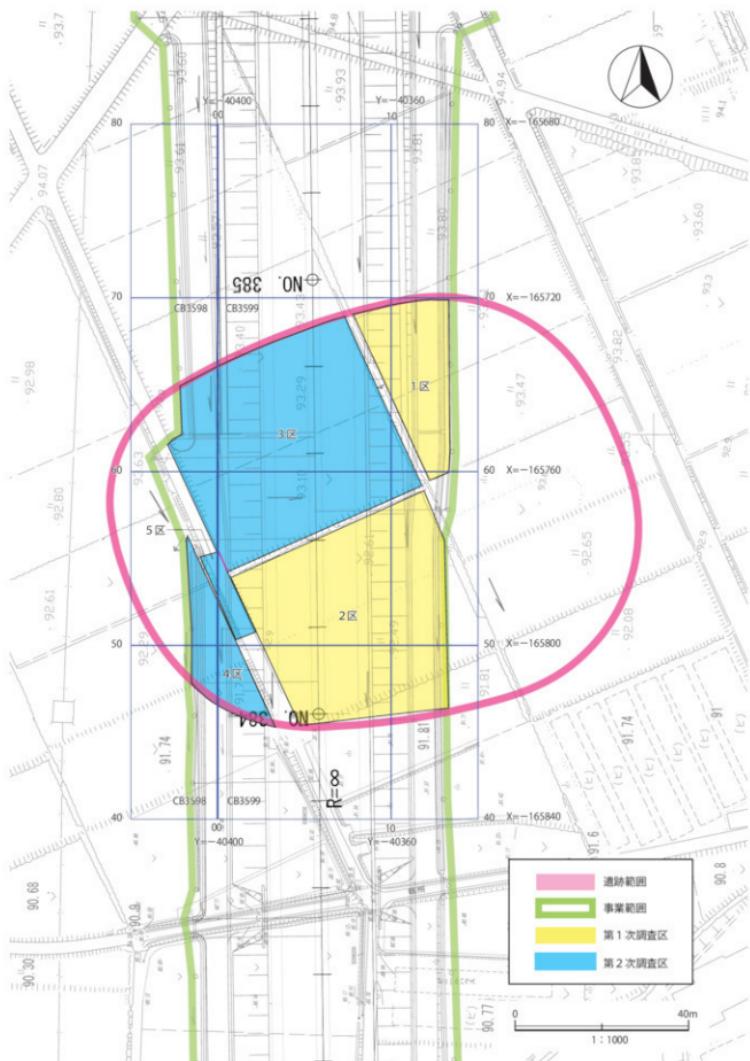
平成22年度の第1次調査は、5月10日に山形県埋蔵文化財センターにおいて、事業者および関係機関が参加し、発掘調査にかかる事前打合せ会を開催し事前調整を行った。調査は、5月17日から8月27日までの実働53日間で、面積2,500m<sup>2</sup>について実施した。

5月17日に器材を搬入し事務所を開所した。5月19日から28日まで重機による表土除去を行った。調査区は、北東の三角形状の地区を1区、南側の台形状の調査区を2区とした。6月1日より、面整理を開始し2区で堅穴状遺構、溝跡、土坑を検出した。1区は、削平のためか遺構は検出されなかった。7月12日より遺構の精査を開始、井戸跡SE3・土坑を精査した。堅穴状遺構ST7は床面のみを検出、周溝が確認された。井戸跡は新たにSE10を確認する。また、土坑SK4・8は出土遺物から近現代であることが判明した。遺構の精査と併行して、断面や平面の写真撮影と図面作成を行った。8月24日に、空中写真撮影を実施した。8月27日に第1次調査を終了し、遺構完掘状況の写真撮影を行った。なお、調査終了後の9月26日に、松橋遺跡・田向遺跡と合同の調査説明会を実施した。

平成24年度の第2次調査は、5月10日に山形県埋蔵文化財センターにおいて、事業者および関係機関が参加し、発掘調査にかかる事前打合せ会を開催し、事前調整を行った。調査は、5月23日から8月10日までの実働56日間で、面積2,300m<sup>2</sup>について実施した。

調査区は、1次調査区1区のすぐ西端を3区、農道をはさんで西側を4区とした（第1図）。5月23日に器材を搬入し、翌24日から31日まで重機による表土除去を行った。表土除去が終了した3区から順次面整理を開始したところ、掘立柱建物跡・土坑・溝跡などの遺構を検出した。6月4日～6月6日に委託業務による基準点の設置とグリッドの設置を行った。6月4日から、順次遺構の精査にとりかかり、写真撮影や記録作業を併行して進めていった。3区内では、4棟の掘立柱建物跡を





第1図 調査区概要図



## II 遺跡の位置と環境

### 1 地理的環境

田向 2 遺跡は、山形県村山市大字名取田向（北緯 38 度 30 分 18 秒、東経 140 度 22 分 12 秒）に位置する。

本遺跡が位置する村山市は、山形盆地（別名村山盆地）の北端に位置し、山形県内のほぼ中央部に位置している。面積は、196.46km<sup>2</sup>を測り、県内 35 市町村の中で、9 番目の広さを誇る。市域は、8 地区（大倉、袖崎、西郷、大久保、富木、戸沢、大高根）から構成され、本遺跡は、西郷地区に位置する。東方には奥羽山脈の一主峰をなす嵐岳、西方には出羽山地に属する葉山が並んでいる。地形割合は、山地・火山地が 59.7% と半数以上を占め、丘陵地が 4.6%、台地・段地が 20.9%、低地が 14.8% となっている。地目別割合は、田が 15.9%、畑が 10.8%、山林・原野が 45.0%、宅地が 3.9%、その他 24.3% となっている（佐藤 2011）。

山形盆地は、南北 40km、東西 10 ~ 20km の舟底形で扇状地の発達の良い盆地と言われており、北側に隣接する尾花沢盆地とは河島山丘陵、南側に隣接する上山盆地とは藏王火山の泥流堆積による挟持部によって区切られる。盆地の東側には、北から乱川扇状地、立谷川扇状地、馬見ヶ崎川扇状地等が並列し、北のものほど規模が大きく、開析が進み、段丘化している。西側には、比較的平坦な寒河江川扇状地が広がる。山々に囲まれた典型的な内陸型の盆地で寒暖の差が大きい。年間降水量は多くないものの、年間降雪量は多く、時には零下 15℃ を下回ることもあるという。また、昼夜の温度差が大きいことから、果樹や農作物の栽培には適している。盆地中央には、吾妻山（米沢市）を水源とする流路延長 229km の最上川が蛇行しながら北流し、盆地両側の丘陵に源を発する中小河川がこれに合流して、日本海（酒田市）に注ぐ。流域には、肥沃な土地が開けている。

本遺跡は、山形盆地と尾花沢盆地との境にある河島山段丘の南麓につながる標高約 94m の低地部に位置する。地目は畑地にあたる。地形分類図上では、最上川右岸の河間低地にあたる（第 2 図）。表層地質は、末固結の礫、

砂および粘土からなる段丘堆積物である。最上川右岸の道六から大淀に至る丘陵には、厚さ 1 ~ 2m の中粒礫の上に 3m ほどの白色の粘土層及び厚さ 2m の細粒礫が堆積する。耕作土壤は、グライ土壤に属し、細粒強グライ土壤である。非固結堆積岩が母材とし、堆積様式は水積で地下水位は 50 ~ 60cm 前後が高い。土性は強粘質で、有効土層は 1m 以上で深い（山形県企画調整部土地対策課 1979）。養分の保持力は大きく土壤の肥沃度は高いと言われている。

### 2 歴史的環境

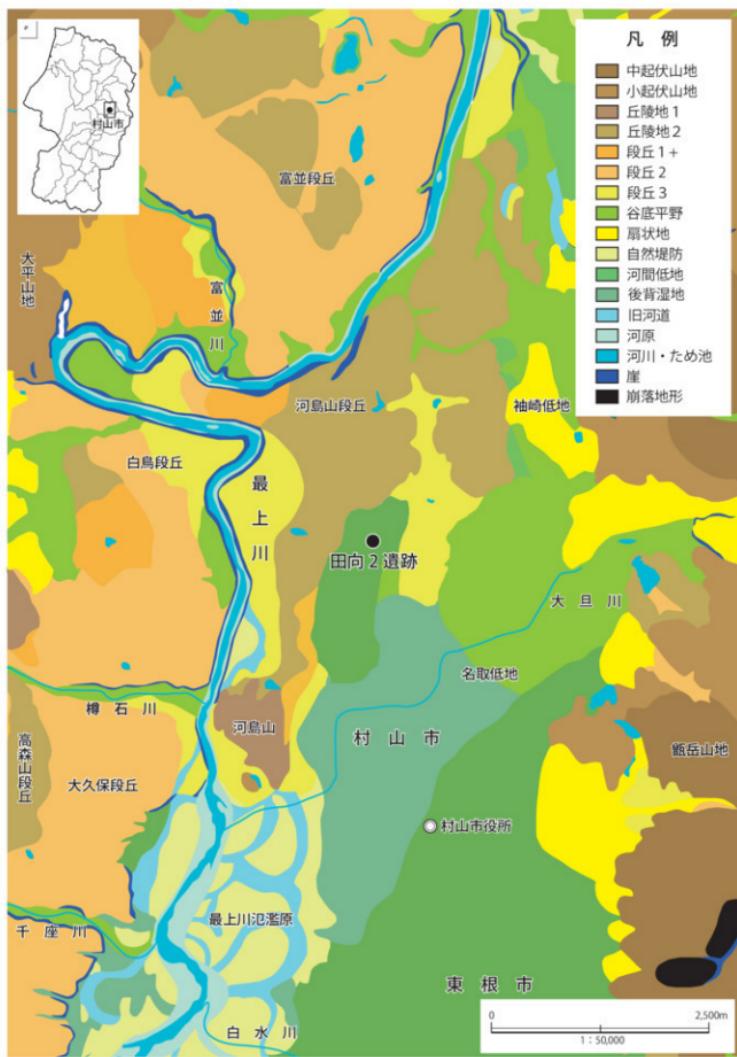
村山市では、数多くの遺跡で分布調査や発掘調査が実施されている。現在までに 150 箇所以上の遺跡が登録されている。

田向 2 遺跡は、最上川右岸の山麓斜面の微高地に立地する平安時代の集落跡である。周囲には、多岐にわたる遺跡が分布し調査されている。第 3 図は、国土地理院発行の 1/25000 地形図「富並」、「延沢」、「谷地」、「橋岡」を編集し、本遺跡を中心とした図幅内に、周知されている 47 遺跡を掲載した。

旧石器時代の遺跡は、本遺跡から北に約 800m 離れた清水西遺跡（7）と河島山遺跡（43）などが挙げられる。清水西遺跡は、平成 24 年度に当センターによる発掘調査が行われ、台形石器及び平坦打面で剥離された厚手石刃を素材にしたナイフ形石器群などが出土している（山形県埋文 2013）。河島山遺跡は、最上川右岸に張り出した出羽丘陵の突端、河島山から南斜面に位置している。杉久保型ナイフ、石刃、彫刻刀、搔器などの石器群が出土している。また河島山は立地条件に恵まれていたと考えられており、旧石器時代をはじめ、縄文時代（早期～中期）、弥生時代、古墳時代及び中世などに属する各期の遺構・遺物が確認される複合遺跡である。また、昭和 26（1951）年 4 月 1 日に城館跡、1 号墳、板碑群が県指定史跡に指定された（村山市史編さん委員会編 1981）。

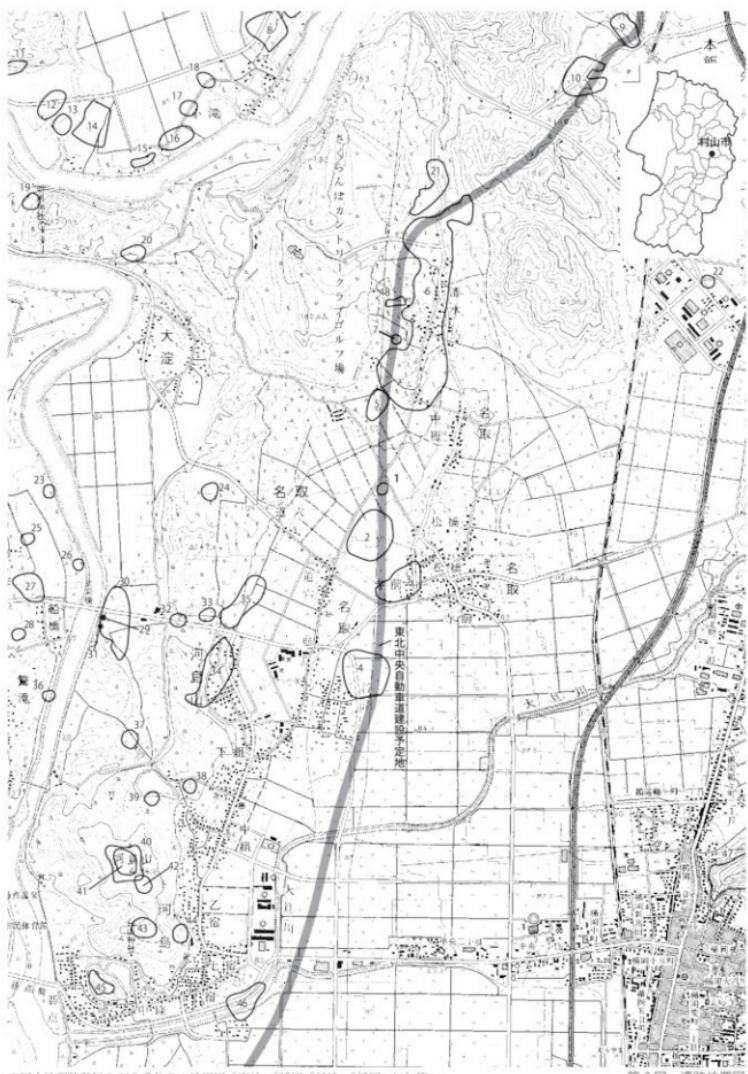
縄文時代の遺跡は、早期から晩期に至るまで各時期の

II 遺跡の位置と環境



※『土地分類基本調査 尾花沢・柄側』山形県企画調整部土地対策課 1979・1981 の地形分類図に加筆

第2図 地形分類図





10m、墳丘の底径は約 36m、高さ約 2.4m、墳丘全周に周溝をめぐらす。日本海側で最北に位置する古墳として注目される（伊豆田 1990）。また、当センターで平成 22 年度に発掘調査を実施した東熊野苗畠遺跡（10）の河川跡から古墳時代前期と考えられる土師器甕片が出土している（山形県埋文 2011）。

奈良・平安時代の遺跡は、当センターが行った平成 22～25 年度の発掘調査によって、村山市の古代の様相がより明らかになりつつある。本遺跡（1）、松橋遺跡（3）、蟻田遺跡（4）、経塚森遺跡（5）、清水遺跡（6）、西原 C 遺跡（34）などが挙げられる。松橋遺跡では、掘立柱建物跡、井戸跡などが検出され、遺物は土師器・須恵器・磁器で、9 世紀後半から 10 世紀前半頃を主体とする集落跡である。経塚森遺跡では、平安時代と考えられる掘立柱建物跡などを検出した（山形理文 2011）。蟻田遺跡では、掘立柱建物跡、河川跡などが検出され、出土遺物は土師器環底部に「定」と書かれた墨書き土器、木製の畜串、人形や鳥形などの祭祀儀礼に使われたと考えられる遺物などが出土している（山形県埋文 2013a）。清水遺跡では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡などが検出され、一部の竪穴住居跡、溝跡などの覆土から西暦 915 年に噴火した十和田火山のものと考えられる灰白色火山灰が確認されている。9 世紀代と考えられる区画溝に囲まれた掘立柱建物群が確認され、大きいもので 3 m × 3 m で、倉庫群の可能性が高いと考えられている。また、これらの建物間で時期差は確認されないとから短時間に建て替えが行われたと考えられている。出土遺物は土師器・須恵器のほか、土師器底面に「繩」「刑」「太」「寺」と書かれた墨書き土器、鉄製紡錘車、鉄滓、轆の羽口などが出土している（山形県埋文 2011・2012・2013）。西原 C 遺跡は、平成 7 年に村山市教育委員会による発掘調査が行われ、掘立柱建物跡、竪穴住居跡などが検出され、中でも掘立柱建物跡は広範囲にわたり 20 棟以上検出されている。出土遺物は、土師器・須恵器のほか、須恵器环底部に「石」と書かれた墨書き土器、土製紡錘車や砥石などの石製品が出土している（村山市教委 1996）。

中世は、河島山遺跡（40・42）、樋岡城（47）などが挙げられる。河島山遺跡は、山頂と東側の山腹と 2 箇所に分かれ、山頂はチャシ一の丸と呼ばれる鉢巻式

遺跡で、空堀と土堤に囲まれた円形の曲輪である。チャシ二の丸は二重の空堀で曲輪は削平されず、自然地形のままである（山形県教委 1996）。両者の築城年代は異なる解釈が出されているが、詳細は不明である。また、河島山からは多数の板碑・五輪塔などが完形・破片を合わせ 70 基以上確認されている。同山を開墾した際に出土したとされているが、現在は山頂の一帯にまとめられている。板碑の石材は、凝灰岩で様式はいずれも成形型を呈し、大きいもので、約 90 cm を測る。明確な時期は不明であるが様式から室町時代末頃から桃山時代初めと考えられている。樋岡城は、村山市街地の北東に隣接する樋山に築かれた連郭式の山城で別名舞鶴城とも呼ばれている。南側の山崩に館があり、館を中心に城下町が開けている。樋山は、嵐岳の西側に伸びる台地で、その先端の西樋山・中樋山から構成される。西樋山は、標高約 209m で山腹は急斜面である。三方に伸びた尾根に大小の曲輪を段々と連続的に配置する。頂上の曲輪も平坦で、櫓などの建造物が築かれていたと考えられている。頂上からは近隣の市町村が一望できる。中樋山の頂上曲輪も平坦で南東部に建物跡が確認されているが、詳細は不明である。曲輪の東西は堀切で区切られており、樋岡城の沿革について『最上樋岡元祖記』には、承元 2 年（1208）に樋山月樋に開城したが 4 代にして没落、弘長元年（1261）に奥州より里見氏が入部して樋岡に開城、本城と名付けたとあり、5 代 144 年間続いたとされる（山形県教委 1996）。室町時代に入り、山形城主斯波兼順の孫、最上満直の四男最上伊予守満国が応永 13 年（1406）に入部、樋岡氏を名乗って満國以後 7 代約 190 年間続く。樋岡城は最上氏にとって北進における重要な拠点であったとされる。

7 代満茂・8 代光直が活躍した近世期に両樋山が城下と共に整備された。満茂は、秋田県南部攻略の中心となつて活躍し、後に秋田湯沢城に移った。以後、樋岡城は最上家臣が交代で勤番するが、元和 2 年（1616）、最上義光の実弟で最後の城主である樋岡光直が封じられた後は、最上氏家中でも重要な地位を築く。光直は 1 万 7 千石を拝領し、領地は樋岡・湯野沢（現湯澤）・樋山及び大石田・井出・深堀（現大石田町）の各村で、最上川を抑える要地であった（小関 1995）。元和 8 年（1622）に最上氏が改易になったことにより、樋岡城は廢城と

なった。また同年の名取村（現在の村山市名取・一部の橋岡地区）は、最上氏領から山形藩領になる。名取村は浮沼・中原・清水・境ノ目の枝郷がある。寛永20年（1643）からは幕府領、安政2年（1855）以降は松前藩領となり変わり、明治期を迎える。

明治維新後の村山市は、行政区画の変遷に伴い旧幕府領は明治2年（1869）に酒田県、また翌年には山形県に編入された。近現代における名取村は、明治11年

（1878）には北村山郡に属し、明治22年（1889）には名取・大淀・長島・河鳥が合併し、西郷村の大字となり、昭和29年から村山市の大字名となった（佐藤2011）。

本遺跡は戦前に行われた開墾や昭和41～43年に行われたは場整備により、擾乱や削平された部分が認められたが平安時代を中心とする遺構・遺物を検出した。

本遺跡の周辺には、先述した清水遺跡、松橋遺跡、蟬田遺跡などが位置している。

#### 引用・参考文献

- 伊豆田忠悦 1990 「村山市」『山形県の地名 日本国歴史地名大系6』 p.475～p.485 平凡社  
小間明 1995 「村山市」『角川 日本地名大辞典 6 山形県』 p.963～p.969 角川書店  
佐藤敏春 2011 「村山市再発見—その姿と心—」  
村山市教育委員会 1996 「西原C遺跡発掘調査報告書」 村山市埋蔵文化財調査報告書第4集  
村山市史編さん委員会編 1981 「村山市史 近世編」 村山市  
村山市史編さん委員会編 1994 「村山市史 近世編」 村山市  
山形県企画調整部 土地対策課 1979 「土地分類基本調査 尾花沢 5万分の1 国土調査」  
山形県企画調整部 土地対策課 1981 「土地分類基本調査 桥岡 5万分の1 国土調査」  
山形県教育委員会 1983 「農林事業関係遺跡（1）発掘調査報告書ー」 山形県埋蔵文化財調査報告書第63集  
山形県教育委員会 1988 「旱房D遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第131集  
山形県教育委員会 1999 「川口遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第151集  
山形県教育委員会 1999 「山形県中央城館遺跡調査報告書 第2集（村山城）」  
山形県教育委員会 2001 「分布調査報告書（27）」 山形県埋蔵文化財調査報告書第201集  
山形県教育委員会 2011 「分布調査報告書（37）山形県内重要遺跡確認調査報告書（3）最上川関連遺跡確認調査報告書（4）押出遺跡確認調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第214集  
山形県教育委員会 2012 「分布調査報告書（38）」 山形県埋蔵文化財調査報告書第215集  
山形県教育委員会 2013 「分布調査報告書（39）山形県内重要遺跡確認調査報告書（5）押出遺跡確認調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第215集  
財團法人山形県埋蔵文化財センター 2011 「年報 平成22年度」  
財团法人山形県埋蔵文化財センター 2012 「作野遺跡第3次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書205集  
公益財團法人山形県埋蔵文化財センター 2012 「年報 平成23年度」  
公益財團法人山形県埋蔵文化財センター 2013a 「年報 平成24年度」  
公益財團法人山形県埋蔵文化財センター 2013b 「北原2遺跡第1・2・2次北原4遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書207集  
公益財團法人山形県埋蔵文化財センター 2014a 「森の原遺跡第3次発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書211集  
公益財團法人山形県埋蔵文化財センター 2014b 「羽黒神社西遺跡発掘調査説明会資料」  
横山寅男・晋田慶信・伊藤清郎・渡邉信 1998 「山形県の歴史」 県史6 山川出版  
横山寅男監修 2003 「図説 村山の歴史」 郷土出版社  
横山寅男監修 2008 「決定版 村山ふるさと大百科」 郷土出版社

### III 調査の成果

#### 1 遺構の概要

本遺跡は、平成22年度に第1次調査（1・2区：2,500 m<sup>2</sup>）、平成24年度に第2次調査（3～5区：2,300 m<sup>2</sup>）を実施し、総面積4,800 m<sup>2</sup>の範囲で調査を実施した。

遺構全体図及び配置図を第4～8図、個別遺構（平断面図）はそれぞれ種別ごとに第11～29図に示した。また、第1次調査の遺構番号は1～13、登録遺物番号は1～119を登録し、第2次調査の遺構番号は21～84、遺物番号は201～235を登録した。

遺構は、竪穴住居跡、竪穴状遺構、炉跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡などを検出した。I区は、遺構を検出すことはできなかった。II区は主に調査区中央から南側にかけて検出した。III区は調査区北側で開闢の際の重機による擾乱が主に確認され、遺構は主に調査区中央部から南西部で検出した。IV区は調査区北側に東西に延びる溝跡とその周辺に土坑を数基数えるのみであった。5区は、3・4区の間を通る農道を6m×21mの範囲で掘削した調査区である。主に竪穴住居跡と溝跡などを検出した。以下に時代別、遺構及び遺物（種別）毎に詳細を述べていく。

#### 2 基本層序

各基本層序を第9・10・12図に掲載した。I区を除いて各地区で基本層を設定した。II区は西壁で3カ所（断面a～c）、東壁で2カ所（断面d～e）設定した。II区西壁は1～9層で、II区東壁は1～6層で構成される。それぞれ大きく4層に分けられる。I層は黒色砂質シルトを主体とする現表土も含む耕作土である（西壁1～2層、東壁1層）。II層は黒色シルトを主体とする田地境界の段構築の盛土と考えられる（西壁3～5層、東壁2・3層）。III層は黒褐色シルトを主体とする旧耕作土である（西壁6～7層）。IV層は地山との漸移層及び遺構検出面であり、黒褐色粘土質シルトを主体とする（西壁8・9層、東壁4～6層）。

3～5区は、それぞれ調査区西壁にて基本層を設定し、

3・4区共に層位は1～5層で構成される。大きく2層に分けられる。I層は黒褐色シルトを主体とする現表土も含む耕作土である（3・4区：1～2層）。II層は一部地山を含めた遺構検出面である（3・4区：3～4層）。3・4区共に5層は地山である。5区基本層序図は第12図のST68断面aである。層位は1～10層であり、大きく2層に分けられる。I層は、黒色シルトを主体とした現代盛土である（1～4層）。II層は遺構検出面であり、旧表土の可能性が考えられる層位である（5層）。7～10層はST68覆土に該当する。

#### 3 平安時代の遺構

##### A 竪穴住居跡・竪穴状遺構

###### ST7 竪穴状遺構（第11図、写真図版3）

2区 CB3599-4005で検出した。南北軸約3.4m、東西軸約2.8mの剛丸方形の遺構である。北東隅は擾乱により切られる。深さは5～20cmを測り、底面は全体的に平坦で浅く窪み、西側や南側の一部は深く落ち込みがみられた。上層は、褐色砂質シルトを主体とした4層である。また外周には、深さ約5cmを測る溝が周囲を巡っており、周溝の可能性がある。平面形や周溝などから竪穴住居跡の可能性と考えられるものの、遺構内にカマドは確認されなかったため、竪穴状遺構とした。遺構中央には、直径約50cmの範囲で炭化物が集中する箇所を検出した。この炭化材について放射性炭素年代測定と炭化材樹種同定の業務委託を行い、その結果、7世紀末から8世紀後半という分析結果を得た。詳しい内容については第Ⅳ章第3節に掲載しているので参照されたい。出土遺物は、土師器片が少量出土した。後述するが、南西に隣接するSL13か跡がST7竪穴状遺構のカマドの可能性がある。

###### ST68 竪穴住居跡（第12図、写真図版15～19）

5区 CB3599-4300～4302、CB3599-4500～4501で検出した。東西辺約4m×南北辺約6.5mの長方形を呈する。上層は、1層から4層が現代盛土、5層



軸方向は、N - 66.5° - Eである。建物の検出長は4.9mである。柱間距離は西から2.3m、2.6mである。柱穴の平面形は円形を呈し、直径は32～34cm、深さは5～12cmである。柱穴土層は、黒色シルトを主体とし、明黄褐色砂ブロックを含む。柱痕は検出されなかった。遺構の時期は、遺物が伴わないと詳しきは不明であるが、平安時代に帰属するものとみなし。

#### SB62 捩立柱建物跡（第15図、写真図版29・30）

3区CB3599-4810、4910で検出した。EB63～65の3基の柱穴で構成され、間取りの詳しきは不明であるが、東西に2間以上の建物跡と考えられる。本来は、2区にも関連する柱穴が存在したと考えられるが、開墾の際の削平により消滅したと思われる。主軸方向は、N - 68° - Eである。建物の検出長は、4.35mである。柱間距離は、西から2.2m、2.15mである。柱穴の平面形は隅丸方形や円形を呈し、直径は26～45cm、深さは20～25cmである。柱穴土層は、黒色～黒褐色シルトを主体とし、明黄褐色砂ブロックを比較的多く含む。遺構の時期は、遺物が伴わないと詳しきは不明であるが、平安時代に帰属するものとみなし。

#### D 井戸跡

##### SE3 井戸跡（第16図、写真図版4）

2区CB3599-4003で検出した。直径1mの円形を呈し、深度は1.3mを測る。断面形は開口部が広く、底がやや狭くなる逆台形状を呈し、底面が平坦となる素掘りの井戸である。土層は8層であり上層が黒色シルトを主体とし、黄褐色粘土を含む。下層はグラウイ化しており、灰白色粘土を主体とする。出土遺物は、土師器皿（12）が出土している。遺構の時期は、出土遺物から9世紀代と考えられる。

##### SE10 井戸跡（第16図、写真図版5）

2区CB3599-3706で検出した。直徑約1.1mで円形を呈し、深さは1.1mを測る。断面形はやや開口部が広く、底面が僅かに狭くなる逆台形状を呈する素掘りの井戸跡である。土層は9層で、上位層は黒色のシルト、下位層は黒色土を含んだ褐色粘土から構成され、グラウイ化している。出土遺物は、内面に黒色塗膜が付着した土師器環（13）、床面から繩と木片が出土している。なお、土師器環（13）について上器内面付着物分析、底面よ

り出土した木片の放射性炭素年代測定及び樹種同定を行った。その結果、<sup>14</sup>C年代は939±21、曆年代範囲（1σ）は1037～1152calADの2つの範囲で示され、平安時代の可能性が高い。これらの詳しきについては第IV章第1・2・5節に掲載しているので参照されたい。遺構の時期は、出土遺物と分析結果から平安時代と考えられる。

#### E 土 坑

##### SK2 土坑（第16図、写真図版8）

2区CB3599-4204～05、CB3599-4304～05で検出した。平面形は、長径3.63m、短径2.5mの楕円形の土坑で深さは32～78cmを測る。断面形は、開口部が狭く内部で広くなる、巾着型を呈する。堆積土の状況から、元々埋立された浅い皿状の土坑があったところに、後から北側を掘り込んだと推定される。南側の深い部分は、浅い皿状の土坑の残りであると思われる。北西側は2段の階段状になっており、そこから南側を掘りこみ、空間をつくりたようである。また、堆積土に黄褐色や褐色のシルトと粘土を多く含む層があり、上層部との不整合が確認できる箇所があった。この層は、遺構の天井部の可能性があり、崩落により堆積したものと思われる。その後、上位層に黒色土を主体とした土が堆積していくと考えられる。出土遺物は、上層の黒色土層から土師器環（14・23）、高台付環（15・16・21・26・27）、皿（17～20・22・24・25）、金属製品（28）が出土した。しかし、下層や底面から遺物は出土していない。また、縄文土器（84）が出土しているが混入と考えられる。遺構の時期は、出土遺物から10世紀代と考えられる。

##### SK12 土坑（第17図、写真図版6）

2区CB3599-3607で検出した。平面形は、長径1m、短径0.88mの楕円形を呈する。深さは39cmを測る。断面形は、開口部が広く、底が狭くなる逆台形状を呈する。土層は黒褐色のシルトと暗褐色のシルトの2層で下層はグラウイ化した粘土質となる。遺構の時期は、遺物が出土していないため詳しきは不明であるが、平安時代に帰属するとみなし。

##### SK21 土坑（第17図、写真図版9）

3区CB3599-5603～5604、3599-5702～5704で検出した。平面形は長径2.4m、短径1.6mの楕円形

### III 調査の成果

を呈し、深さは 18cm を測る。断面形は、底面はやや起伏するもの、ほぼ平坦で外傾して立ち上がる。土層は 4 層で黒色シルトと黒褐色シルトで、地山由来の明黄褐色砂を少量含み、焼土粒と炭を微量含む。出土遺物は、土師器片と礫が出土している。また、遺構底面より検出した炭化材について放射性炭素年代測定により、9 世紀後半から 10 世紀後半（平安時代）の可能性が高いという結果が得られた。詳しい内容について第Ⅳ章第 1 節に掲載しているので参照されたい。遺構の時期は、出土遺物と分析結果から平安時代と考えられる。

#### SK53 土坑（第 18 図、写真図版 32・33）

3 区 CB3598 - 4999 で検出した。平面形は長径 0.75m、短径 0.73m の円形を呈し、深度は 30cm を測る。断面形は、開口部が広く、底が狭くなる逆台形状を呈する。覆土は、黒色シルトを主体とする 2 層で、土層の堆積状況から人為堆積層と考えられる。出土遺物は、土師器皿（29 ~ 31・34）、壺（32・33）が出土している。遺構の時期は、出土遺物から 10 世紀代と考えられる。

#### SK54 土坑（第 18 図、写真図版 32・34）

3 区 CB3599 - 4800 で検出した。SK53 から南に約 50cm に位置する。平面形は、長径が 1m、短径が 0.86m の楕円形を呈し、深さは 34cm を測る。断面形は、開口部が広く、壁面は外傾し、丸底を呈する。土層は、黒色シルトを主体とする 4 層で、堆積状況から人為堆積層と考えられる。出土遺物は、土師器皿（35 ~ 37）、壺（38）が出土している。遺構の時期は、出土遺物から 10 世紀代と考えられる。

#### SK61 土坑（第 18 図、写真図版 35）

4 区 CB3598 - 4099 で検出した。平面形は長径 0.6m、短径 0.44m の楕円形を呈し、深さは 14cm を測る。断面形は、丸底で壁面は外傾して立ち上がる。土層は、黒色シルトと暗褐色砂質シルトの 2 層を主体とする。遺物は出土していない。遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、平安時代に帰属するものとみなしたい。

#### SK75 土坑（第 18 図、写真図版 35）

3 区 CB3599 - 4700 で検出した。平面形は長径 0.56m、短径 0.5m の円形を呈し、深さは 20cm を測る。断面形は、丸底で壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。土層は、黒色シルトと黒褐色シルトを主体とする 3 層で、1・2

層には地山由来の黄褐色砂を含むが、3 層には微量ながらにぶい黄褐色砂質シルトを含む。遺物は出土していない。遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるが、平安時代に帰属するものとみなしたい。

## F 溝 跡

#### SD5 溝跡（第 19 図、写真図版 6・7）

2 区 CB3599 - 4004 ~ 4005、CB3599 - 4104 ~ 4005 で検出した東西方向の溝跡で長さ 5m、幅 0.4 ~ 0.88m、深さは 27cm を測る。断面形は、開口部が広く、底が狭くなる逆台形状を呈する。土層は、3 層で上層が黒色の砂質シルト、中・下層がにぶい黄褐色細砂と黒褐色細砂である。出土遺物は、土師器皿（41・44・46）、皿（39・40・42）、高台付壺（45）、須恵器壺（43）が出土している。遺構の時期は、出土遺物から 9 世紀代と考えられる。

#### SD9 溝跡（第 19 図、写真図版 7・8）

2 区 CB3599 - 4107 ~ 4112 で検出した東西方向の溝跡であり、検出長 21m、溝幅は 0.4 ~ 0.5m、深さは 8cm を測る。断面形は、壁面が緩やかに立ち上がり、底面は多少起伏があるものの、概ね平坦である。土層は黒色シルト主体の單層である。出土遺物は、土師器皿（47・48）、皿（49）が出土している。遺構の時期は、出土遺物から 9 世紀代と考えられる。

#### SD60 溝跡（第 20 ~ 25 図、写真図版 35 ~ 38）

4 区 CB3598 - 4099 ~ 4199、CB3599 - 4000 ~ 4100 で検出した東西方向の溝跡である。検出長 5.8m、幅 0.2 ~ 1m、深さは 10 ~ 30cm を測る。断面 b が最大深度であり、西側に進むにつれ、浅くなる。遺物は、土師器皿（51・52・57 ~ 60・66・67・71 ~ 74）、皿（50・53 ~ 56・63 ~ 65・68 ~ 70）、高台付壺（75・76）、甕（62）が上層から床面にかけて出土した。また土器以外に礫や被熱した礫が多量に出土している。遺構の時期は、出土遺物から 10 世紀代と考えられる。

#### SD60 東側溝跡（第 20・26 図、写真図版 38・39）

5 区 CB3599 - 4101 で検出した。SD60 から東側に約 2.2m 離れた所に位置する。長さ 2.1m、幅 0.4m、深さは 10cm を測る。断面形は、底面が若干の起伏があるものの平坦でほぼ直角に立ち上がる。土層は、黒色シルトを主体とする 3 層である。出土遺物は、土師器皿（77・

79)、皿(78)が出土している。遺構の時期は、出土遺物から10世紀代と考えられる。SD60と同一遺構の可能性がある。

#### SD80溝跡(第27図、写真図版39)

5区CB3598-4499で検出した。ST68の北西隅から伸びる溝跡でST68に切られる遺構である。東西軸で長さ1m、南北軸で1.2m、幅12~62cm、深さは22cmを測る。断面形は、底面が平坦で、壁面は垂直気味に立ち上がる。土層は3層で、黒色シルトと明黄褐色砂が交互に堆積し、灰白色砂ブロックを微量含む。遺物は出土していない。遺構の時期は、遺物が出土していないため詳細は不明であるがST68に切られるため、ST68より以前(古代)と考えられる。

#### SD81溝跡(第27図)

5区CB3599-4300~4301、CB3599-4200~4201で検出した。SD80同様、ST68に切られる溝跡でST68南西側から南側に向かって蛇行し、SX82(複乱)に切られる。検出長4.5m、幅12~52cmを測る。深さは16cmを測る。断面形は、壁面が外傾しながら立ち上がり底面は少々起伏はあるものの平坦である。土層は、黒褐色シルト主体の2層であり、2層共に灰白砂・地山由来の明黄褐色砂を微量含む。遺物は出土していない。遺構の時期は、出土遺物がなく時期の特定は困難であるが、ST68に切られるため、ST68より以前(古代)と考えられる。

### 4 奈良・平安時代の遺物

奈良・平安時代の遺物は、土師器・須恵器・金属製品が出土した。その半数以上が土師器である。以下に出土遺構毎に述べていく。

#### ST68竪穴住居跡(第30・31図、表4、写真図版40~42)

土師器甕(1・5・6・9・10)、环(2~4・8)、須恵器甕(7)の計10点を図示した。1はロクロ成形の土師器甕である。2~4は、ロクロ成形であり、さらに3・4は内面にミガキ及び黒色処理を施す。5はナデ、6は内外面共にカキメ、ハケメ調整を施す。7は、須恵器甕で外面はタタキ、ナデを施す。8は、内外面共に黒色処理を施す。外面はケズリ、ナデのほか、口唇部を角度をつけて立ち上がらせることで稜を呈する。内面はミガキ、ナデを施し、底部は全面にケズリを施す。9・10は、

内外面共にハケメを施す。時期は9世紀後半から10世紀初頭と考えられる。

#### SL13炉跡(第31図、表4、写真図版43)

11は、ロクロ成形の土師器環である。時期は、器形から9世紀代と考えらえる。

#### SE3井戸跡(第31図、表4、写真図版43)

12は、土師器環である。ロクロ成形で底部調整は回転糸切である。時期は、器形から9世紀後半と考えらえる。

#### SE10井戸跡(第31図、表4、写真図版43)

13は、土師器環である。底部が丸みを持ち、体部下半に段を有する器形に特徴がある(有段丸底)。また内面には黒色塗膜が付着しており、業務委託による分析を行った結果、漆と判断された。分析結果の詳細について第IV章第5節にて掲載しているので参照されたい。時期は、器形から8世紀中~後葉と考えられる。

#### SK2土坑(第32・33図、表5、写真図版43・44)

土師器環(14・23)、高台付环(15・16・21・26・27)、皿(17~20・22・24・25)の計14点を図示した。14・15は、内面にミガキ及び黒色処理を施す。环、高台付环、皿共にロクロ成形で底部調整は回転糸切である。時期は、器形から10世紀中~後葉と考えられる。

28は、金属塊である。しかし、坩堝や製鉄関連遺構などは本遺跡では検出していない。同遺構から土師器が出土していることから10世紀代とみなしたい。

#### SK53土坑(第33図、表5、写真図版44)

土師器皿(29~31・34)、环(32・33)の計6点を図示した。环、皿共にロクロ成形で底部調整は回転糸切である。時期は、器形から10世紀中~後葉と考えられる。

#### SK54土坑(第33図、表5、写真図版44・45)

土師器皿(35~37)、环(38)の計4点を図示した。皿、环共にロクロ成形で底部調整は回転糸切である。36の内面には、赤色の付着物が見られ、ベンガラの可能性がある。時期は、器形から10世紀中~後葉と考えられる。

#### SD5溝跡(第34図、表5・6、写真図版45・46)

土師器皿(39・40・42)、环(41・44・46)、高台付环(45)、須恵器环(43)の計8点を図示した。皿、环、高台付环はロクロ成形で底部調整は回転糸切、46は、ナデ、ケズリを施し底部調整はケズリである。44・

### III 調査の成果

45は、内面にミガキ及び黒色処理を施す。43は、焼成不良の褐色を呈した須恵器环である。時期は、器形から9世紀後半と考えられる。

#### SD9溝跡（第34図、表6、写真図版46）

土師器環（47・48）、皿（49）の計3点を図示した。47は、内面にミガキ及び黒色処理を施す。48・49は、ロクロ成形で底部調整（49）は回転糸切である。時期は、9世紀後半と考えられる。

#### SD60溝跡（第34～36図、表6・7、写真図版46～48）

器種は、土師器皿（50・53～56・63～65・68～70）、壺（51・52・57～60・66・67・71～74）、高台付壺（61・75・76）、甕（62）の計27点を図示した。遺物は、上層から床面にかけて出土した（第21～23図）。土師器環、皿、高台付壺はロクロ成形で底部調整は回転糸切である。59・60・66・74・75は内面にミガキ及び黒色処理を施す。61は、内外面にミガキ及び黒色処理を施し、その器形は銅鏡模倣した可能性が考えられ、時期は10世紀代と考えられる。61以外の遺物の時期は、器形から10世紀中葉から後葉と考えられる。

#### SD60東側溝跡（第26・36図、表7、写真図版49）

土師器環（77・79）・皿（78）の計3点を図示した。78は、ロクロ成形で底部調整は回転糸切である。77・79は内面にミガキ及び黒色処理を施す。時期は、器形から10世紀中葉から後葉と考えられる。

#### 遺構外出土遺物（第37・38図、表7、写真図版49）

91は、2区表土から出土した土師器皿である。ロクロ成形で底部調整は回転糸切である。時期は、器形から10世紀中葉・後葉と考えられる。94は、3区CB3599-4501グリッド出土の須恵器环である。時期は、9世紀中頃以降と考えられる。

## 5 近世の遺構と遺物

### A 近世の遺構

#### SD74溝跡（第28図、写真図版39）

3区CB3599-4900で検出した。北西方向に延びる溝跡で、東西方向の擾乱溝に切られる。長さ2.5m、幅12～32cm、深さは8cmを測る。断面形は、底面が平坦で壁面はやや外傾しながら立ち上がる。土層は、黒色シルトと地山由来の褐色シルトを主体とする2層であ

る。遺物は、遺構上面から磁器染付碗（89）が出土している。遺構の時期は、出土遺物から19世紀代と考えられる。

#### SD78溝跡（第27図、写真図版39）

5区CB3598-4599、CB3599-4500で検出した。東西に延びる溝である。検出長2.48m、幅50cm、深さは14cmを測る。断面形は、開口部がやや広い逆台形状を呈する。土層は、黒色シルトと地山由来の明黄褐色砂を主体とする2層であり、上下層共に灰白砂ブロックを微量含む。遺物は、磁器染付碗（90）が出土した。遺構の時期は、出土遺物から19世紀と考えられる。

### B 近世の遺物

出土した近世遺物は、陶磁器のみである。産地別にまとめて記述する。

#### （1）肥前系磁器（第37・38図、表8、写真図版49）

83は、外面に青磁釉を施す。時期の詳細は不明である。88-89-96は、磁器染付碗である。88は、外面に綾杉文、内面には團線を施す。時期は、1780～1810年頃と考えられる。89は、外面に文様を施すが、破片であるため文様の全容が分からず不明である。時期は、19世紀と考えられる。96は、3区表土から出土した。外面に二重網目文を施す。時期は、18世紀前半と考えられる。

#### （2）產地不明陶磁器（第36～38図、表8、写真図版49）

81・82は、SK8覆土から出土しそれぞれ磁器皿（81）、磁器碗（82）である。81は内外面共に口紅、透明釉を施す。82も透明釉を施す。時期は、81・82共に19世紀と考えられる。87は、陶器擂鉢である。内面には卸目が付され、さらに内外面に鉄釉を施す。時期は、19世紀から近代と考えられる。90・92は、磁器染付碗である。90は、瑠璃釉を施し時期は19世紀と考えられる。92は、外面に山水文と思われる文様を施す。時期は19世紀と考えられる。95は、3区CB3598-5299グリッド内で出土した陶器擂鉢である。調整はナデと内面に卸目を付し、さらに内外面には鉄釉を施す。時期は18世紀と考えられる。

## 6 近現代の遺構と遺物

### A 近現代の遺構

#### SK4 土坑（第 28 図、写真図版 8）

2 区 CB3599 - 3804 で検出した。平面形は、直径 1.8 m の円形、深さは 58cm である。断面形は、壁面がほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。土層は黒色のシルトを主体とする 6 層であり、上層は砂質、下層は粘土質である。また、壁面と底面は、黄褐色粘土と粗めの砂が混ぜられた土で塗り固められていた。これは水漏れを防ぐための措置で、貯水槽として機能していたと推測される。出土遺物は、磁器皿（80）、ガラス製のおはじき（85）、ガラス製の手回しコマ（85）が出土している。遺構の時期は、出土遺物から近現代と考えられる。

#### SK8 土坑（第 29 図、写真図版 8）

2 区 CB3599 - 3805 で検出した。SK4 の南東角に隣接する。平面形は、2.5 m 四方の隅丸方形型で、深さは 40 ~ 68cm である。断面形は、壁面は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。土層は、黒色シルトを主体とした 12 層である。出土遺物は、磁器皿（81）・碗（82）が出土している。また床面中央には、80cm 四方で厚さ 5cm の砂の含有量が多いコンクリート製のブロックが 2 枚並んで配されていた。またブロック上面やその周辺からは多数の礫のほか、ガラス片、木片などが出土している。遺構の時期は、底面からコンクリートブロックが出土していることから近現代と考えられる。しかし、どのような目的で機能していたものかは不明である。

### B 近現代の遺物

出土した近現代遺物は、磁器、ガラス製品である。磁器は産地別にまとめて記述する。

#### （1）瀬戸・美濃系磁器（第 36 図、表 8、写真図版 49）

80 は、磁器皿である。文様は銅版転写によるもので内面中央に旧字体の「祝」、その周りには日章旗と旭日旗を施している。時期は、明治以降と考えられる。

#### （2）産地不明磁器（第 38 図、表 8、写真図版 49）

97 は、3 区 CB3599 - 5403 グリッド出土の磁器碗である。内外面には、なまこ釉を施す。時期は、明治以降と考えられる。

#### （3）ガラス製品（第 37 図、表 12、写真図版 8）

85 は、直径 42mm のガラス製の手回しコマである。軸の先端部は一部とつまみ部分が欠損し、残存値は約 17mm を測る。色は透明である。時期は、近代以降と考えられる。86 は、ガラス製のおはじきである。直径約 1.3mm の円形で厚さは 4mm を測る。色は 85 と同様である。ガラス製のおはじきは明治時代後半から使用されるようになった。時期は、明治後半以降と考えられる。

## 7 その他の遺物

#### （1）縄文土器（第 36 図、表 10、写真図版 49）

84 は、2 区 SK2 から出土した縄文土器（深鉢）である。縄文は RL で内面には炭化物が付着する。器厚が薄く縄文の筋が細かいことから、時期は晩期と考えられる。

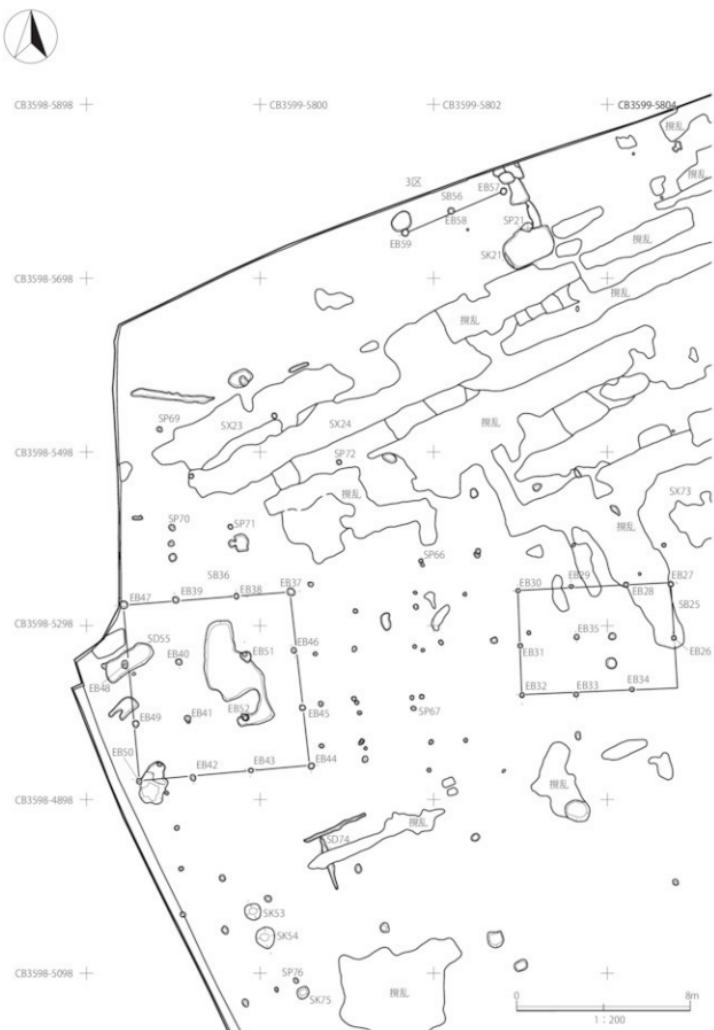
#### （2）石器（第 37 図、表 11、写真図版 49）

93 は、4 区表土出土の珪質頁岩製の削片である。形状から石刀の可能性がある。

III 調査の成果

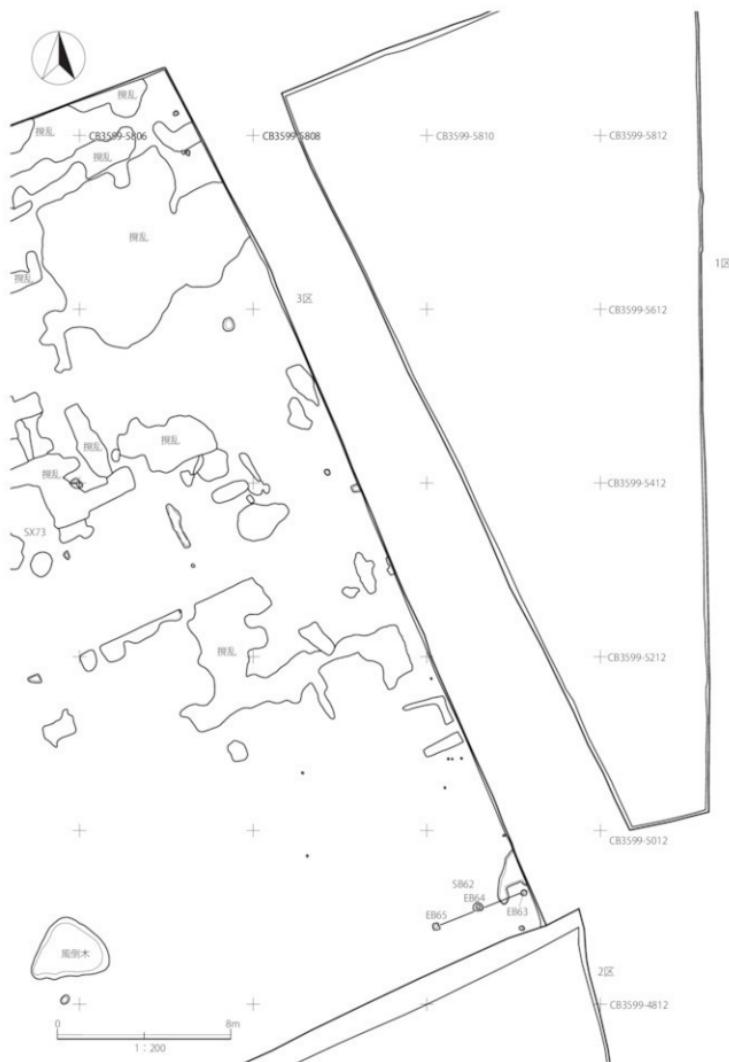


第4図 遺構配置全体図

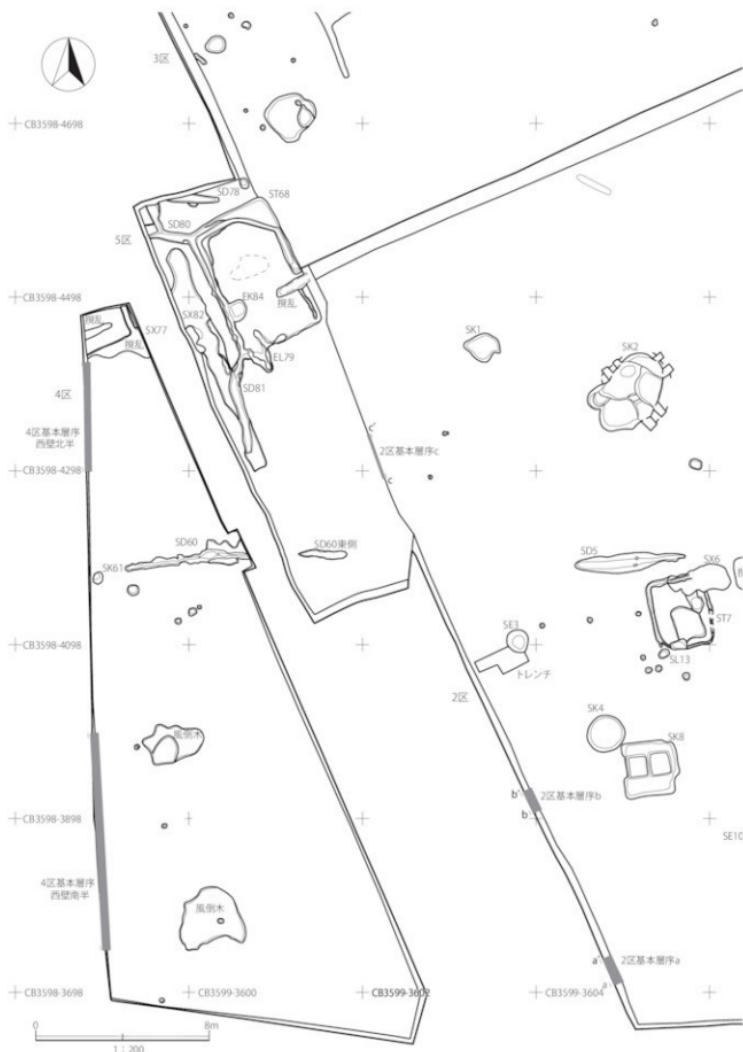


第5図 遺構配置詳細図(1)

III 調査の成果



第6図 遺構配置詳細図（2）

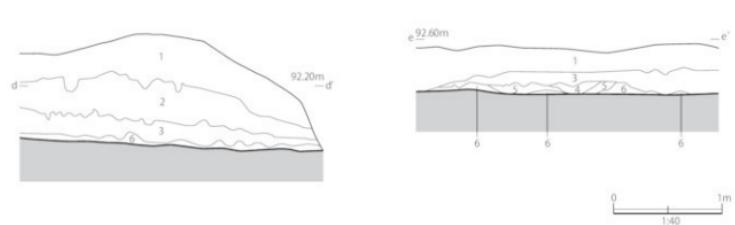
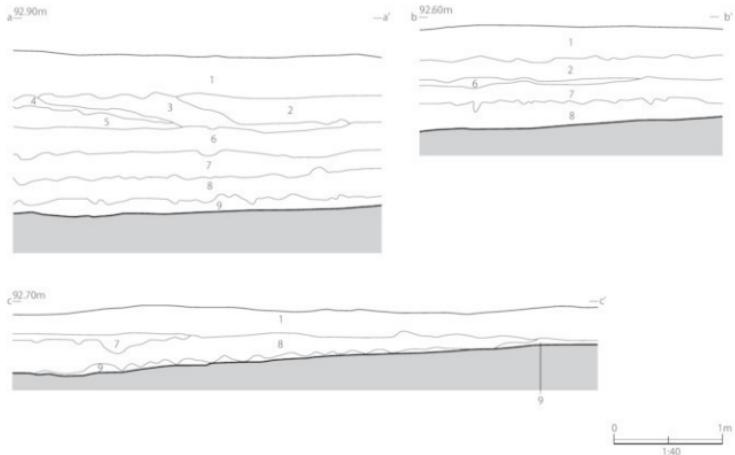


第7図 遺構配置詳細図（3）

III 調査の成果

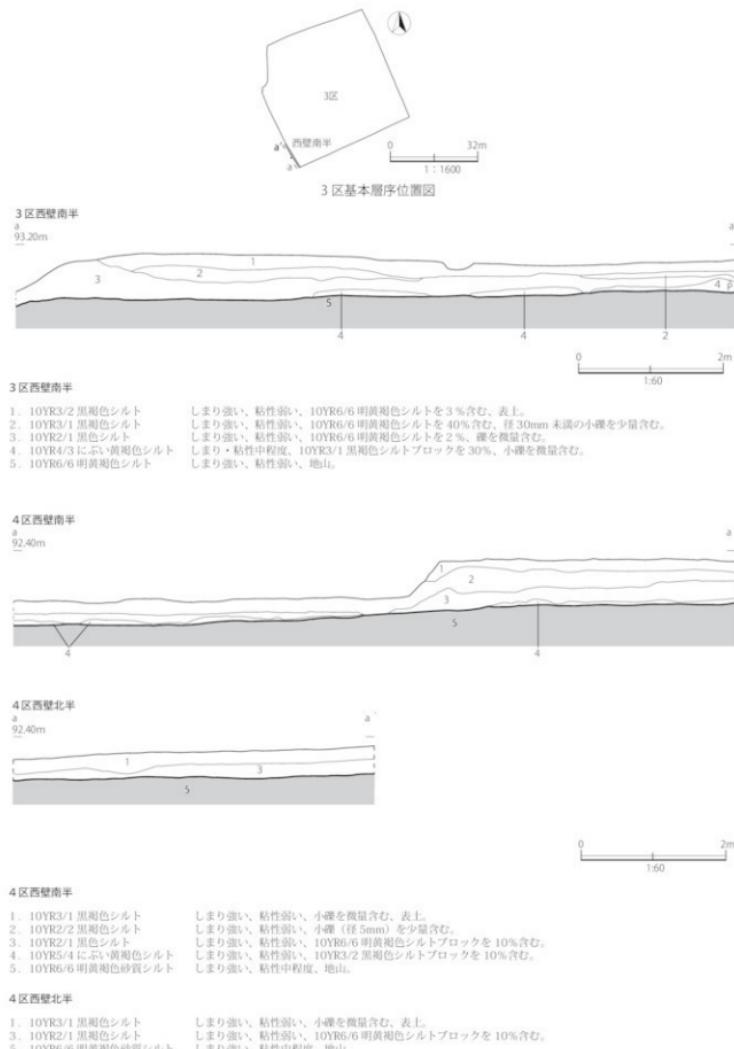


第8図 遺構配置詳細図(4)

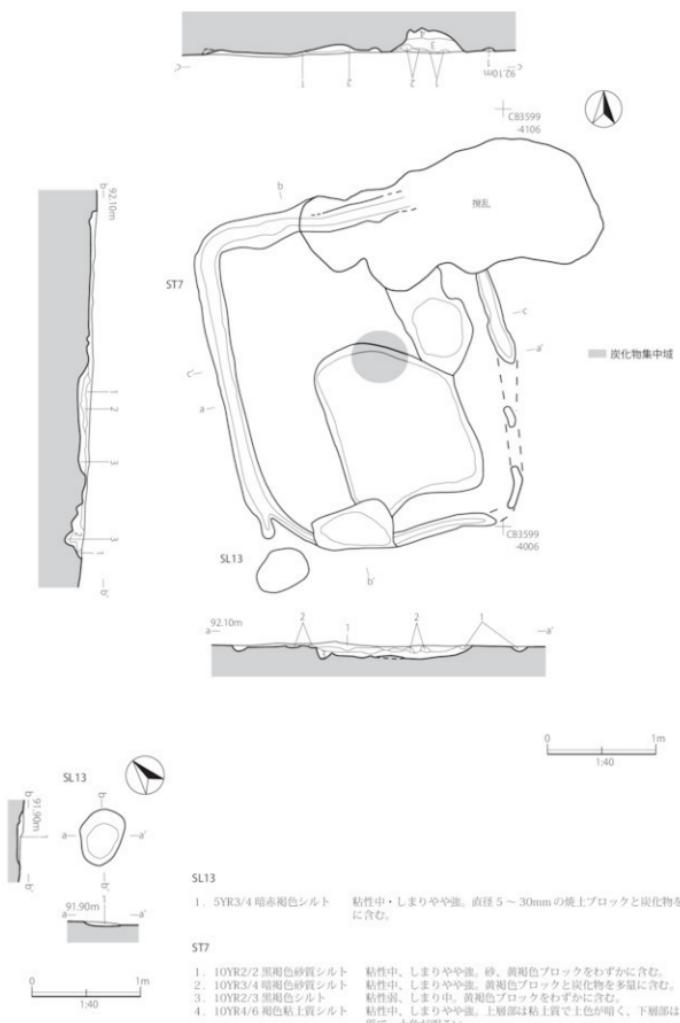


第9図 2区基本層序

### III 調査の結果

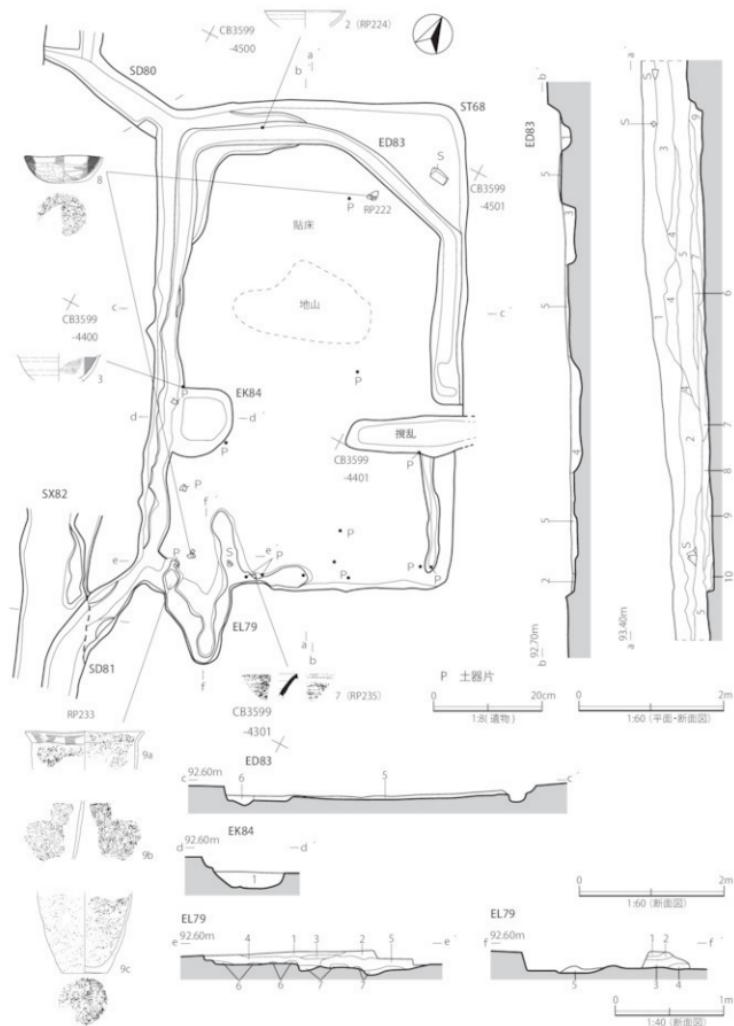


第10図 3・4区基本層序



第11図 ST 7 穴状遺構、SL13 炉跡

III 調査の成果



第12図 ST68 穫穴住跡

## ST68 (a - a')

1. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明褐色砂ブロックを 15%含む、礫を多量に含む。現代盛土。
2. 10YR0/4 にぶい黄褐色粘質シルト しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明褐色砂を 5%含む。風化土。
3. 10YR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明褐色砂ブロックを 10%含む。現代盛土。
4. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明褐色砂ブロックを 25%含む。現代盛土。
5. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性やや弱い。10YR4/6 黄褐色シルトブロック (径 5mm 程度) を 1%含む。旧表土か。
6. 10YR2/1 黑色シルト しまりやや強い、粘性弱い。10YR4/6 黄褐色シルトブロック (径 5mm 程度) を 2%含む。10YR7/3 にぶい黄褐色シルトブロック (径 20 ~ 40mm) を 5%含む。火山灰の可能性あり。
7. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR4/6 黄褐色シルトブロック (径 5mm 程度) を 3%含む。
8. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR4/6 黄褐色シルトブロック (径 5mm 程度) を 5%含む。
9. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR4/4 黄褐色砂質シルトブロック (径 5 ~ 20mm) を 10%含む。
10. 10YR2/2 黄褐色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR4/4 黄褐色砂質シルトブロック (径 5 ~ 20mm) を 30%含む。

## ST68 (エレベーション、b - b' c - c')

1. 10YR3/1 黑褐色シルト しまり中程度、粘性弱い。10YR6/8 明褐色シルトブロックを 5%含む。
2. 10YR2/2 黄褐色シルト しまり強い、粘性やや弱い。10YR4/6 黄褐色シルトブロックを 20%含む。
3. 10YR2/2 黄褐色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR5/8 黄褐色シルトブロック・10YR4/4 黄褐色シルトブロックを 40%含む。
4. 10YR4/4 黄褐色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR2/1 黑色シルトブロックを 30%、10YR4/6 黄褐色シルトブロックを 20%含む。
5. 10YR4/4 黄褐色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR2/1 黑色シルトブロックを 30%含む。
6. 10YR3/1 黑褐色シルト しまり中程度、粘性弱い。10YR6/6 明褐色シルトブロックを 10%含む。

## ST68EK84 (d - d')

1. 10YR2/1 黑色シルト しまりやや強い、粘性弱い。10YR6/6 明褐色シルトブロックを 20%含む。

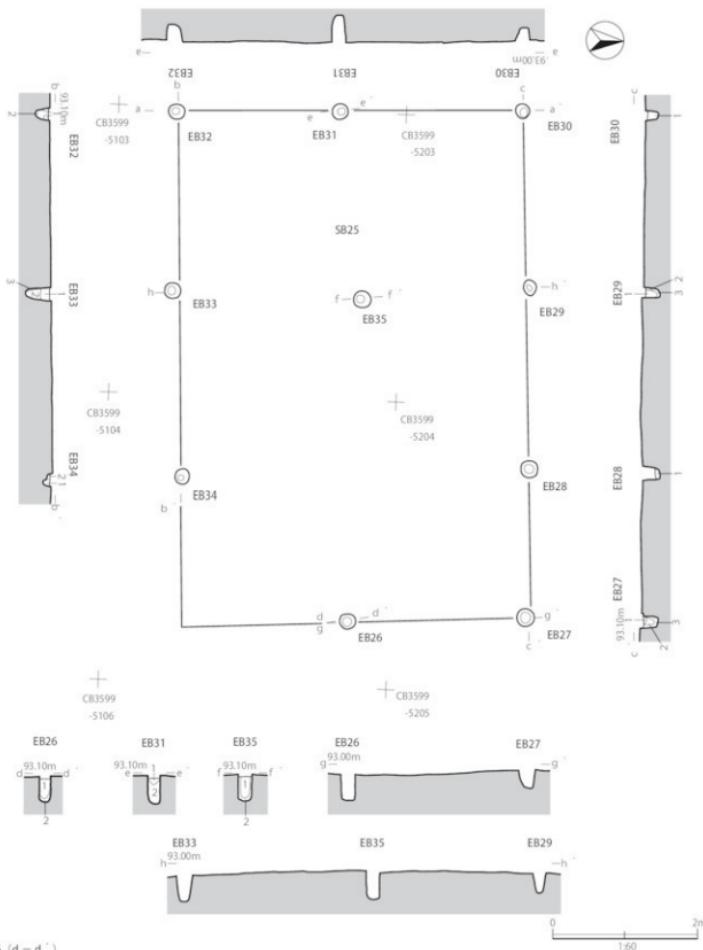
## ST68EL79 (e - e')

1. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明褐色シルトブロックを 3%含む。
2. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明褐色シルトブロックを 7%含む。焼土粒を微量含む。
3. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR8/1 灰白色を 2%、10YR6/6 明褐色シルトブロックを 1%含む。
4. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明褐色シルトブロックを 10%含む。焼土粒を微量含む。
5. 10YR3/1 黄褐色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明褐色シルトブロックを 20%含む。
6. 10YR3/1 黄褐色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明褐色シルトブロックを 3%含む。
7. 10YR3/1 黄褐色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明褐色シルトブロックを 7%含む。

## ST68EL79 (f - f')

1. 7.5YR3/2 黄褐色シルト しまり強い、粘性弱い。上面剥ける。焼土粒を含む。
2. 7.5YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。焼土粒を 5%含む。
3. 10YR2/2 黄褐色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR4/6 黄褐色砂質シルトブロックを 15%，焼土粒を 5%含む。
4. 7.5YR5/8 明褐色砂質シルト しまり強い、粘性弱い。
5. 10YR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。10YR4/6 黄褐色シルトブロックを 10%、10YR5/6 黄褐色シルトブロック (径 10mm) を 5%含む。

### III 調査の結果



EB26 (d - d')

1. 10YR2/1 黒褐色シルト
2. 10YR2/1 黒褐色シルト

しまり強い、粘性弱い。10YR6/6明黄褐色シルトブロックを2%含む。

しまり強い、粘性弱い。10YR6/6明黄褐色シルトブロックを5%含む。

EB27 (c - c')

1. 10YR2/1 黒褐色シルト
2. 10YR3/1 黑褐色シルト
3. 10YR3/1 黑褐色シルト

しまり強い、粘性弱い。10YR6/6明黄褐色シルトブロックを1%含む。

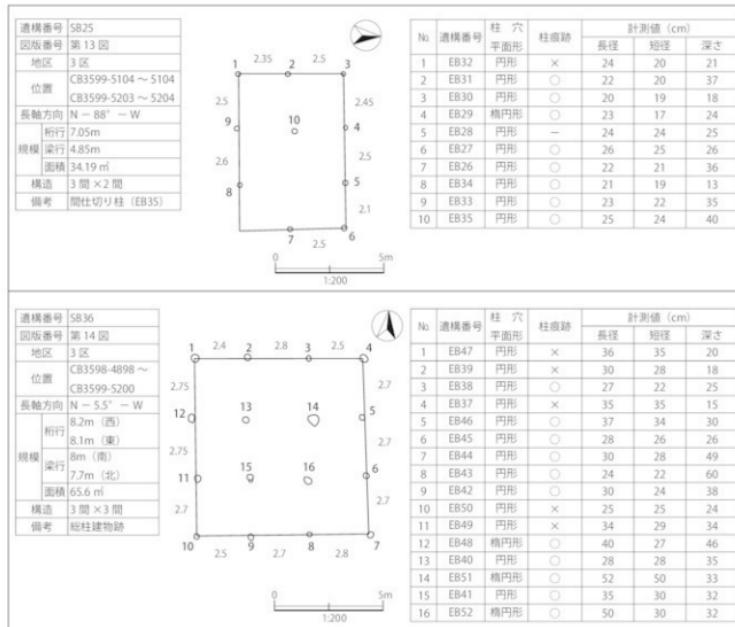
しまり強い、粘性弱い。10YR6/6明黄褐色シルトブロックを5%含む。

しまり強い、粘性弱い。10YR6/6明黄褐色シルトブロックを10%含む。

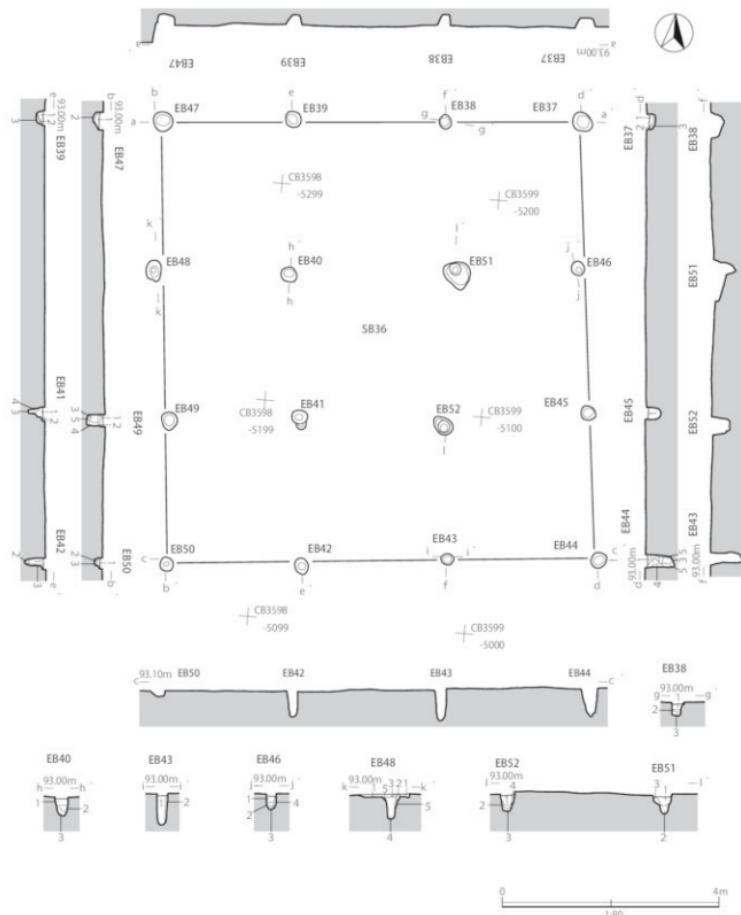
第13図 SB25 捩立柱建物跡

<b>EB28 (c - c')</b>	
1. 10YR2/1 黒色シルト	しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 3% 含む。
<b>EB29 (c - c')</b>	
1. 10YR2/1 黒色シルト	しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 10% 含む。
2. 10YR3/1 黄褐色シルト	しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 5% 含む。
3. 10YR3/1 黑褐色シルト	しまり強い、粘性弱い。
<b>EB30 (c - c')</b>	
1. 10YR2/1 黒色シルト	しまり中程度、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 30% 含む。
<b>EB31 (e - e')</b>	
1. 10YR2/1 黑色シルト	しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 シルトブロックを 5%、2.5Y8/2 灰白粘質シルトをブロックを 2% 含む。
2. 10YR2/1 黑色シルト	しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 3% 含む。
<b>EB32 (b - b')</b>	
1. 10YR2/1 黑色シルト	しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 10%、小礫を微量含む。
2. 10YR2/1 黑色シルト	しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 3% 含む。
<b>EB33 (b - b')</b>	
1. 10YR2/1 黑色シルト	しまり中程度、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 3% 含む。
2. 10YR3/1 黄褐色シルト	しまり中程度、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 15% 含む。
3. 10YR2/1 黄褐色シルト	しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 2% 含む。
<b>EB34 (b - b')</b>	
1. 10YR5/6 黄褐色シルト	しまり強い、粘性弱い。10YR2/1 黑色シルトブロックを 30% 含む。
2. 10YR3/1 黄褐色シルト	しまり強い、粘性弱い。2.5Y8/2 灰白色粘質シルトブロックを 1% 含む。
<b>EB35 (f - f')</b>	
1. 10YR2/1 黑色シルト	しまり中程度、粘性弱い。10YR 明黄褐色シルトブロックを 1%、小礫を微量含む。
2. 10YR2/1 黑色シルト	しまり中程度、粘性弱い。10YR 明黄褐色シルトブロックを 5% 含む。

表 3 SB25・36 捶打柱建物跡調査表



### III 調査の結果



第14図 SB36 捩立柱建物跡

**EB38 (g - g')**

1. IOYR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂質シルトブロックを 1%含む。
2. IOYR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 10%含む。
3. IOYR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 5%含む。

**EB39 (e - e')**

1. IOYR2/1 黒色シルト しまり中程度、粘性弱い。 IOYR8/2 灰白色砂質シルトブロック (径 5mm) を 3%含む。
2. IOYR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 5%含む。
3. IOYR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 10%含む。

**EB40 (h - h')**

1. IOYR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 1%含む。
2. IOYR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 5%含む。
3. IOYR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 1%含む。

**EB41 (e - e')**

1. IOYR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 1%含む。
2. IOYR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 3%含む。
3. IOYR2/1 黒色シルト しまり中程度、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 15%含む。
4. IOYR6/6 明黄褐色砂 しまり強い、粘性弱い。 IOYR2/1 黒色シルトブロックを 5%含む。

**EB42 (e - e'')**

1. IOYR3/1 黒褐色シルト しまり・粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 1%含む。
2. IOYR2/1 黒色シルト しまり弱い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 10%含む。 IOYR2/1 黒色シルトブロックを 5%含む。
3. IOYR3/1 黑褐色シルト しまり弱い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 3%含む。

**EB43 (d - i')**

1. IOYR2/1 黒色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 1%含む。
2. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 3%含む。

**EB44 (d - d')**

1. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロック (径 5 ~ 10mm) を 2%含む。
2. IOYR2/1 黑色シルト しまり中程度。粘性弱い。 IOYR3/2 黑褐色シルトブロックを 10%含む。
3. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 3%含む。
4. IOYR6/6 明黄褐色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR3/1 黑褐色シルトブロックを 10%含む。
5. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色シルトブロックを 1%含む。

**EB45 (d - d'')**

1. IOYR2/1 黑色シルト しまり中程度。粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 5%含む。

**EB46 (j - j')**

1. IOYR2/1 黑色シルト しまり中程度。粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色シルトブロック (径 5 ~ 50mm) を 30%含む。 IOYR8/2 灰白粘土シルトブロックを 15%含む。
2. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR8/2 灰白粘土シルトブロックを 5%含む。
3. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色シルトブロックを 5%含む。
4. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR8/2 灰白粘土シルトブロックを 10%含む。

**EB47 (b - b')**

1. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 1%含む。
2. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 5%含む。

**EB48 (k - k')**

1. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 1%含む。 構の覆土 (SD55)、中・近世か。
2. IOYR2/1 黑色シルト しまり弱い、粘性弱い。 是れ。
3. IOYR3/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 10%含む。
4. IOYR2/1 黑色シルト しまり中、粘性弱い。 IOYR7/6 明黄褐色粘土質シルトブロックを 10%含む。
5. IOYR2/1 黑色シルト しまり弱い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 5%含む。

**EB49 (b - b'')**

1. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 3%含む。
2. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 20%含む。
3. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 5%含む。
4. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 10%含む。
5. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 3%含む。

**EB50 (b - b'')**

1. IOYR2/1 黑色シルト しまり中程度、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 1%含む。
2. IOYR2/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 5%含む。
3. IOYR2/1 黑褐色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 2%含む。

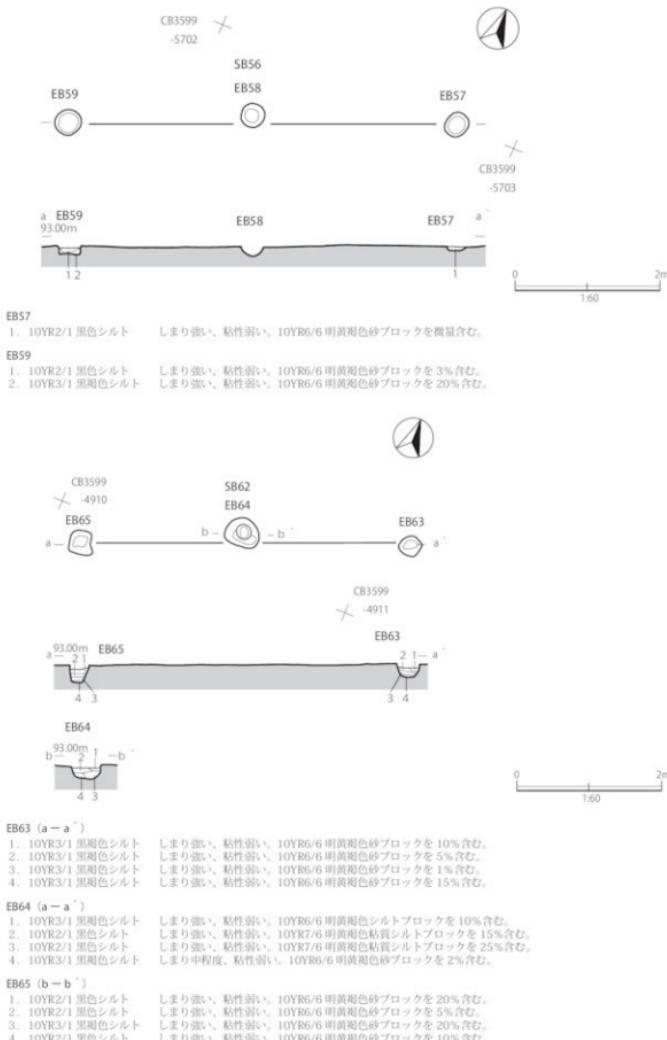
**EB51 (l - l')**

1. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂質シルトブロックを 3%含む。
2. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂質シルトブロックを 1%含む。
3. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂質シルトブロックを 10%含む。

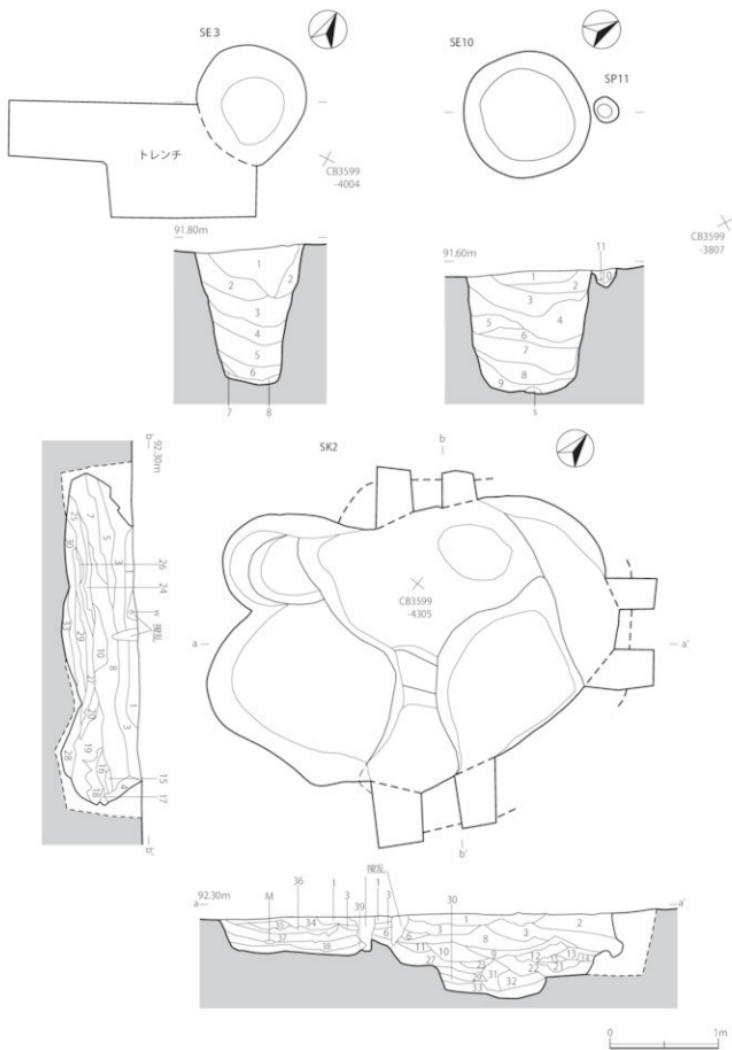
**EB52 (l - l'')**

1. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 7%含む。
2. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 5%含む。
3. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 20%含む。
4. IOYR2/1 黑色シルト しまり強い、粘性弱い。 IOYR6/6 明黄褐色砂ブロックを 10%含む。 塗物 (径 5mm) を微量含む。

### III 調査の結果



第15図 SB56・62 捩立柱建物跡



第16図 SE3・10井戸跡、SP11柱穴・ピット、SK2土坑

### III 調査の成果

#### SE3

1. 10YR1/7 黒色シルト
2. 10YR2/1 黒色シルト
3. 10YR3/1 黒褐色シルト
4. 7.5YR2/1 黑色シルト
5. 7.5YR1/7.1 黑色シルト
6. N1.5/0 黒色シルト
7. 2.5GY8/1 灰白色粘土
8. 2.5GY8/1 灰白色粘土

粘性弱・しまり弱。直徑1～30mmの黄褐色粘土ブロックをわずかに含む。  
 粘性・しまり中。直徑5～100mmの白色・黄褐色粘土ブロックをわずかに含む。  
 粘性・しまり中。白色・黄褐色粘土を多量に含む。  
 粘性・しまり中。白色・黄褐色粘土を上層部に多く含む。  
 粘性強・しまり強。白色・黄褐色粘土をわずかに含む。  
 粘性強・しまり中。下層部に約5mm厚の褐鐵の表面がみられる。  
 N1.5/0 黒色シルトと互解。粘性強・しまり中。  
 N1.5/0 黑色シルトと互解。粘性強・しまり中。7層とは不整合。

#### SE10・SP11

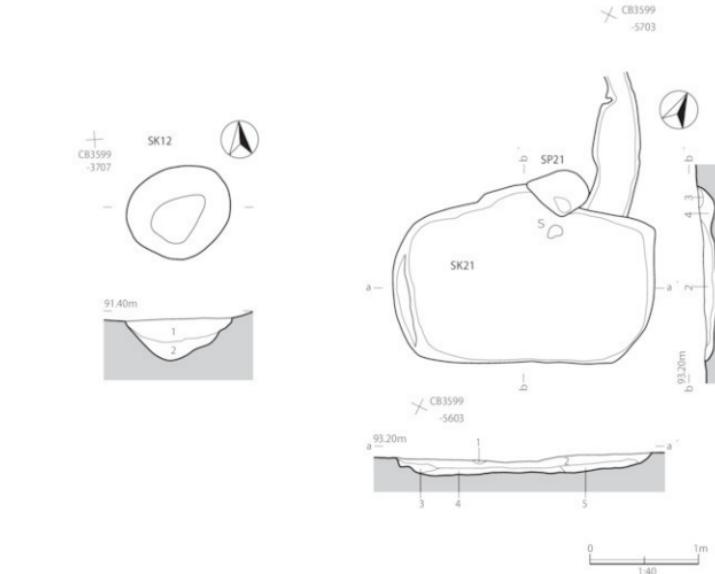
1. 7.5YR1/7 黑色砂質シルト
2. 7.5YR1/7 黑色シルト
3. 7.5YR5/4 にぶい褐色砂質粘土
4. 2.5YR2/1 黑色シルト
5. 2.5YR1/7 黑色シルト
6. 10YR7/6 明褐色粘土
7. 10YR5/6 黄褐色粘土
8. 10YR7/6 黄褐色粘土
9. 2.5YR2/1 黑色シルト
10. 2.5YR2/1 黑色シルト
11. 10YR3/4 褐褐色砂質シルト

粘性弱・しまりやや強。直徑5～30mmの白色・黄褐色粘土ブロックを多量に含む。  
 粘性・しまり中。直徑10～50mmの白色・黄褐色粘土ブロックを多量に含む。  
 粘性強・しまり強。黒色土をわずかに含む。  
 粘性中・しまり弱。白色・黄褐色粘土を多量に含む。  
 粘性中・しまり強。直徑5mmの白色・黄褐色粘土質ブロックをわずかに含む。  
 粘性強・しまり強。直徑50mm以上の褐色粘土ブロックからなる。黒色土をわずかに含む。  
 粘性・しまり強。黒色土を多量に含む。  
 粘性・しまり強。黒色土を多量に含む。  
 粘性・しまり中。直徑5～10mmの白色・黄褐色粘土ブロックをわずかに含む。直徑20mm以下の礫塊を含む。  
 粘性弱・しまりやや強。直徑5～10mmの黄褐色シルトブロックをわずかに含む。  
 粘性弱・しまり強。黒色土をわずかに含む。地山との漸移層。

#### SK2

1. 7.5YR1/7 黑色砂質シルト
2. 7.5YR2/2 黑褐色砂質シルト
3. 7.5YR2/1 黑色の質シルト
4. 5YR2/1 黑褐色砂質シルト
5. 5YR2/1 黑褐色粘土質シルト
6. 5YR1/7.1 黑色シルト
7. 10YR1/7.1 黑色シルト
8. 10YR2/2 黑褐色シルト
9. 10YR2/2 黑褐色シルト
10. 10YR2/2 黑色シルト
11. 7.5YR2/1 黑褐色シルト
12. 10YR2/2 黑褐色シルト
13. 7.5YR2/1 黑色の質シルト
14. 7.5YR5/4 にぶい褐色砂質粘土
15. 10YR4/4 褐褐色質シルト
16. 10YR1/7 黑色シルト
17. 7.5YR2/1 黑色シルト
18. 10YR1/7 黑色シルト
19. 10YR2/2 黑褐色シルト
20. 10YR2/1 黑色シルト
21. 10YR2/2 黑褐色シルト
22. 10YR4/6 褐色粘土
23. 10YR2/1 黑色シルト
24. 10YR4/4 褐色粘土
25. 10YR2/1 黑色粘土質シルト
26. 10YR1/7.1 黑色シルト
27. 7.5YR4/3 褐色粘土
28. 7.5YR8/4 浅褐色粘土
29. 10YR2/2 黑色粘土質シルト
30. 7.5YR5/8 明褐色粘土
31. 10YR2/2 黑褐色シルト
32. 10YR1/7 黑色シルト
33. 7.5YR7/6 棕褐色粘土
34. 7.5YR2/2 黑褐色シルト
35. 7.5YR3/2 黑褐色砂質シルト
36. 7.5YR7/8 黄褐色シルト
37. 7.5YR1/7 黑色砂質シルト
38. 7.5YR4/4 褐色粘土質シルト
39. 7.5YR2/3 暗褐色褐色シルト

粘性弱・しまりやや強。直徑5～30mmの黄褐色シルトブロックをまばらに含む。  
 粘性弱・しまりやや強。黄褐色シルト・褐色土上層部を多量に含む。  
 粘性弱・しまりやや強。直徑5～30mmの黄褐色シルトブロックが1より多く含む。  
 粘性中・しまり弱。直徑5～10mmの褐色砂質シルトブロックをまばらに含む。  
 粘性弱・しまりやや強。黄褐色粘土質ブロックを多量に含む。  
 粘性弱・しまり中。直徑5mmの褐色砂質シルトを含む。  
 粘性弱・しまり強。直徑1～5mmの褐色砂質シルトブロックを多量に含む。  
 粘性弱・しまり強。直徑5～50mmの黄褐色粘土質シルトを多量に含む。  
 粘性弱・しまり強。直徑5mmの褐色砂質シルトを含む。  
 粘性弱・しまり強。直徑5～50mmの褐色砂質シルトを含む。  
 粘性弱・しまり強。直徑5～10mmの褐色砂質シルトブロックをまばらに含む。  
 粘性弱・しまり強。直徑5～30mmの褐色砂質シルトブロックを多量に含む。  
 粘性弱・しまり強。直徑5～50mmの褐色砂質シルトを含む。  
 粘性弱・しまり強。直徑5mmの褐色砂質シルトを含む。  
 粘性弱・しまり強。直徑5～50mmの褐色砂質シルトを含む。天井の崩落上。  
 粘性弱・しまり中。直徑1～5mmの褐色砂質シルトを含む。天井の崩落上。  
 粘性弱・しまり中。直徑1～5mmの褐色砂質シルトを含む。天井の崩落上。  
 粘性中・しまり弱。直徑1～5mmの褐色砂質シルトを含む。天井の崩落上。  
 粘性中・しまり強。直層部で1～5mmの褐色砂質シルトを含む。下層部で7.5YR3/4 暗褐色砂質粘土を含む。  
 粘性弱・しまり中。直徑1～5mmの褐色砂質シルトブロックをまばらに含む。天井の崩落上。  
 粘性弱・しまり強。直徑1～5mmの褐色砂質シルトを含む。天井の崩落上。  
 粘性弱・しまり強。直徑1～5mmの褐色砂質シルトを含む。天井の崩落上。  
 粘性弱・しまり強。直徑1～5mmの褐色砂質シルトを含む。天井の崩落上。  
 粘性弱・しまり強。直徑1～5mmの褐色砂質シルトを含む。天井の崩落上。  
 粘性弱・しまり強。直徑1～5mmの褐色砂質シルトを含む。天井の崩落上。  
 粘性弱・しまり強。直徑1～5mmの褐色砂質シルトを含む。天井の崩落上。  
 粘性弱・しまり強。直徑1～5mmの褐色砂質シルトを含む。天井の崩落上。  
 粘性弱・しまり強。直徑1～5mmの褐色砂質シルトを含む。天井の崩落上。  
 粘性弱・しまり強。直徑1～5mmの褐色砂質シルトを含む。天井の崩落上。

**SK12**

1. 10YR2/2 黒褐色シルト
2. 10YR3/1 黒褐色シルト

粘性強。しまりやや強。砂をわずかに含む。  
粘性強。しまりやや強。部分的に褐鉄の集積が見られる。

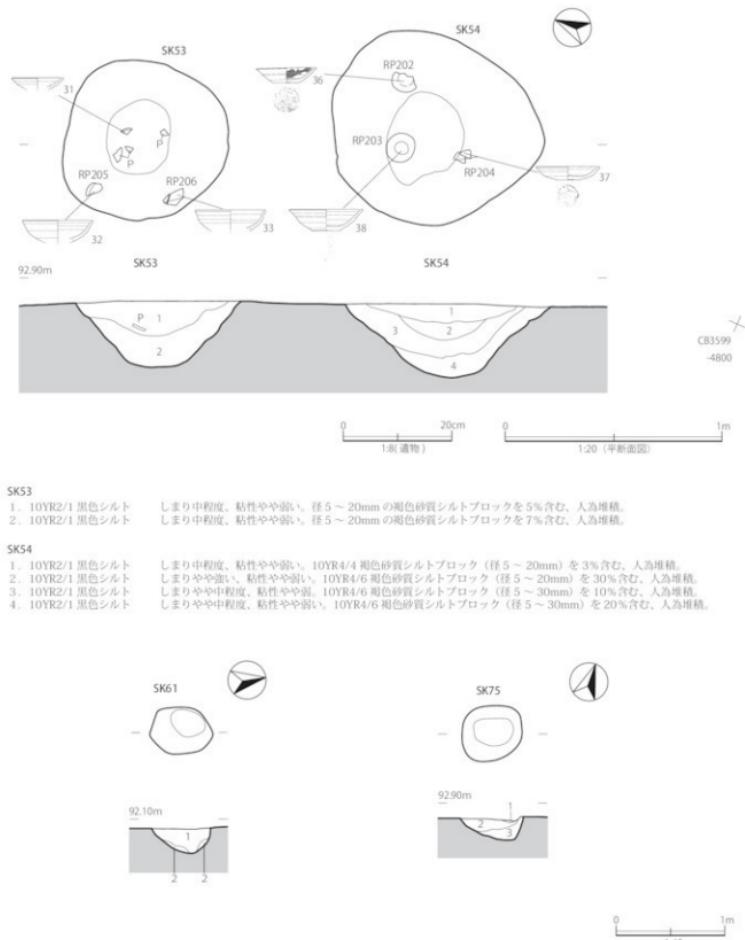
**SK21**

1. 10YR3/1 黒褐色シルト
2. 10YR3/1 黑褐色シルト
3. 10YR2/1 黒色シルト
4. 10YR3/1 黑褐色シルト
5. 10YR2/1 黑褐色シルト

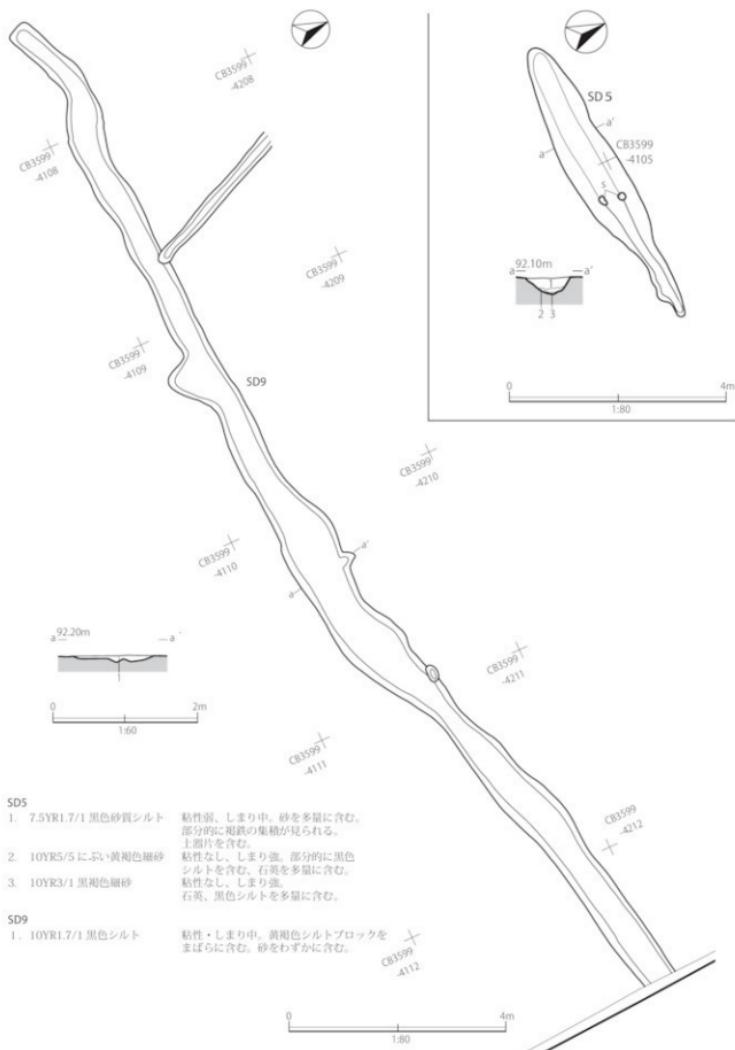
しまり強い、粘性弱い。2.5YR4/6 赤褐色シルトブロックを 50%、礫土粒・炭化物を微量含む。  
しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 15%、礫土を 7%、炭化物を微量含む。  
しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色シルトブロック・礫土粒・炭化物微量含む。  
しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 40% 含む。  
しまり中程度、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを 10% 含む。

第 17 図 SK12・21 土坑

### III 調査の結果

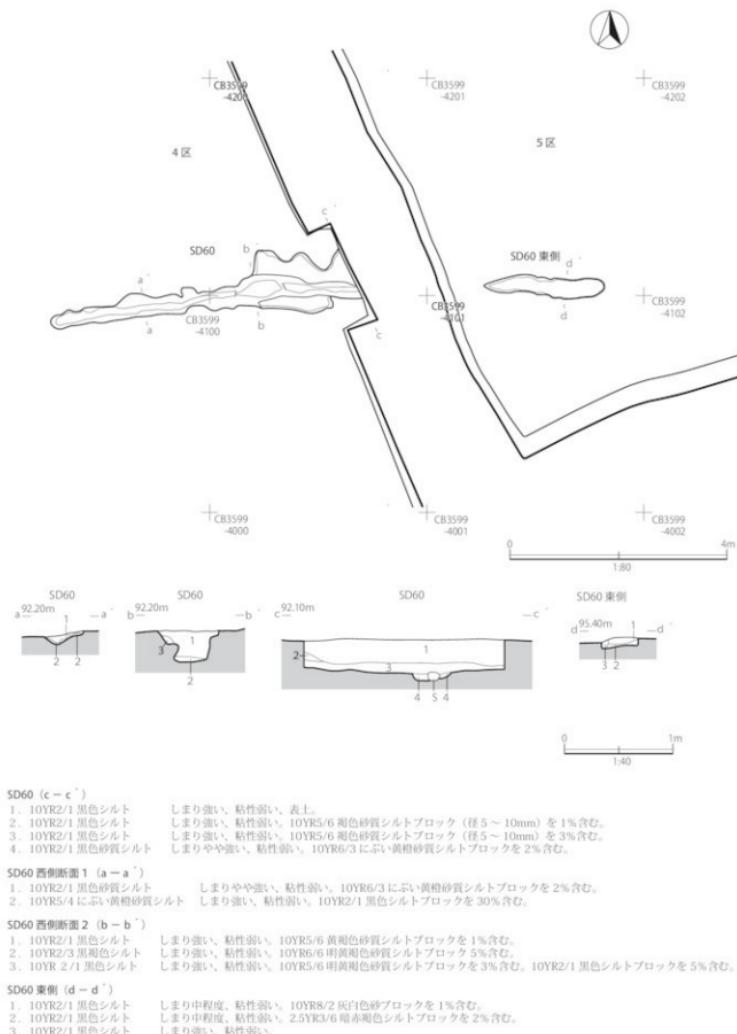


第 18 図 SK53・54・61・75 土坑

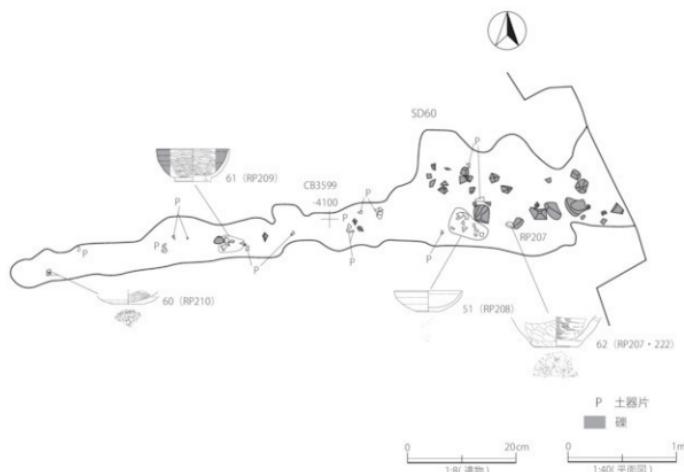


第19図 SD5・9溝跡

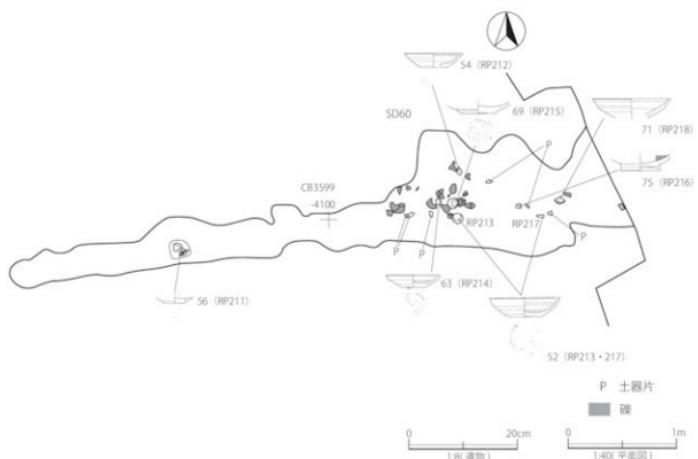
### III 調査の結果



第20図 SD60・60 東側溝跡

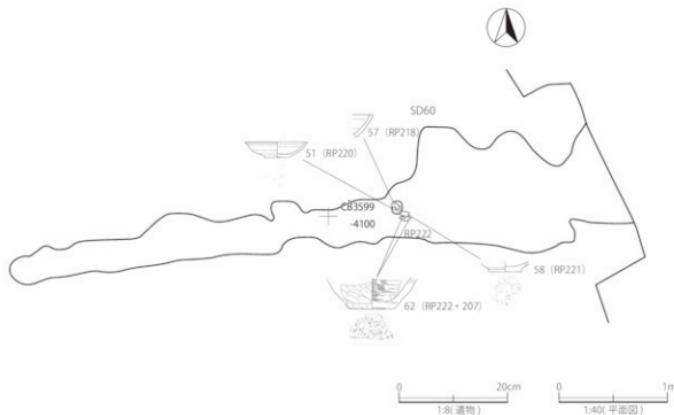


第21図 SD60出土遺物分布図(1)

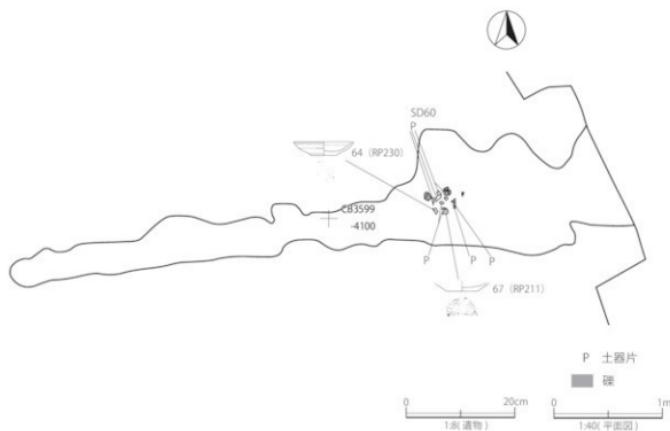


第22図 SD60出土遺物分布図(2)

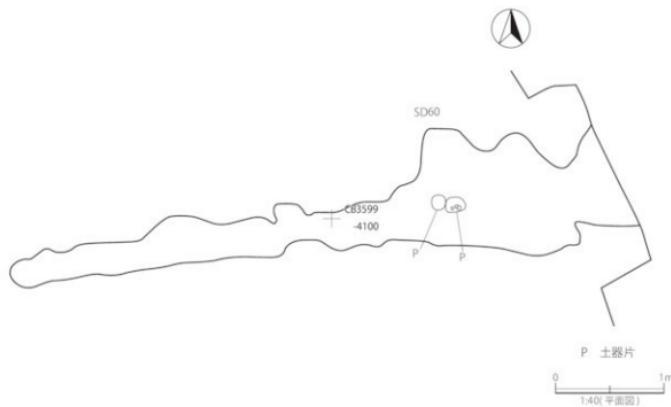
III 調査の成果



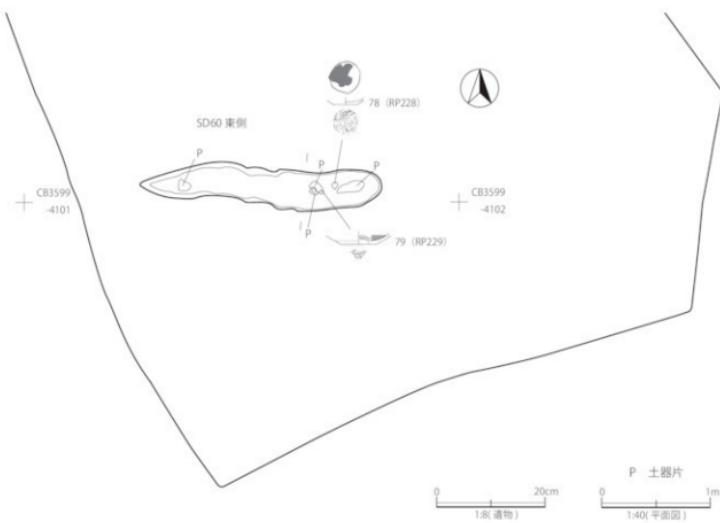
第23図 SD60出土遺物分布図 (3)



第24図 SD60出土遺物分布図 (4)

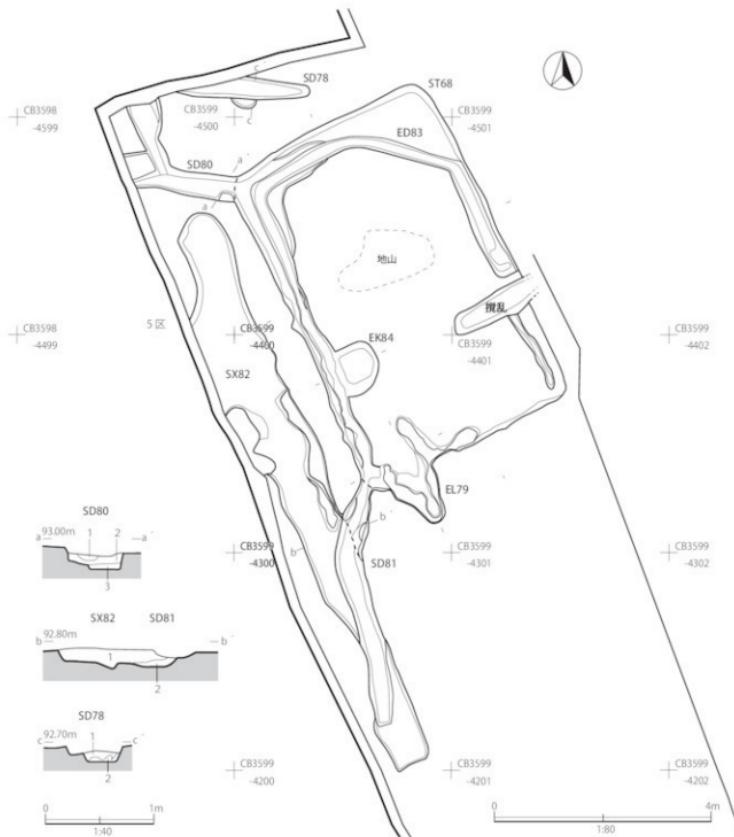


第25図 SD60出土遺物分布図(5)



第26図 SD60東側出土遺物分布図

### III 調査の成果



#### SD81・SX82

1. 10YR3/1 黒褐色シルト
  2. 10YR3/1 黒褐色シルト
- しまり強い、粘性弱い。10YR8/1 灰白色砂ブロックを5%、10YR6/6 明黄褐色シルトブロックを3%含む。  
しまり中程度、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色砂ブロックを10%、10YR8/1 灰白色砂ブロックを3%含む。

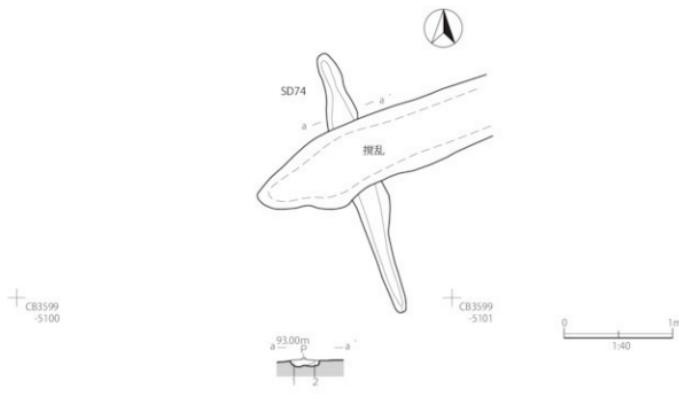
#### SD80

1. 10YR2/1 黒色シルト
  2. 10YR6/6 明黄褐色砂
  3. 10YR 2/1 黑色シルト
- しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色砂ブロックを5%、10YR8/1 灰白色砂ブロックを1%含む。  
しまり強い、粘性弱い。10YR2/1 黑色シルトブロックを10%、10YR8/1 灰白色砂ブロックを3%含む。  
しまり強い、粘性弱い。10YR6/6 明黄褐色砂ブロックを15%、10YR8/1 灰白色砂ブロックを1%含む。

#### SD78

1. 10YR2/1 黒色シルト
  2. 10YR6/6 明黄褐色砂
- しまり強い、粘性弱い。10YR8/2 灰白色砂ブロックを1%含む。  
しまり強い、粘性弱い。10YR8/2 灰白色砂ブロックを2%含む。

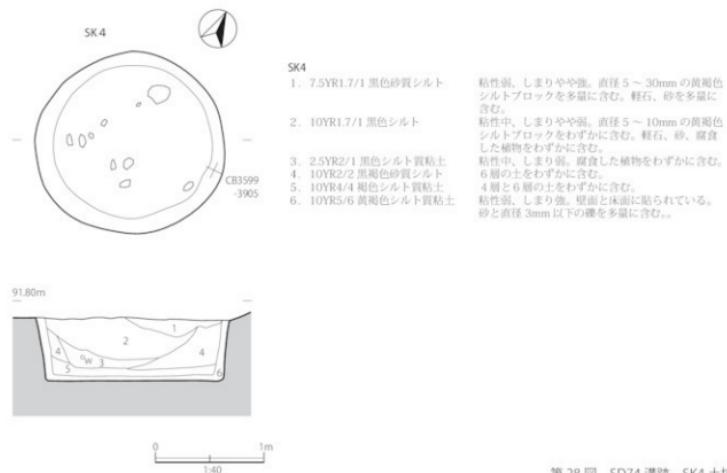
第27図 SD78・80・81溝跡、SX82 性格不明遺構



**SD74**  
1. 10YR2/1 黒色シルト  
2. 10YR4/6 褐色シルト

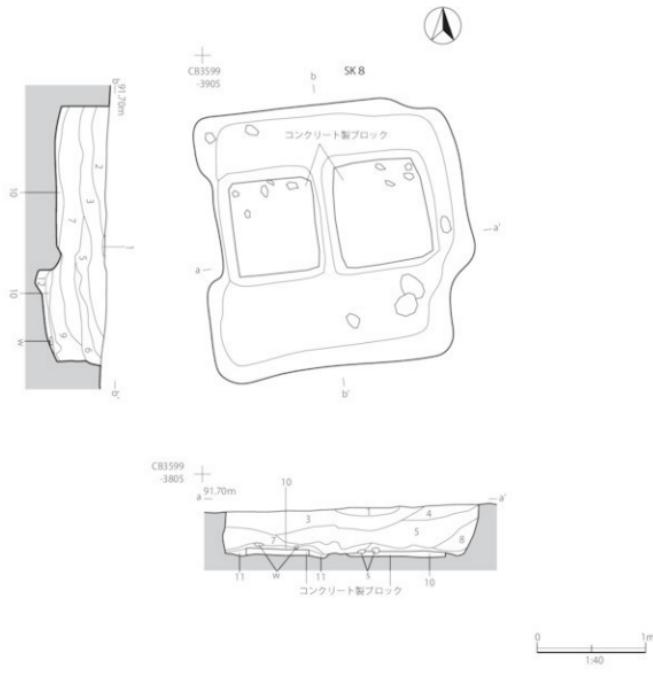
しまり強い、粘性やや弱い。10YR4/4 黄褐色質シルトブロックを15%含む。

しまり強い、粘性弱い、地山。



第 28 図 SD74 溝跡、SK4 土坑

### III 調査の結果

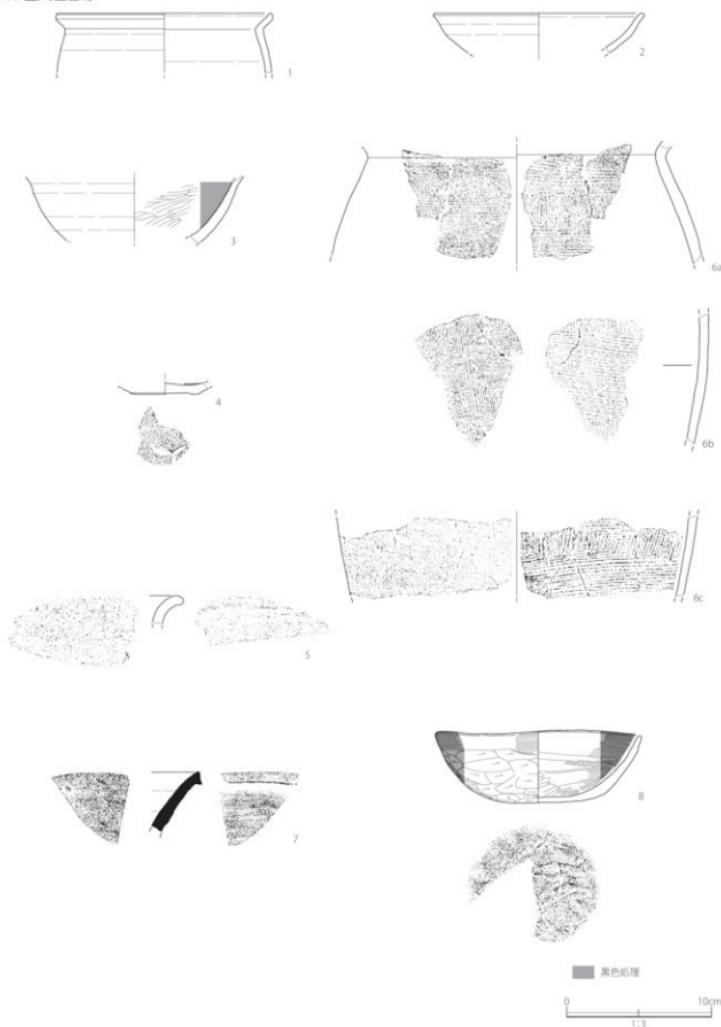


SK8

1. 10YR1.7/1 黒色砂質シルト
  2. 7.5YR1.7/1 黒色シルト
  3. 10YR1.7/1 黒色シルト
  4. 10YR2/1 黒色シルト
  5. 2.5YR2/1 黒色シルト
  6. 10YR2/1 黒色シルト
  7. 10YR1.7/1 黒色シルト
  8. 5YR2/1 黑色シルト
  9. 2.5YR2/1 黑色シルト
  10. 5YR3/1 オリーブ黑色砂質シルト
  11. 7.5YR4/6 黒褐色砂質粘土
  12. 7.5YR6/4 ぶい・褐色砂質粘土
- 粘性弱、しまり中。10YR2/3 黑褐色シルトと、直径 1 ~ 5mm の黄褐色シルトブロックをわずかに含む。  
 粘性弱、しまりや強。黒褐色シルトブロックを多量に含む。黄褐色シルトブロックをわずかに含む。
- 粘性弱、しまり中。直径 5 ~ 10mm の黄褐色シルトブロックと直径 5 ~ 30mm 褐色ブロックをわずかに含む。
- 粘性弱、しまりや強。黒褐色シルトブロックを多量含む。
- 粘性弱、しまり強。黄褐色・黒褐色シルトブロックを多量に含み、まだら状をなす。
- 粘性弱、しまりや強。黒褐色シルトブロックを多量に含む。
- 粘性弱、しまり強。黄褐色シルトブロックをごくわずかに含む。下層部で砂を多く含む。
- 粘性弱、しまり中。黑色土を含む。
- 粘性なし、しまり中。粘粒がわずかにみられる。
- 粘性・しまり強。白色粘土と砂が混在する。黑色土をわずかに含む。根鉄の集積がみられる。

第29図 SK8 土坑

ST68 穫穴住居跡



第30図 ST68出土遺物

III 調査の成果

ST68 竪穴住居跡



SL13 炉跡



SE3 井戸跡

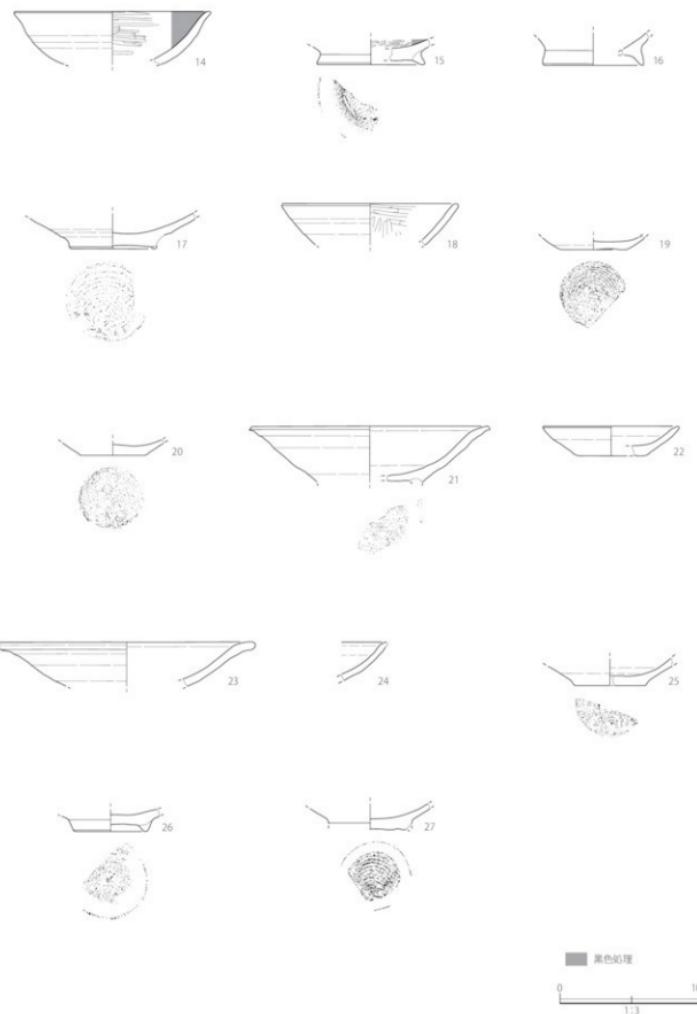


SE10 井戸跡



第31図 ST68、SL13、SE3・10 出土遺物

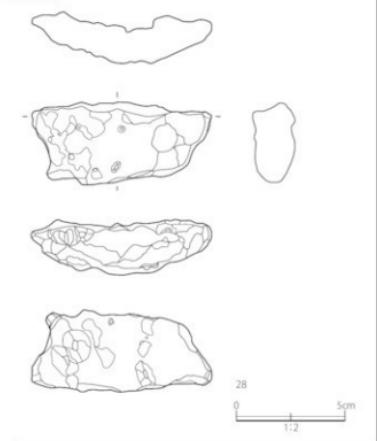
## SK2 土坑



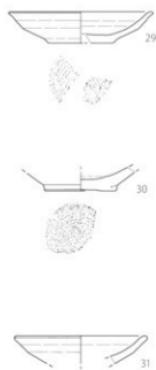
第32図 SK2出土遺物

III 調査の成果

SK2 土坑



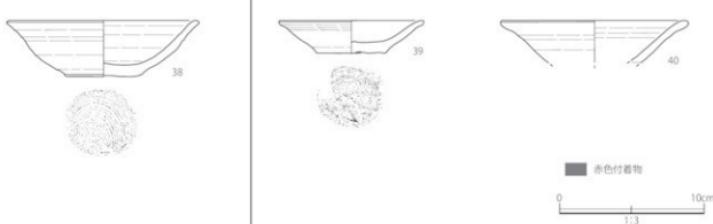
SK53 土坑



SK54 土坑

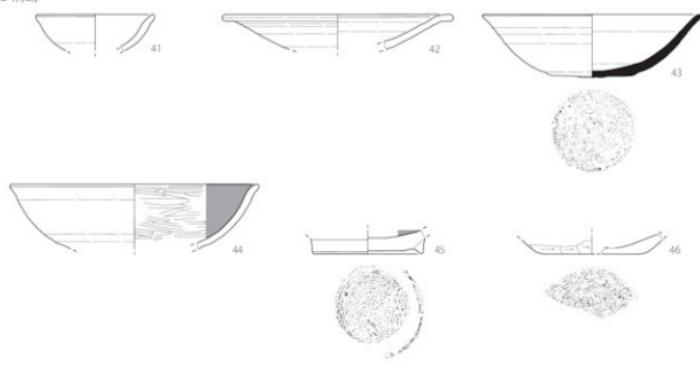


SD5 溝跡

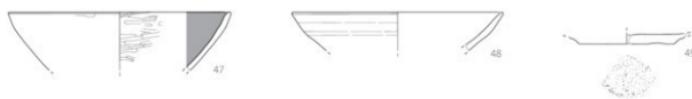


第33図 SK2・53・54、SD5 出土遺物

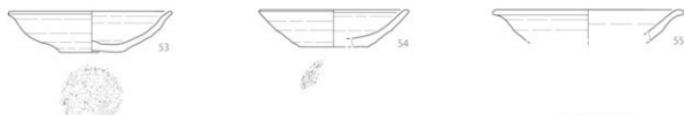
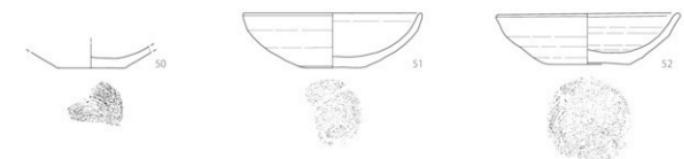
## SD5 溝跡



## SD9 溝跡



## SD60 溝跡

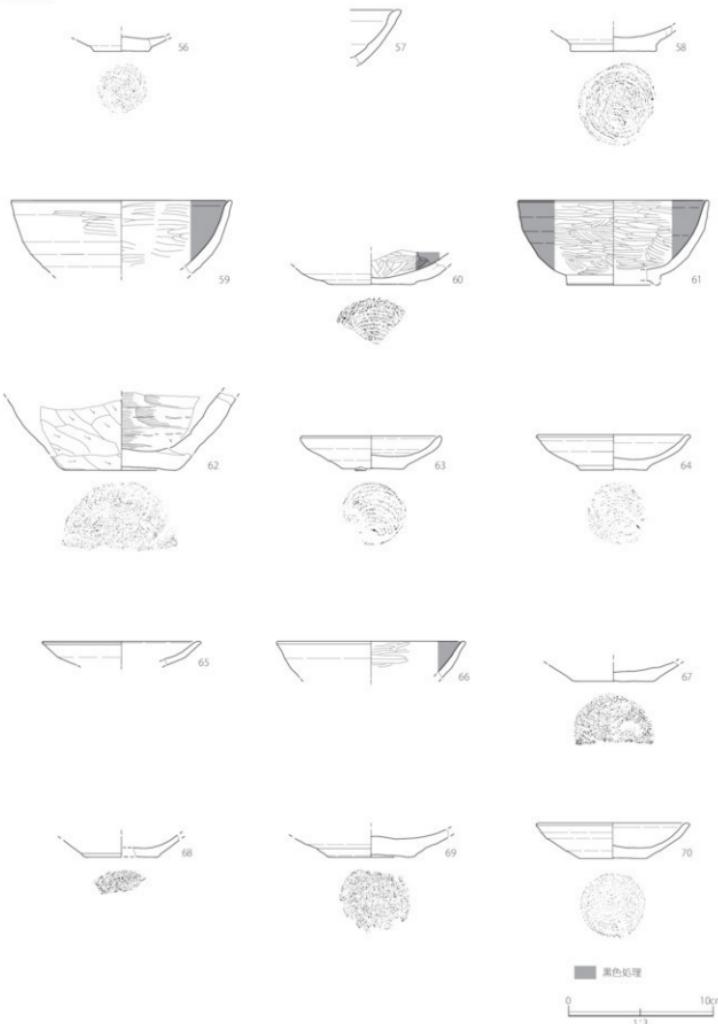


■ 黒色処理  
0 10cm  
1:3

第34図 SD5・9・60出土物

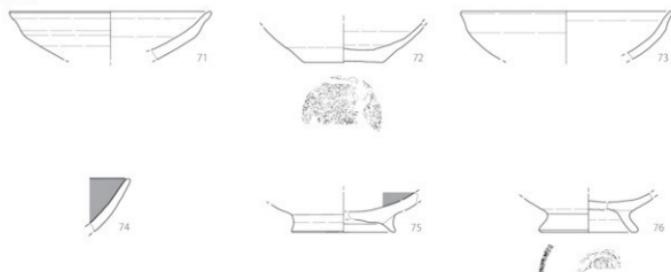
III 調査の成果

SD60 溝跡

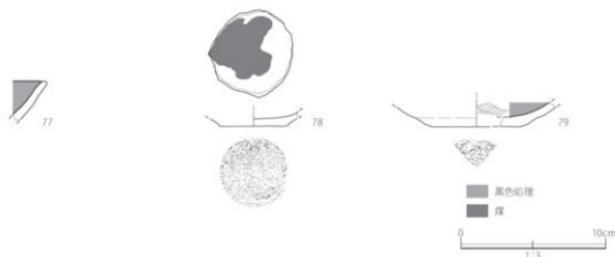


第35図 SD60出土遺物

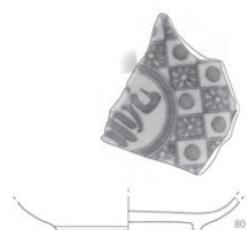
## SD60 溝跡



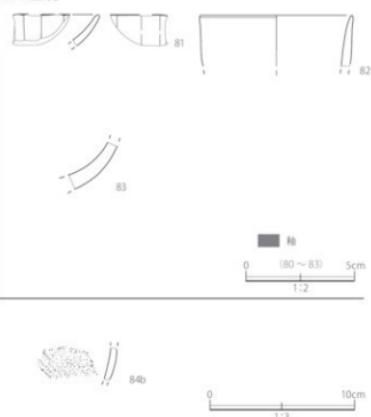
## SD60 東側溝跡



## SK4 土坑



## SK8 土坑



## SK2 土坑



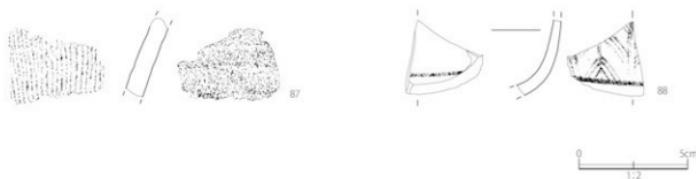
第36図 SD60・SD60東側、SK2・4・8出土遺物

III 調査の成果

SK4 土坑



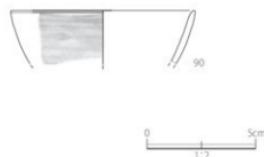
ST68 竪穴住居跡



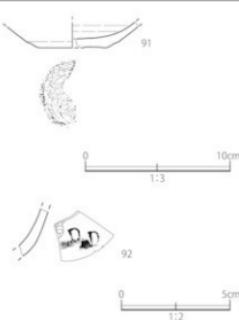
SD74 溝跡



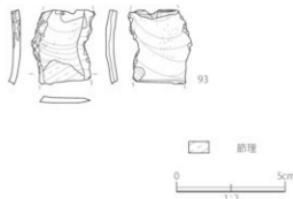
SD78 溝跡



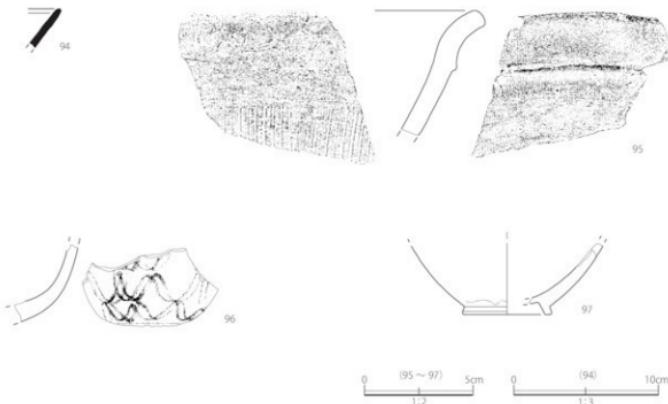
2区 遺構外出土遺物



4区 遺構外出土遺物



第37図 SK4、ST68、SD74・78、2・4区遺構外出土遺物



第38図 3区遺構外出土遺物

表4 土師器・須恵器観察表(1)

図版 番号	遺物 番号	写真 図版	種別	器種	地区	出土地点	計測値 (mm)	調整			備考・RP
								口径	器高	底径	
1	41	土師器	甕	5区	ST68	(146)	4.5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	砂粒・粗砂混入 やや不良
2	41	土師器	环	5区	ST68F	(144)	4.5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	砂粒少量混入 良好 RP224
3	41	土師器	环	5区	ST68F1		6	ロクロ	黒色処理	ロクロ	福砂混入 良好 RP226
4	41	土師器	环	5区	ST68F1	46	5.5	ロクロ	黒色処理	ロクロ	砂粒少量混入 良好
5	41	土師器	甕	5区	ST68G1床		7	ナデ	ナデ	ナデ	粗砂混入・良好
6	41	土師器	甕	5区	ST68Y		7.5	カキメ	カキメ	カキメ	粗砂混入・良好
7	41	須恵器	甕	5区	ST68Y		7.5	ハケメ	ハケメ	ハケメ	
8	41	土師器	环	5区	ST68Y EL79	(140)	38	76	5	ナデ	黒色処理 ケズリ 砂粒混入・良好 RP223・232
9	42	土師器	甕	5区	ST68Y EL79F1	(214)	82.5	5	ナデ	ナデ	粗砂・石英・金雲母 混入・やや不良 RP233
10	42	土師器	甕	5区	ST68 EK84		5	ハケメ	ハケメ	ハケメ	粗砂混入・良好
28	11	43	土師器	环	2区	SL13	(144)	5	ロクロ	ロクロ	砂粒・金雲母 石英混入 やや不良 RP115
12	43	土師器	皿	2区	SE3	(60)	3	ロクロ	ロクロ	回転系切	砂粒・石英混入 外 面 体 部 下 端 に 不良 1条の平行沈線あり
13	43	土師器	环	2区	SE10	(55)	5	ナデ	ナデ	ナデ	粗砂・石英 金雲母混入・良好

### III 調査の成果

表5 土師器・須恵器觀察表(2)

図版 番号	遺物 写真	種別	器種	地区	出土地点	計測値(mm)			調整 内面	底部	胎土・焼成	備考・RP	
						口径	器高	底径	器厚				
14	43	土師器	环	2区	SK2	(134)	6	ロクロ ナデ	黒色処理 ミガキ ナデ	ロクロ	砂粒・石英混入 良好		
15	43	土師器	高台付环	2区	SK2	(72)	4	ロクロ ナデ	黒色処理 ミガキ ナデ	回転系切	緻密・石英混入 良好	底部外周をナデを施し高台を貼り付る	
16	43	土師器	高台付环	2区	SK2	(66)	5	ロクロ ナデ	高台部 ナデ	ロクロ	砂粒・石英混入 不良		
17	43	土師器	皿か	2区	SK2	57	4.5	ロクロ	ロクロ	回転系切	砂粒・石英混入 良好	底部外周をナデを施す	
18	43	土師器	皿か	2区	SK2	(120)	4.5	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ ミガキ	ロクロ	緻密・石英混入 良好	内面黒色物付着	
19	43	土師器	皿か	2区	SK2	46	3	ロクロ ナデ	ロクロ	回転系切	砂粒少量混入 やや良		
20	43	土師器	皿か	2区	SK2	45	3	摩滅し 不明	摩滅し 不明	ロクロ	粗砂混入・やや良		
21	43	土師器	高台付环	2区	SK2F	(164)	4	ロクロ ナデ	回転系切	砂粒・石英 金雲母混入・良好	砂粒少額混入		
22	44	土師器	皿	2区	SK2西側	(92)	20	(44)	4	ロクロ	ロクロ	やや不良	
23	44	土師器	环	2区	SK2西側	(176)	5.5	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ	砂粒・石英混入 良好		
24	44	土師器	皿か	2区	SK2	4.5		ロクロ ナデ	ロクロ ナデ	ロクロ	砂粒・石英混入 不良		
25	44	土師器	皿	2区	SK2南側	(48)	4	ロクロ ナデ	ロクロ	回転系切	砂粒少額混入 やや不良		
26	44	土師器	高台付环	2区	SK2下部	(48)	5	ロクロ ナデ	ロクロ	回転系切	緻密・石英混入 良好	底部外周をナデを施し高台を貼り付る	
27	44	土師器	付环	2区	SK2下部	(48)	4.5	ロクロ ナデ	ロクロ	回転系切	緻密・砂粒少額混入	良好	
29	44	土師器	皿	3区	SK53F	(100)	23	(46)	4.5	ロクロ	砂粒少額混入・良好		
30	44	土師器	皿	3区	SK53F	(48)	5.5	ロクロ	ロクロ	回転系切	砂粒少額混入		
31	44	土師器	皿	3区	SK53F1	(90)	4.5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	砂粒少額混入・良好		
32	44	土師器	环	3区	SK53F1	(124)	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	砂粒少額混入・良好	RP205	
33	44	土師器	皿	3区	SK53F1	(124)	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	砂粒少額混入・良好	歪みあり・RP206	
34	44	土師器	皿	3区	SK53F2	(138)	5.5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	砂粒少額混入 やや良		
35	44	土師器	皿	3区	SK54F	(125)	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	砂粒少額混入 やや不良		
36	44	土師器	皿	3区	SK54F1	105	22	45	4.5	ロクロ	ロクロ	砂粒少額混入・良好	外面赤色物付着 RP202
37	45	土師器	皿	3区	SK54F1	(112)	24	36	5	ロクロ	ロクロ	砂粒少額混入・良好	RP204
38	45	土師器	环	3区	SK54F2	131	38	52	5.5	ロクロ	ロクロ	砂粒少額混入・良好	完形・RP203
39	45	土師器	皿	2区	SD5	(98)	22	47	4	ロクロ ナデ	ロクロ 回転系切	砂粒・金雲母・石英 混入・やや良	
40	45	土師器	皿	2区	SD5	(128)		5	ロクロ ナデ	ロクロ	砂粒・金雲母混入 やや不良		
41	45	土師器	环	2区	SD5	(80)		4	ロクロ ナデ	ロクロ	砂粒・石英混入 良好		
31	45	須恵器	环	2区	SD5	(158)		5	ロクロ ナデ	ロクロ	砂粒・石英混入 良好		
43	45	須恵器	环	2区	SD5	150	43	54	5	ロクロ ナデ	ロクロ 回転系切	緻密・金雲母混入 不良	焼きが甘い

表6 土師器・須恵器観察表(3)

団体 番号	遺物 番号	種別 番号	器種	地区	出土地点	計測値 (mm)	調整 内面			胎土・焼成	備考・RP		
							口径	器高	底径	器厚			
	44	46	土師器	环	2区	SD5F1 (170)		5	口クロ ナデ ミガキ	口クロ 黒色処理 ミガキ	緻密・石英混入 良好	ベルト中黒色上層の 表記	
	45	46	土師器	高台付环	2区	SD5	(74)	11	口クロ	口クロ 黒色処理 ミガキ	砂粒混入・良好		
	46	46	土師器	环	2区	SD5	66	6.5	ナデ ケズリ	ナデ ケズリ	粗砂・石英 金雲母混入・不良		
	47	46	土師器	环	2区	SD9 (152)		3.5	ナデ ミガキ	ナデ 黒色処理 ミガキ	砂粒・石英混入 良好		
31	48	46	土師器	环	2区	SD9F (144)		4.5	口クロ	口クロ	砂粒・石英混入 良好		
	49	46	土師器	皿	2区	SD9	(64)	3	口クロ ナデ	口クロ 回転系切	砂粒少量混入不良		
	50	46	土師器	皿	4区	SD6OF	46	4	口クロ	口クロ 回転系切	砂粒少量混入・良好		
	51	46	土師器	环	4区	SD60F1 (123)	48	45	4.5	口クロ	口クロ 回転系切	細砂混入・やや不良 RP208	
	52	46	土師器	环	4区	SD60F1 126	35	58	4.5	口クロ	口クロ 回転系切	砂粒少量混入 やや不良 RP213・217	
	53	47	土師器	皿	4区	SD60F1 112	38	44	4	口クロ	口クロ 回転系切	砂粒混入・やや不良 完形・RP220	
	54	47	土師器	皿	4区	SD60F1 (102)	25	(47)	4	口クロ	口クロ 回転系切	砂粒少量混入・良好 RP212	
	55	47	土師器	皿	4区	SD60F1 (130)		5	口クロ	口クロ	砂粒少量混入 やや良		
	56	47	土師器	皿	4区	SD60F1	38	4.5	口クロ	口クロ 回転系切	砂粒少量混入 やや不良	RP211	
	57	47	土師器	环	4区	SD60F1		5	口クロ	口クロ	砂粒少量混入 やや良	RP219	
	58	47	土師器	环	4区	SD60F1	59	5.5	口クロ	口クロ 回転系切	砂粒少量混入・良好	RP221	
	59	47	土師器	环	4区	SD60F1 (150)		5.5	口クロ ミガキ	口クロ 黒色処理 ミガキ	細砂混入・良好 外面に剥落あり		
	60	47	土師器	环	4区	SD60F1	(60)	7	口クロ	口クロ 黒色処理 ミガキ	緻密・細砂混入 良好	RP210	
32	61	47	土師器	高台付环	4区	SD60F1 (130)	58	(64)	5	口クロ 黒色処理 ミガキ	口クロ 黒色処理 ミガキ	細砂混入・良好	RP209
	62	47	土師器	皿	4区	SD60F1	(78)	14	ケズリ	ナデ ケズリ	細砂混入・良好	RP207・222	
	63	48	土師器	皿	4区	SD60F2 98	23	44	4	口クロ	口クロ 回転系切	砂粒少量混入 やや良	RP214
	64	48	土師器	皿	4区	SD60F2 104	24	45	3.5	口クロ	口クロ 回転系切	砂粒少量混入・良好	RP230
	65	48	土師器	皿	4区	SD60F2 (108)		4	口クロ	口クロ	砂粒少量混入 やや良		
	66	48	土師器	环	4区	SD60F2 (128)			口クロ 黒色処理 ミガキ	口クロ 黒色処理 ミガキ	砂粒少量混入・良好		
	67	48	土師器	环	4区	SD60F2	54	4.5	口クロ	口クロ 回転系切	砂粒少量混入 やや不良	RP231	
	68	48	土師器	皿	4区	SD60F2	(48)	3.5	口クロ	口クロ 回転系切	砂粒少量混入・良好		

### III 調査の成果

表7 土師器・須恵器觀察表(4)

図版	遺物	写真	種別	器種	地区	出土地点	計測値 (mm)				調整内面	胎土・焼成	備考・RP	
							口径	器高	底径	器厚	外面			
32	69 48	土師器 盆か 4区	SD60F3				58	5.5	ロクロ	ロクロ		砂粒少量混入 やや不良	RP215	
70	48	土師器 盆 4区	SD60Y	106	24	45.5	4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量混入・良好	RP234		
71	48	土師器 环 4区	SD60Y	(138)				6.5	ロクロ	ロクロ	砂粒混入・良好	RP218		
	72	48	土師器 环 4区	SD60Y			54	4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量混入 やや良		
	73	48	土師器 环 4区	SD60Y	142		5	ロクロ	ロクロ		砂粒少量混入	やや不良		
	74	48	土師器 环 4区	SD60Y				5	ロクロ	ロクロ	黒色処理	砂粒少量混入・良好		
											ミガキ			
	75	48	土師器 高台付环 4区	SD60Y			(68)	7	ロクロ	ロクロ	黒色処理 調整不明	砂粒少量混入・良好	RP216	
33	76	48	土師器 高台付环	4区	SD60Y			台部深 (67)	4.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切	緻密・細砂混入 良好	ミガキ
	77	49	土師器 环 5区	SD60 東側F1					4.5	ロクロ	ロクロ	黒色上器 ミガキ		
	78	49	土師器 盆か 5区	SD60 東側F1			48	4	ロクロ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量混入・良好	底部内面保有 RP228	
	79	49	土師器 环 5区	SD60 東側F2			(60)	4.8	ロクロ	ロクロ	黒色処理 回転糸切	砂粒少量混入・良好	ミガキ RP229	
34	91	49	土師器 盆 2区	表上			46	5	ロクロ ナデ	ロクロ	回転糸切	砂粒少量混入・良好		
35	94	49	須恵器 环 3区	CB3599- 4501表上				3.5	ロクロ	ロクロ		砂粒少量混入・良好		

表8 陶器観察表

図版	遺物	写真	種別	生産地	地区	出土地点	計測値 (mm)				調整 内面	胎土・焼成	文様・釉薬・登録番号・年代・備考
							口径	底径	器厚	外面			
80	49	磁器皿	漁戸・美濃	2区	SK4		(66)	4	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	(内面) 漆版・明治以降	
81	49	磁器皿	不明	2区	SK8	(61)	3.5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	(内面) 口耳・透明釉RP1・19C	
33	82	49	磁器皿	不明	2区	SK8	(69)	3.5	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	透明釉・RP5・19C?	
	83	49	磁器皿	肥前	2区	SK8		5.5	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	(外面) 青磁釉	
	87	49	陶器描跡	不明	5区	ST68F上 黒色上		7.7	ロクロ	鉗目	砂粉混入 良好	(内外面) 鉄輪・19C~近代	
34	88	49	磁器染付碗	肥前	5区	ST68F1		4.8	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	(外側) 碷杉文・(内面) 漆織 RP225・1780~1810年	
	89	49	磁器染付碗	肥前	3区	SD74F		2.5	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	(外側) 不明・19C?	
	90	49	磁器染付碗	不明	5区	SD78F	(83)	3	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	漆織輪・19C	
	92	49	磁器染付碗	不明	2区	西堀F2中		4	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	(外側) 山文?・19C	
	95	49	陶器描跡	不明	3区	CB3598 5299表上		9	ナデ	鉗目 ナデ	緻密・良好	(内外面) 鉄輪・RP201・18C?・片口	
35	96	49	磁器染付碗	肥前	3区	表上		5.5	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	(外側) 二重綱口文・1700~1750年	
	97	49	陶器碗	不明	3区	CB3599 5403表上	(38)	5	ロクロ	ロクロ	緻密・良好	(外側) なまこ輪・明治以降	

表9 金属製品観察表

図版	遺物	写真	種別	地区	出土地点	計測値 (mm / g)				備考
						長さ	幅	厚さ	重さ	
30	28	44		2区	SK2	82	36	17	88.38	

表 10 繩文土器観察表

図版 番号	遺物 番号	写真 図版	器種	地区	出土地点	文様	縄文 原体	調整・成形 (外面) (内面)	器厚 (mm)	胎土	焼成	型式 時期	備考
33	84	49	深鉢	2区	SK2	縄文	RL	ナデ	4.7	砂粒少量混入	良好	晚期	内面炭化物付着

表 11 石器観察表

図版 番号	遺物 番号	写真 図版	種別	地区	出土地点	計測値 (mm)			石材	備考
						長さ	幅	厚さ		
34	93	49	剥片	4区	表上	35	25	3.8	珪質頁岩	石刃か

表 12 ガラス製品観察表

図版 番号	遺物 番号	写真 図版	種別	地区	出土地点	計測値 (mm)			色調	備考
						直径	残存高	厚さ		
34	85	49	コマ	2区	SK4	42	16.9	5	緑?	
	86	49	おはじき	2区	SK4	13.3		4	緑?	

# IV 理化学分析

## 1 放射性炭素年代測定（1）

株式会社加速器分析研究所

### A 測定対象試料

測定対象試料は、SE10 井戸跡底面出土木製品より採取された木片（No.1：IAAA-120940）、SK21 土坑底面出土木炭（No.2：IAAA-120941）の合計 2 点である（表 13）。No.1 の木製品は板材で、もとの樹木の表皮は残存しない。No.2 の木炭は部位不明で、表皮は残存しない。これらの遺構覆土からは平安時代の土師器が出土している。

なお、No.1 については樹種同定が行われている（樹種同定報告（1）参照）。

### B 測定の意義

SE10 井戸跡と SK21 土坑はいずれも平安時代の可能性が高いと考えられるが、SE10 は中世、SK21 は中近世の可能性も排除できないため、年代測定によって遺構の帰属時期を確認する。

### C 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常  $1\text{mol/l}$  (1M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001M から 1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1M に達した時には「AAA」、1M 未満の場合

表 13 試料一覧・放射性炭素年代測定結果

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (%)	$\delta^{13}\text{C}$ (%) 补正あり
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-120940	No.1	SE10 井戸跡 底面	木片	AAA	$-27.90 \pm 0.36$	$940 \pm 20$ $88.96 \pm 0.24$
IAAA-120941	No.2	SK21 土坑 底面	木炭	AAA	$-27.62 \pm 0.34$	$1140 \pm 20$ $86.74 \pm 0.23$

は「AaA」と表 13 に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 ( $\text{CO}_2$ ) を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。

(6) グラファイトを内径 1mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイルにはめ込み、測定装置に装着する。

### D 測定方法

加速器をベースとした  $^{14}\text{C}$ -AMS 専用装置 (NEC 社製) を使用し、 $^{14}\text{C}$  の計数、 $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )、 $^{14}\text{C}$  濃度 ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) の測定を行う。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

### E 算出方法

(1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の  $^{13}\text{C}$  濃度 ( $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ ) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表した値である（表 12）。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と記す。

(2)  $^{14}\text{C}$  年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中  $^{14}\text{C}$  濃度が一定であったと仮定して測定され、1950 年を基準年 (0yrBP) として測る年代である。年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。 $^{14}\text{C}$  年代は  $\delta^{13}\text{C}$  によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表 13 に、補正していない値を参考値として表 14 に示した。 $^{14}\text{C}$  年代と誤差は、下 1 術を丸めて 10 年単位で表示される。また、 $^{14}\text{C}$  年代の誤差 ( $\pm 1\sigma$ ) は、試料の  $^{14}\text{C}$  年代がその誤差範囲に入る確

率が 68.2 %であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の  $^{14}\text{C}$  濃度の割合である。pMC が小さい ( $^{14}\text{C}$  が少ない) ほど古い年代を示し pMC が 100 以上 ( $^{14}\text{C}$  の量が標準現代炭素と同等以上) の場合 Modern とする。この値も  $\delta^{13}\text{C}$  によって補正する必要があるため、補正した値を表 13 に、補正していない値を参考値として表 14 に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の  $^{14}\text{C}$  濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の  $^{14}\text{C}$  濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1 標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは 2 標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。グラフの縦軸が  $^{14}\text{C}$  年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$  補正を行い、下一桁を丸めない  $^{14}\text{C}$  年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、

IntCal09 データベース (Reimer et al. 2009) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表 13 に示した。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$  年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」) という単位で表される。

## F 測定結果

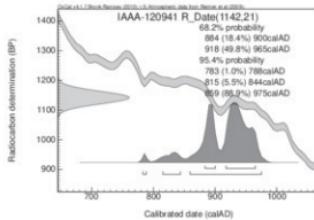
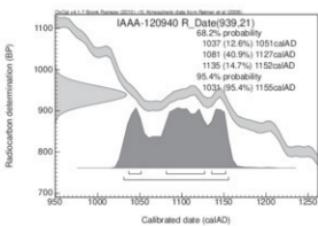
試料の  $^{14}\text{C}$  年代は、SE10 井戸跡底面出土木製品より採取された木片 No.1 が  $940 \pm 20$  yrBP、SK21 土坑底面出土木炭 No.2 が  $1140 \pm 20$  yrBP である。历年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、No.1 が  $1037 \sim 1152$  cal AD、No.2 が  $884 \sim 965$  cal AD の間に各々複数の範囲で示される。

これらの試料が出土した SE10 井戸跡、SK21 土坑は、平安時代の可能性が高く、SE10 は中世、SK21 は中近世の可能性も排除できないとされている。2 点の試料はいずれも平安時代に相当する年代値を示した。

試料の炭素含有率はいずれも 50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表 14 历年較正結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (%) 補正あり		历年較正用 (yrBP)	$1\sigma$ 历年年代範囲	$2\sigma$ 历年年代範囲
	Libby Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-120940	$990 \pm 20$	$88.43 \pm 0.24$	$939 \pm 21$	$1037$ calAD - $1051$ calAD (12.6%)	
				$1081$ calAD - $1127$ calAD (40.9%)	$1031$ calAD - $1155$ calAD (95.4%)
				$1135$ calAD - $1152$ calAD (14.7%)	
IAAA-120941	$1190 \pm 20$	$86.28 \pm 0.22$	$1142 \pm 21$	$884$ calAD - $900$ calAD (18.4%)	$783$ calAD - $788$ calAD (1.0%)
				$918$ calAD - $965$ calAD (49.8%)	$815$ calAD - $844$ calAD (5.5%)
					$859$ calAD - $975$ calAD (88.9%)



第 39 図 历年較正年代グラフ

## 引用文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data. Radiocarbon 19 (3) p.355 ~ p.363  
 Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51 (1) p.337 ~ p.360  
 Reimer P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51 (4) p.1111 ~ p.1150

## 2 樹種同定(1)

株式会社加速器分析研究所

## はじめに

本報告では、井戸跡から出土した木製品について、樹種選択を検討するための樹種同定を実施する。

## A 試 料

試料は、SE10 井戸跡から出土した木材 1 点 (No.1) である。なお、同じ試料の放射性炭素年代測定が行われている（年代測定報告（1）参照）。

## B 分析方法

試料の木取りを観察した上で、剃刀を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、そ

の特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995、1996、1997、1998、1999）を参考にする。

## C 結 果

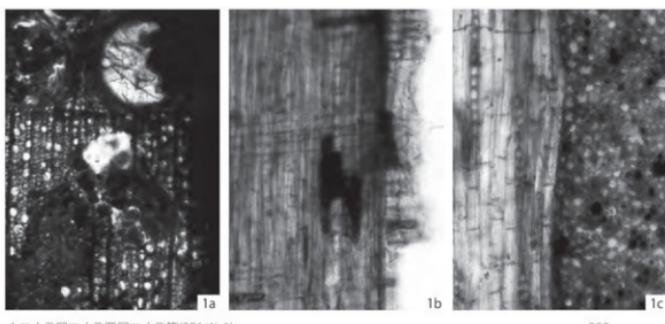
木材は、落葉広葉樹のコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。解剖学的特徴等を記す。

## ・コナラ属コナラ亜属コナラ節

(Quercus subgen. Quercus sect. Prinus) ブナ科  
環孔材で、孔隙部は 1-3 列、孔隙外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-20 細胞高のものと複合放射組織がある。

## D 考 察

試料は、SE10 井戸跡から出土した板材の可能性が指



1.コナラ属コナラ亜属コナラ節(SE10:No1)  
 a:木口 b:柾目 c:板目

第 40 図 分析木材顕微鏡写真

描されている木製品である。木製品は、極目板状を呈しており、落葉広葉樹のコナラ節に同定された。コナラ節は、二次林等を構成する落葉高木であり、木材は重硬で強度が高い材質を有する。人里近くに普通に見られる種類であることから、遺跡周辺に生育し、木材の入手は比較的容易であったと考えられる。用途の詳細は不明であるが、材質を考慮すれば、強度を要する用途に利用された可能性がある。

なお、山形県内の古代の木製品にコナラ節が利用され

た例をみると、鳴遺跡の柱（ミズナラ）、道伝遺跡の船、高瀬山遺跡の柱根、太夫小屋 I 遺跡の柱根、山形元屋敷遺跡の柱材と礎板、古志田東遺跡の木製鍛具、鍔、机脚部、鍔、柱根、修羅、馳上遺跡の柱根、石田遺跡の柱根、礎板、棚木、的場遺跡の柱根などがあり、建築部材としての利用が目立つ（伊東・山田 2012）。

\* 本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

#### 引用文献

- 林 昭三 1991 「日本産木材 顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所  
 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料 31』 p.81 ~ p.181 京都大学木質科学研究所  
 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料 32』 p.66 ~ p.176 京都大学木質科学研究所  
 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料 33』 p.83 ~ p.201 京都大学木質科学研究所  
 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料 34』 p.30 ~ p.166 京都大学木質科学研究所  
 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料 35』 p.47 ~ p.216 京都大学木質科学研究所  
 伊東隆夫・山田昌久（編） 2012 「木の考古学 出土木製品用材データベース」 p.449 海青社  
 烏地 謙・伊東隆夫 1982 「図説木材組織」 p.176 地球社  
 Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E.（編） 1998 「広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」 伊東隆夫・藤井智之・  
 佐伯 遼（日本語版監修） 海青社 p.122 [Wheeler E.A.Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic  
 Features for Hardwood Identification]

## 3 放射性炭素年代測定（2）・炭化

### 材樹種同定（2）

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

住居跡および炉跡から出土した炭化材の放射性炭素年代測定と樹種同定を行い、その年代と用材に関する資料を作成する。

#### A 試 料

試料は、2区ST7 中央部炭化物集中から採取された炭化材および2区SL13から採取された炭化材の計2点である。それぞれ試料1、試料2とされている。

試料1の炭化材は、破片が10片程度認められる。いずれも樹皮は、認められない。この中から、汚れの少ない炭化材を選択し、残存する範囲内で、最外年輪を含む外側5~6年分を採取し、放射性炭素年代測定試料とした。試料2の炭化材は、「炭化物」と記載された袋と「北東区の底面」と記載された袋とに分けられているが、い

ずれも破片が多数あり、どれも樹皮は認められない。放射性炭素年代測定試料は、「炭化物」と記載された袋の破片の中から、5mm角以上の大きさを有する炭化材を抽出し、その中最も年輪数の少ない（2年分）炭化材を選択した。

炭化材の樹種同定には、試料1、試料2とともに年代測定試料と同一破片と別破片の各2片を対象とし、さらに試料2の「北東区の底面」の破片も対象とした。

#### B 分析方法

##### (1) 放射性炭素年代測定

土壤や根などの目的物と異なる年代を持つものが付着している場合、これらをピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（II）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空中にして封じきり、500°C（30分）850°C（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真

空ラインにて  $\text{CO}_2$  を精製する。真空ラインにて、バイコール管に精製した  $\text{CO}_2$  と鉄・水素を投入し、封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを 650°C で 10 時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、NEC 製コンバクト AMS・1.5SDH を使用する。AMS 測定時に、標準試料である米国国立標準局 (NIS) から提供されるシュウ酸 (HOX-II) とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に  $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$  の測定も行うため、この値を用いて  $\delta^{13}\text{C}$  を算出する。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma : 68%) に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.0 (Copyright 1986 ~ 2014 M Stuiver and PJ Reimer) を用い、誤差として標準偏差 (One Sigma) を用いる。暦年較正とは、大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の  $^{14}\text{C}$  濃度の変動、及び半減期の違い ( $^{14}\text{C}$  の半減期 5,730 ± 40 年) を較正することである。暦年較正は、CALIB REV7.0 のマニュアルにしたがい、1 年単位まで表された同位体効果の補正を行った年代値を用いて行う。また、北半球の大気中炭素由来する較正曲線を用い、測定誤差  $\sigma$ 、 $2\sigma$  双方の値を計算する。 $\sigma$  は統計的に真の値が 68% の確率で存在する範囲、 $2\sigma$  は真の値が 95% の確率で存在する範囲である。表中の相対比とは、 $\sigma$ 、 $2\sigma$  の範囲をそれぞれ 1 とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。較正された暦年代は、将来的に暦年較正曲線等の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1 年単位で表された値を記す。

## (2) 炭化材樹種同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の 3 断面の割断面を作製し、实体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと

比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）や、Wheeler 他（1998）を参考にする。また、本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995、1996、1997、1998、1999）を参考にする。

## C 結 果

### (1) 放射性炭素年代

同位体効果による補正を行った測定結果を、表 15 に示す。試料 1 は  $1,260 \pm 20\text{BP}$ 、試料 2 は  $1,290 \pm 20\text{BP}$  であり、2 点の試料はほぼ同時期の年代を示す。

各試料の較正暦年代を、表 16 に示す。測定誤差を  $\sigma$  の年代でみると、試料 1 は 7 世紀末から 8 世紀後半、試料 2 は 7 世紀後半から 8 世紀後半となる。

### (2) 炭化材樹種同定

樹種同定結果を表 17 に示す。試料 1 には 2 種類が認められた。これらの炭化材は、いずれも落葉広葉樹で 2 分類群（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・クリ）に同定された。試料 2 はいずれの破片もクリであった。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

#### ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節

*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科

環孔材で、孔隙部は 1 ~ 3 列、孔隙外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1 ~ 20 細胞高のものと複合放射組織がある。

#### ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔隙部は 3-4 列、孔隙外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1-15 細胞高。

## D 考 察

### (1) 年代について

田向 2 遺跡第 2 次発掘調査説明資料によれば、遺構から出土した土師器は、その器形から 10 世紀頃の年代が与えられている。今回の放射性炭素年代測定から示された年代は、暦年でみると 200 年ほど古い。

試料 2 は勾跡とされる遺構内の炭化材であり、試料 1

についても住居跡内の炭化物集中部とされている場所の炭化材である。これらの出土状況は、これらの炭化材が当時の人の生活に伴い炭化したことが示唆される。また測定した2試料は、出土遺構や樹種が異なるが、ほぼ同時期の年代を示す。したがって、2点の試料から得られた年代は、勾跡や炭化物集中部が使用された年代を示している可能性がある。なお、土器の考古学的所見に基づく年代観との整合性については、さらに測定事例の蓄積がござる。

#### (2) 用材について

今回の樹種同定により、広葉樹2種類が認められた。クヌギ節には、クヌギとアベマキの2種がある。いずれも落葉高木で、山地や二次林等に生育し、とくに水辺に多い。木材は重硬で、強度が高い。一方クリは、二次林等に生育する落葉高木で、木材は重硬で強度・耐久性

が高い。

住居跡ST7中央部炭化材集中の炭化材試料1は、いずれも破片であるため、本来の形状等は不明である。クヌギ節とクリが認められ、少なくとも2種類の木材が混在して利用されたことが推定される。どちらも強度が高い材質であることから、住居構築材等に強度の高い木材が選択的に利用された可能性がある。

一方勾跡とされるSL13から採取された試料2では、多数の焼土塊と共に炭化材が検出されている。炭化材はいずれも破片で、樹皮は認められない。炭化材は、炭化物と北東区の底面の2試料があるが、いずれも同定した破片は全てクリであり、單一の種類構成となっている。焼土と共に出土していることから、燃料材としてクリが利用された可能性がある。

表15 放射性炭素年代測定結果

試料名	遺構	採取層位	種類(樹種)	補正年代(BP)	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	Code No.
試料1	2区 ST7	中央部炭化材集中部	炭化材 (コナラ属コナラ參属クヌギ節)	1,260±20	-25.19±0.16	15330-1
試料2	2区 SL13	-	炭化材(クリ)	1,290±20	-25.63±0.11	15330-2

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基準として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差(測定値の68%が入る範囲を年代値)に換算した値。

表16 歴年較正結果

試料名	補正年代(BP)	歴年較正年代							相対比	Code No.
試料1	1,260±18	$\sigma$	cal AD 694	-	cal AD 730	cal BP 1,256	-	1,220	0.656	15330-1
			cal AD 735	-	cal AD 747	cal BP 1,215	-	1,203	0.213	
			cal AD 763	-	cal AD 769	cal BP 1,187	-	1,181	0.131	
	1,289±18	$2\sigma$	cal AD 684	-	cal AD 772	cal BP 1,266	-	1,178	1.000	15330-2
			cal AD 679	-	cal AD 710	cal BP 1,271	-	1,240	0.604	
			cal AD 745	-	cal AD 764	cal BP 1,205	-	1,186	0.396	
試料2	1,289±18	$\sigma$	cal AD 669	-	cal AD 725	cal BP 1,281	-	1,225	0.625	15330-2
			cal AD 738	-	cal AD 768	cal BP 1,212	-	1,182	0.375	

1) 計算是、RADIOCARBON CALIBRATION CALIB REV7.0 (Copyright 1986 - 2014 M.Stuiver and P.J. Reimer) を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

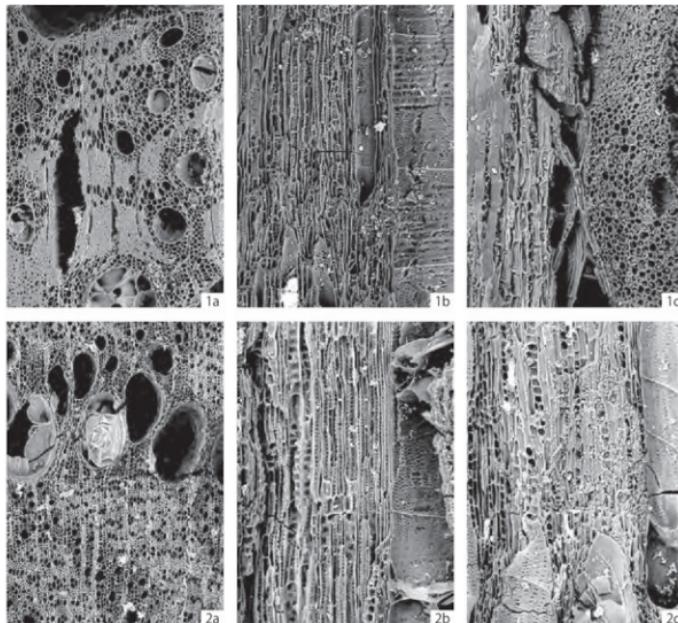
3) 1桁目を丸めるのが慣例だが、歴年較正曲線や歴年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

4) 統計的に真の値が入る確率は $\sigma$ は68%、 $2\sigma$ は95%である。

5) 相対比は、 $\sigma$ 、 $2\sigma$ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

表17 炭化材樹種同定結果

試料名	遺構	位置	状態	種類	備考
試料1	2区 ST7	中央部炭化材集中部	破片	コナラ属コナラ參属	AMS
				クヌギ節	
試料2	2区 SL13	- 北東区の底面	破片	クリ	AMS
				クリ	



1.コナラ属コナラ亜属クヌギ節(2区ST7:試料1)

2.クリ(2区ST7:試料1)

a:木口 b:粋目 c:板目

100 μm:a

100 μm:b・c

第41図 分析炭化材顕微鏡写真

## 引用文献

- 林 昭三 1991 「日本産木材 顕微鏡写真集」 京都大学木質科学研究所  
 伊東隆夫 1995 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料 31』 京都大学木質科学研究所 p.81 ~ p.181  
 伊東隆夫 1996 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料 32』 京都大学木質科学研究所 p.66 ~ p.176  
 伊東隆夫 1997 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料 33』 京都大学木質科学研究所 p.83 ~ p.201  
 伊東隆夫 1998 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料 34』 京都大学木質科学研究所 p.30 ~ p.166  
 伊東隆夫 1999 「日本産広葉樹材の解剖学的記載V」『木材研究・資料 35』 京都大学木質科学研究所 p.47 ~ p.216  
 鳥居 謙・伊東隆夫 1982 「図説木材相識」 地球社 p.176  
 小池一・田村俊和・鈴西清高・宮城豊彦編 2005 「日本の地形3 東北」 東京大学出版会 p.355  
 Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編) 1998 「広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩 (日本語版監修) 海青社 p.122 [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

## 4 住居跡覆土中の火山灰分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### A 試 料

試料は、5区ST68の覆土の6層中に認められた、火山灰とされた堆積物1点（試料3）である。添付資料によれば、覆土6層は厚さ6cmほどの黒色のシルトであり、6層とST68の床面との間には、厚さ約6cmで黒色シルトの覆土7層が堆積している。なお6層中には、径2～4cmのにぶい黄褐色を呈するシルトブロックが含まれるとされており、このシルトブロックが火山灰である可能性があると考えられている。

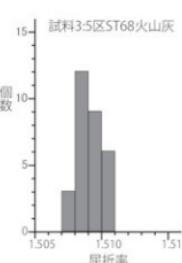
### B 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象

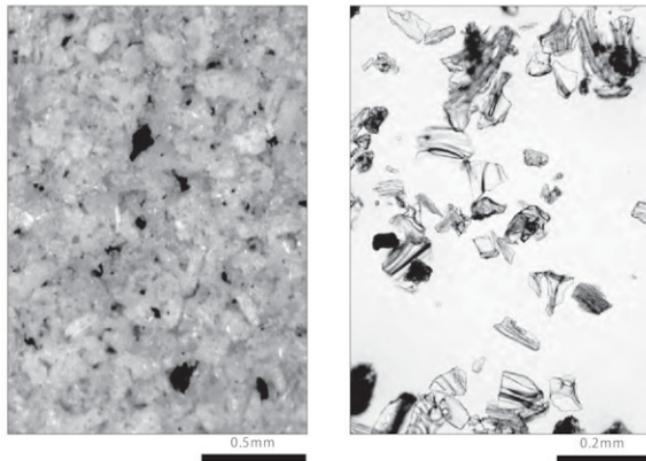
とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

さらに火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。



第42図 火山ガラスの屈折率



第43図 分析テフラ顕微鏡写真

## C 結 果

処理後に得られた砂分のほとんどは、細砂～極細砂径の火山ガラスから構成されている。火山ガラスは無色透明であり、多くは塊状軽石型であるが、繊維束状の軽石型も含まれ、さらに微量のバブル型も含まれている。火山ガラス以外の屑碎物は、極めて微量の灰～灰黒色の岩片や白色を呈する斜長石の鉱物片などが認められた。

火山ガラスの屈折率測定結果を、図39に示す。レンジはn1.507~1.510であり、モードはn1.508付近にある。

## D 考 察

試料3とされたシルトブロックは、砂分のほとんどが火山ガラスからなることから、火山ガラスからなるテフラの降下堆積物に由来すると判断される。添付資料にあるST68の覆土断面の写真では、シルトブロックは遺構内全面に広がっているわけではないが、層位的な広がりが認められることから、おそらくテフラの降下堆積層がその場で撫亂や削削を受けながらも、ブロック状に残存したものであると考えられる。その場合、ST68は平安時代の住居跡とされていることから、このテフラの降下堆積は平安時代以降であったと考えられる。

この噴出年代と分析で確認された火山ガラスの形態と、これまでに公表された東北地方におけるテフラの産状（町田ほか（1981：1984）、Arai et al. (1986)、町田・新井（2003）など）との比較、および田向2遺跡の地理的位置を考慮すれば、このテフラは十和田aテフラ（To

-a）と考えられる。To-aは、平安時代に十和田カルデラから噴出したテフラであり、給源周辺では火砕流堆積物と降下軽石からなるテフラとして、火砕流の及ばなかった地域では軽石質テフラとして、さらに給源から離れた地域では細粒の火山ガラス質テフラとして、東北地方のほぼ全域で確認されている（町田ほか,1981）。またその噴出年代については、早川・小山（1998）による詳細な調査によれば、西暦915年とされている。なお、町田・新井（2003）に記載されたTo-aの火山ガラスの屈折率は、n1.496 ~ 1.508の広いレンジを示す。ただし、n1.502以下の低い屈折率の火山ガラスを主体とする火山灰層は南方へは広がらず、十和田周辺とその東方地域に分布が限られるとしている（町田ほか,1981）。今回検出されたテフラは、低屈折率の火山ガラスを含まないTo-aに相当するものと考えられるが、それでも今回の火山ガラスの屈折率は若干高めである。ただしこの程度の違いは、埋積後の堆積環境等による火山ガラスの風化程度の違いに起因すると考えてよい。

前述の通り、ST68の覆土断面では、テフラ層を含む6層と遺構の床面との間に厚さ約6cmで7層が堆積している。また、テフラブロックが確認された範囲は、遺構の中央部付近である。これらのことから、テフラの降下堆積時には、ST68はすでに住居跡は廃絶され、凹地が残る状態であった可能性がある。To-aの降灰年代は915年であるから、ST68が住居として使用されていた年代は、915年よりも以前であると考えられる。

## 引用文献

- Arai,F.・Machida,H.・Okumura,K.・Miyauchi,T.・Soda,T.・Yamagata,K.1986.Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II  
—Tephra occurring in Northeast Honshu and Hokkaido —.Geographical reports of Tokyo Metropolitan University  
No.21 p.223 ~ p.250
- 古澤 明 1995 「火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的解析に基づくテフラの識別」『地質学雑誌』101』 p.123 ~ p.133
- 早川由紀夫・小山真人 1994 「日本海をはさんで 10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日—十和田湖と白頭山—」『火山』43 p.403 ~ p.407
- 町田 洋・新井房夫・森脇 広 1981 「日本海を渡ってきたテフラ」『科学』51』 p.562 ~ p.569
- 町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小山静夫・遠藤邦彦 1984 「テフラと日本考古学—考古学研究と関連するテフラのカタログ—波辺直経(編)『古文化財に関する保存科学と人文・自然科学』 同朋舎 p.865 ~ p.928
- 町田 洋・新井房夫 2003 「新編 火山灰アトラス」 東京大学出版会 p.336
- 小池一之・田村復和・鍋西清高・宮城豊彦編 2005 「日本の地形3 東北」 東京大学出版会 p.355

## 5 土器内面付着物の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

### A 試 料

試料は、2区SE10から出土した土器の内面に付着する、黒色を呈する塗膜状の物質1点(試料4)である。

### B 分析方法

#### (1) 赤外線分光分析の原理

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて(すなわち吸収されて)、その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成している分子における結合の場合は、電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性質を

有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域において、波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合、さまざまな結合を有する分子では、いくつかの波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数(波長の逆数  $\text{cm}^{-1}$  で示す)、縦軸に吸光度(ABS)を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起こるかを調べ、その赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に標本化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することにより、未知物質を同定することが可能である(山田 1986)。

#### (2) 赤外線吸収スペクトルの測定

微量採取した塗膜物質をダイヤモンドエクスプレスにより加圧成型した後、顕微FT-IR装置(サーモエレクトロン(株)製 Nicolet Avatar 370/Nicolet Centaurus)を利用し、測定を実施した。なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、作成した試料を鏡下で観察しながら測定位置を絞り込み、アーバーチャでマスキングした後、透過法で測定した。得られたスペクトルはベースライン補正などのデータ処理を施した後、吸光度(ABS)で表示し

#### 測定情報

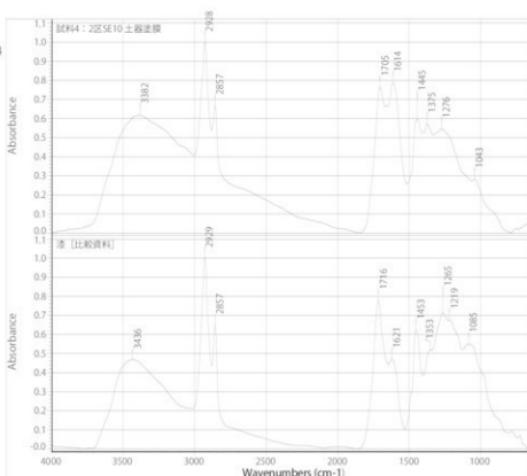
サンプルスキャン回数: 64  
バックグラウンドスキャン回数: 64  
分解能: 4.000  
サンプルアーバイン: 8.0  
ミラーレート: 1.8908

#### 光学系の構成

検出器: MCT/A  
ビームスプリッタ: KB  
光源: IR

#### 備考

ダイヤモンドエクスプレス成型  
顕微透過法  
可変アーバーチャ使用  
オートベースライン補正  
スムージング処理  
Y軸規格化



第44図 FT-IRスペクトル

ている。測定条件及び各種補正処理の詳細については、FT-IRスペクトルと共に図中に併記した。

## C 結 果

試料4のFT-IRスペクトルを図41に示す。なお、比較資料として実測した漆のFT-IRスペクトルを、図41中に併記している。

試料4の赤外線吸収特性は、 $3400\text{cm}^{-1}$ 付近の幅広い吸収帯のほか、 $2930\text{cm}^{-1}$ 、 $2860\text{cm}^{-1}$ 、 $1710\text{cm}^{-1}$ 、 $1610\text{cm}^{-1}$ 、 $1450\text{cm}^{-1}$ 、 $1280\text{cm}^{-1}$ 付近の強い吸収帯や $1380\text{cm}^{-1}$ 、 $1040\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯によって特徴付けられる。なお、 $3400\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はO-H基の伸縮振動、 $2930\text{cm}^{-1}$ 、 $2860\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はメチル基およびメチレン基のC-H伸縮振動、 $1710\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はC=O伸縮振動、 $1610\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はC=C伸縮振動、 $1450\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はメチル基の対称変角振動、 $1280\text{cm}^{-1}$ 付近の吸収帯はメチル基の対称変角振動やC-O伸縮振動あるいはO-H変角振動と予想される。

## D 考 察

当社では、試料の出所が既知の物質について、同一測定条件で赤外線吸収スペクトルを測定した例がいくつかある(未公表)。遺跡から検出される有機質遺物の代表は、漆、天然アスファルト、松脂、動植物油、炭化物などの調査事例がある。これらはいずれも固有の吸収帯があり、漆では $3400$ 、 $2930$ 、 $2860$ 、 $1710$ 、 $1620$ 、 $1450$ 、 $1270\text{cm}^{-1}$ 、天然アスファルトでは $2960$ 、 $2920$ 、 $2860$ 、 $1700$ 、 $1600$ 、 $1460$ 、 $1380\text{cm}^{-1}$ と、脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帶に特徴がある。また、松脂は $1700\text{cm}^{-1}$ 、動植物油は $1740\text{cm}^{-1}$ 、炭化物は $1140$ ～ $1160\text{cm}^{-1}$ に特徴ある吸収帯がある。

2区SE10出土土器の内面に付着した塗膜物質(試料4)の赤外線吸収特性には、比較資料の漆において確認される $3400$ 、 $2930$ 、 $2860$ 、 $1710$ 、 $1620$ 、 $1450$ 、 $1270\text{cm}^{-1}$ 付近の脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯が認められ、漆と類似したスペクトルパターンを示す。したがって、試料4の付着物質は、漆と判断される。

## 引用文献

山田富貴子 1986 「赤外線吸収スペクトル法」『機器分析のてびき 第1集』 化学同人 p.1～p.18

## V 総 括

### 1 検出遺構について

今回の調査では、平安時代を中心に近世、近現代と考えられる遺構を検出した。遺物は、平安時代の土師器を主体に須恵器、金属製品、陶磁器、また少量ながら繩文土器、石器が出土した。第1・2次調査合計整理箱数6箱（文化財認定箱数）である。以下に各時代毎に述べていく。

#### A 平安時代

平安時代と考えられる遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡などである。竪穴住居跡（ST68）は1棟、竪穴状遺構（ST7）は1棟を検出した。またST7のカマドの可能性があるが跡（SL13）を検出した。

ST7とSL13からは共に炭化物を検出し、業務委託による年代測定を行った。その結果、7世紀後半から8世紀後半の年代値を得た。これら的事から、ST7とSL13は、同様の年代値が得られており関連性が高いものと考えられるが、SL13から出土した土師器環（11）は9世紀代であり、分析結果と土器の年代値は合致しない。

ST68は、5区で検出した。その規模は南北約6.5m、東西約4mの長方形を呈する。このような長方形を呈する竪穴住居跡は、寒河江市に所在する高瀬山遺跡（SA第2・3次調査）でも確認されており、規模が大きいもので南北7.7m、東西6.2mを測る。竪穴住居跡の帰属時期は8世紀中頃から9世紀後半と考えられている（山形県理文2001）。

本遺跡近隣の清水遺跡からも平安時代の竪穴住居跡を多く検出しているが（山形県理文2011・2012）、そのほとんどが方形である。しかし、現在の村山市において当該期における発掘調査事例が少ないため、同形態の竪穴住居跡は確認されておらず、今後村山市における発掘調査による同事例の蓄積を待ちたい。

土師器甕（9）は、カマド（EL79）の裾内部から出土している事から、カマドの構築材（袖芯材）として使用されていたと考えられる。一般的にカマドの構築材は、

主に粘土、礫、土器などが使用され、土器の場合、土師器を使用する事例が多い。

掘立柱建物跡は、3区から4棟（SB25・36・56・62）検出した。規模が明確なものは、SB25・36の2棟である。SB25・36の2棟とSB56・62の2棟が概ね主軸方向が揃っている。これらの建物跡は、主軸方向の異なる2つのグループに分けられることから、時期差が想定される。

10世紀代の掘立柱建物跡の検出例を見てみると、県内の浮橋遺跡（飽海郡佐那町）のSB1でその桁行は2.4～3.5mを測る。SB1の時期は、10世紀前半と考えられている。遺跡からは、土師器（赤焼土器）が主体として出土し、遺跡の年代は出土遺物から9世紀末から11世紀後半と考えられている（山形県教委1989a）。県外では、山崎遺跡（秋田県秋田市）のSB41が挙げられる。SB41は、桁行3間梁行1間で柱穴は直径22～35cmを測り、桁行柱間は3.0～3.7mを測る。遺跡は土師器（赤焼土器）を主体に須恵器、珠洲系陶器が出土し、遺跡の年代は出土遺物から平安時代半ば（10世紀）と考えられている（秋田県教委1992）。

先に挙げた建物跡の桁行は3m前後の数値を示し、また掘り方（柱穴）は直径約30cm程度と小さい数値を示す。以上を踏まえSB25・36を見てみるとSB36の桁行が約2.8mと3m近い数値を示し、本遺跡のSB25・36共に柱穴が直径約30cmを示すことから、両棟もこれらの事例と類似しており、10世紀代の可能性が与えられるよう。

井戸跡は、2区のみの検出であり、2基（SE3・10）検出した。SE10からは、分析の結果、内面に漆と判明した付着物がある有段丸底の土師器環（13）が出土した。土器の年代は8世紀中葉から後葉と考えられる。

県内の有段丸底の土師器の出土例は、他に不動木遺跡（河北町）、漆山長表遺跡・大明神遺跡（山形市）、郡山遺跡群沢田遺跡（南陽市）などが挙げられ、これらは全て非クロコ形の黒色土器（内黒）である。沢田遺跡出土遺物は7世紀末から8世紀代（南陽市教委2013）、

その他の3遺跡の遺物は8世紀中葉から後葉に比定されている（山形県教委1986、山形県埋文1998、2003）。

土坑は、2区から2基（SK2・12）、3区から4基（SK21・53・54・75）、4区から1基（SK61）の計7基を検出した。SK2は、先述した通り堆積状況から抵触した可能性が考えられる事と同遺構の天井部崩落などを確認したのだが、その用途については判然としない。出土遺物は土師器壺（14・23）、高台付环（15・16・21・26・27）、皿（17～20・22・24・25）、が出土し、器形から10世紀中葉から後葉と考えられる。SK2の出土量はSD60、ST68に次いで多い（第45図）。

SK53・54は3区南西部で検出した。SK53・54は、堆積状況から人為堆積であることが読み取れる。遺物は土師器皿（29～31・34～37）、环（32・33・38）が出土した。SK2同様、器形から10世紀中葉から後葉に比定される。2基共に埋土の堆積状況から廐棄土坑の可能性が考えられる。

溝跡は、2区から2条（SD5・9）、4区から1条（SD60）、5区から3条（SD60東側・80・81）計6条検出した。SD60は、先述した通り土器以外に被熱した礫などが出土している。しかし、SD60の覆土からは、焼土などが検出されおらず、土器と共に被熱した礫を廐棄したと考えられる。SD60の出土量（土師器）は、本遺跡の中でもっとも多い（第45図）。

SD5・9・60・60東側は、共に東西方向の溝跡であり、それぞれ平行する位置にあることから掘立柱建物跡を区画する区画溝の可能性が考えられるが、SD5・9とSD60・60東側出土遺物の土器年代から大きく差異が生じるため、断定はできない。また調査区全体が開墾による削平を受けているため、4条の溝跡の全容は判然としない。

## B 近世

当該期と考えられる遺構は、溝跡2条（SD74・78）を検出した。SD74は3区南西部で検出した。北西方向の溝跡で東西方向の擾乱溝に切られる。長さ2.5m、幅12～32cm、深さは8cmを測る。出土遺物は磁器染付碗（89）が遺構確認面から露出した状態で出土した。深さは8cmと浅く、後世の擾乱溝に動かされて出土し

た可能性がある。

## C 近現代

当該期と考えられる遺構は、2区から土坑2基（SK4・8）を検出した。

大正2年に山形県が稻作改良を推進し、この西郷村（現村山市名取）でも大正9年より稻作改良に乗り出し、また同時に畑作の推奨、蚕桑の改良を行っている（村山市西郷小学校五十周年記念誌編集委員会編1990）。SK4・8からは、直接的に機能・用途を示す痕跡を確認できなかったものの、先述した背景から造られ、使用されたと考えられる。

## 2 平安時代の遺物について

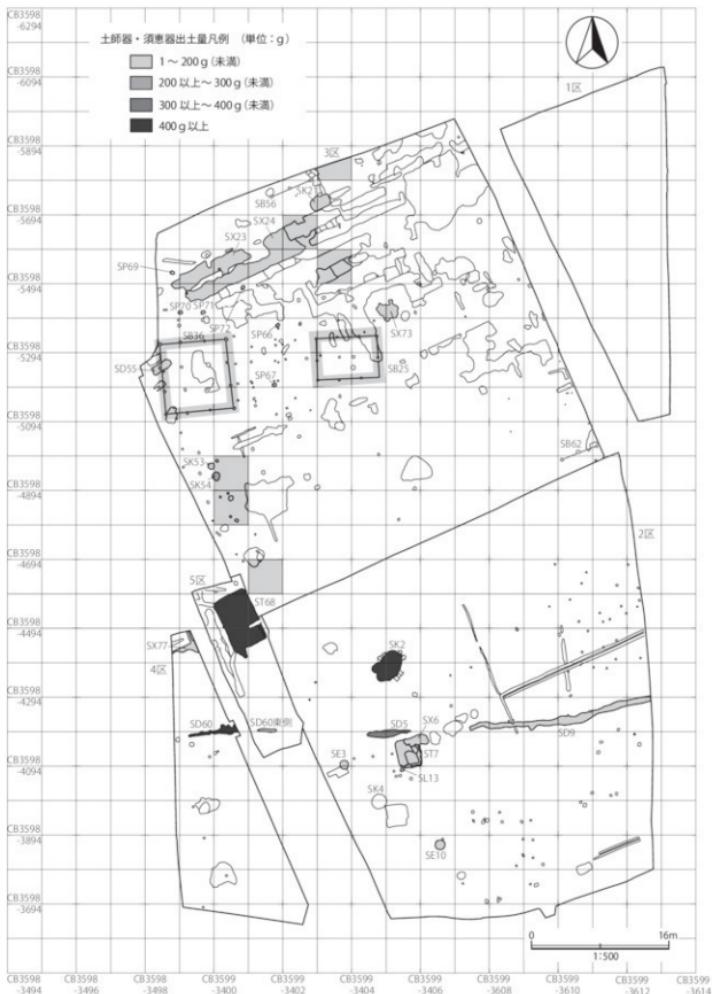
土師器は、本遺跡出土遺物の中で主体をなすものである。器種も様々で环、皿、高台付环、甕が出土している。中でも皿、环の順に出土が多く、色調は浅黄橙、黄橙、橙といった褐色系を呈する。甕は、ハケメ調整を施すものが多く、一部ハケメ、カキメを共に施すものもある。黒色土器は、内黒・両黒共に出土しており、器種が环、高台付环である。

### A 10世紀中葉～後葉の土師器について

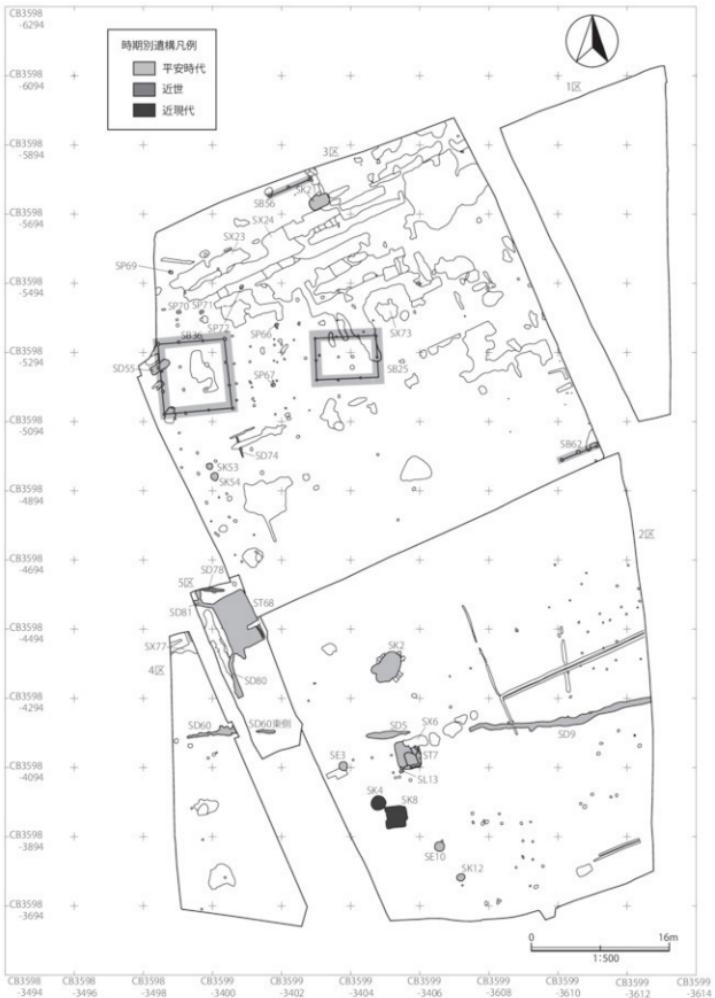
山形県内では、酸化焰焼成で焼かれたロクロ成形の土師器を赤焼土器と呼称しており、本遺跡で出土した环、皿、高台付环はロクロ成形によるものでこの赤焼土器にあたる。

本遺跡の特記事項は、県内から出土例の少ない10世紀中葉から後葉に比定される土師器（赤焼土器）が出土したことである。器種は环、皿、高台付环などであり、SK2・53・54、SD60・60東側から出土した。現在（平成26年度）までに出土例は少ないものの10世紀代の土師器が出土している遺跡がある。

例として境興野遺跡（酒田市）、浮橋遺跡・下長橋遺跡（飽海郡佐町）、馬上台遺跡（山形市）が挙げられる。それぞれの遺跡の年代は、境興野遺跡が10世紀～12世紀（山形県教委1981）、浮橋遺跡が9世紀後半～11世紀前半（山形県教委1989a）、下長橋遺跡が10世紀～11世紀前半（山形県教委1989b）、馬上台遺跡が10世紀前半と考えられている。



第45図 土師器・須恵器出土重量分布図



第46図 時期別遺構分布図

本遺跡の10世紀中葉から後葉に比定される土師器は、食膳具（環、皿、高台付环）を主体とし、煮炊具（壺）も1点出土している。先に挙げた県内4遺跡も本遺跡同様、食膳具の出土が多く、中でも環、皿の出土が最も多い。

環は、大型品（口径 140 ~ 170mm 未満）が少數存在するものの、量的に小型品（口径 100 ~ 140mm 未満）が多い。また器高が低く、形態的に皿に類似する物もあり、器種區別に困難なものも存在する。

判断基準は便宜上、口径が 140mm 未満、内面の立ち上がり角度が 20° 以下、器高が 30mm 未満で、口縁上半が外反するものについて皿として区別した。

皿は、最も多く出土した器種である。大型品と捉えられるものが1点（42）出土しているが、小型品が一定量存在する。

皿（31・35・65）、環（32・33・71）は、体部下半から緩やかに立ち上がり、体部上半から 20 ~ 40° 程度の角度をつけて立ち上がる。これらは、SK53・54、SD60・60 東側から出土した土師器の一つの特徴として捉えられることができよう。

SK2 出土遺物は、器厚が 3 ~ 4mm と薄いもの（19 ~ 22・25）が見られる。

高台付环は、底部片のため、数値から特徴を見出すことは困難であるが、高台部が大小存在する。

环・皿・高台付环共に底部調整は、回転糸切である。

## B 土師器・須恵器出土分布状況

調査区全体の出土量は、土師器が主体である。1次調査では、包含層中の遺物をグリッドでの取り上げをせず表土一括で取り上げている。出土量が特に多い遺構は、SK2 土坑、SD60 溝跡、ST68 穫穴住居跡である。それぞれの重量は、SK2 が 450.04g、SD60 が 1.348 kg、ST68 が 1.216 kg を量り、中でも SD60 と ST68 の出土量は共に 1 kg を超える。SD60 の出土量は調査区全体の中で最も多い重量を示す。SK2 と SD60 の出土遺物は、土師器が主体で須恵器は出土していない。ST68 も土師器が主体で、少量ではあるが須恵器も出土している。

グリットからの出土量分布は、3 区の北側と西側のみで調査区中央部は遺構が希薄な範囲であり、遺物も出土していない（第 45 図）。開墾やほ場整備などにより破

壊された可能性が考えられる。

## 3 まとめ

本遺跡は、平安時代と考えられる竪穴住居跡と掘立柱建物跡から構成される集落跡である。掘立柱建物跡は、主軸方向の違いから時期差が想定される。集落は、9世紀後半から 10 世紀後半の約 100 年前後の間営んでいたと推察される。また溝跡や土坑から県内でも出土例の少ない 10 世紀中葉から後葉に比定される土師器が出土し、今後村山地方の 10 世紀代を解明する上で良好な資料と言える。

## 参考文献

- 秋田県教育委員会 1992 「山崎遺跡発掘調査報告書」 秋田県文化財調査報告書第 223 集
- 石井浩幸・鈴木良仁・武田和宏・渡辺真 1999 「山形県の一般集落の様相」 第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会資料：古代城柵官衙遺跡検討会
- 伊藤武士 1997 「山羽における 10・11 世紀の土器様相」「シンボジウム 北陸の 10・11 世紀代の土器様相」 第 83 回北陸古代土器研究会
- 植松聰彦 2007 「山形県における古代の区画施設を有する遺構群について」「さあへい 第 23 号」さあへい刊人会
- 植松聰彦 2009 「山形県における古代の区画施設を有する遺構群について（2）」「山形考古第 9 卷第 1 号（通巻 39 号）別刷」
- 南陽市教育委員会 2013 「郡山遺跡群富貴道遺跡発掘調査報告書」 南陽市埋蔵文化財調査報告書 6 集
- 村山市教育委員会 1984 「市の町遺跡発掘調査報告書」
- 村山市教育委員会 1993 「西原 C 遺跡発掘調査報告書」
- 村山市西郷小学校五十周年記念誌編集委員会編 1990 「西郷の村と学校」
- 山形教育委員会 1981 「境隈野遺跡」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 46 集
- 山形県教育委員会 1982 「三本木堂跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 59 集
- 山形県教育委員会 1986 「不動木道跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 100 集
- 山形県教育委員会 1988 「下長橋遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 130 集
- 山形県教育委員会 1989a 「月光川左岸地区県祭ほだ祭備事業 淳橋遺跡 下長橋遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財報告書第 141 集
- 山形県教育委員会 1989b 「県道佐（停）藤崎線 下長橋遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第 145 集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 1998 「升川遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 9 集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2000 「森山長坂遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 58 集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2001 「高瀬山遺跡（SA）第 2・3 次発掘調査報告書 本文・挿図版」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 94 集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2003 「大明神遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 118 集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2008 「中合岱遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財センター調査報告書 168 集
- 財团法人山形県埋蔵文化財センター 2011 「年報 平成 22 年度」
- 公益財团法人山形県埋蔵文化財センター 2012 「年報 平成 23 年度」
- 公益財团法人山形県埋蔵文化財センター 2013 「年報 平成 24 年度」
- 山形県教育委員会 1995 「馬上台遺跡発掘調査報告書」
- 横手市教育委員会 2009 「大島井山遺跡－第 9 次・第 10 次・第 11 次調査－」 横手市文化財調査報告書第 12 集

写真図版

---





1・2区全景（南から）



2区調査前近景（北西から）



2区東壁基本層序b-b'（東から）



2区東壁基本層序d-d'（西から）



2区東壁基本層序e-e'（北西から）



2区遺構検出状況（南西から）



2区完掘状況（北西から）



2区 ST7 断面（南西から）



2区 ST7 完掘状況（西から）



2区 SE3 断面 (南から)



2区 SE3 完掘状況 (南西から)



2区 SE10 断面（南西から）



2区 SE10 完掘状況（東から）



2区 SL13 断面（南西から）



2区 SK12 断面（南から）



2区 SK12 完掘状況（南から）



2区 SD5 断面（西から）



2区 SD5 遺物出土状況（北西から）



2区 SD5 完掘状況（西から）



2区 SD9 完掘状況（北西から）



2区 SD9 断面（東から）



2区 SK2 断面（北から）



2区 SK2 完成状況（東から）



2区 SK4・8 完成状況（東から）



2区 SK4 断面（南から）



2区 SK4 完成状況（南西から）



2区 SK8 断面（南から）



2区 SK8 遺物出土状況（東から）



2区SK8 完掘状況（南から）



3区調査前遺跡近景（北から）



3区重機掘削状況（西から）



5区重機掘削状況（北から）



4区作業状況（南東から）



3区SK21 精査状況（東から）



3区SK21 圖面作成（西から）



3区SK54 精査状況（北東から）



4区SD60 精査状況（南西から）



4区SD60 記録作業（西から）



2次発掘調査説明会（北から）



4区西壁基本層序（北東から）



3区西壁基本層序（南東から）



3区遺構検出状況（北東から）



4区遺構検出状況（東から）



5区遺構検出状況（北西から）



3区完掘状況（1）（北東から）



3区完掘状況（2）（東から）



3区完掘状況（3）（北西から）



3区完掘状況(4)(北から)



4区完掘状況(北から)



5区完掘状況（北から）



5区 ST68 床面検出状況（北から）



5区 ST68 断面（東から）



5区 ST68 掘り下げ状況（北東から）



5区 ST68RP223 出土状況（北東から）



5区 ST68 南側遺物出土状況（北東から）



5区 ST68 土師器遺出土状況（1）（北東から）



5区 ST68 土師器甕出土状況（2）（北東から）



5区 ST68 挖り方断面（北東から）



5区 ST68ED83 断面（北西から）



5区 ST68EK84 完掘状況（東から）



5区 ST68 完掘状況（北から）



5区 ST68EL79 新面（北東から）



5区 ST68EL79 遺物出土状況（1）（北から）



5区 ST68EL79 袖断面 (北東から)



5区 ST68EL79 完壊状況 (北から)



5区 ST68EL79 遺物出土状況 (2) (北から)



5区 ST68EL79 遺物出土状況 (3) (北から)



5区 ST68EL79 黒色土器出土状況 (北西から)



3区 SB25 検出状況 (東から)



3区 SB25 完握状況 (1) (東から)



3区 SB25 完掘状況（2）（東から）※人が立っている所が柱穴の位置



3区 SB25EB26 断面（東から）



3区 SB25EB26 完掘状況（南から）



3区 SE25EB27 断面（南から）



3区 SB25EB27 完掘状況（南から）



3区 SB25EB28 完掘状況（南から）



3区 SB25EB29 断面（南から）



3区 SB25EB29 完掘状況（南から）



3区 SB25EB30 完掘状況（南から）



3区 SB25EB31 断面（東から）



3区 SB25EB31 完掘状況（南から）



3区 SB25EB32 完掘状況（南から）



3区 SB25EB33 断面（南東から）



3区 SB25EB33 完掘状況（南から）



3区 SB25EB34 完掘状況（南から）



3区 SB25EB35 断面（南西から）



3区 SB25EB35 完掘状況（南から）



3区 SB36 完掘状況（1）（北から）



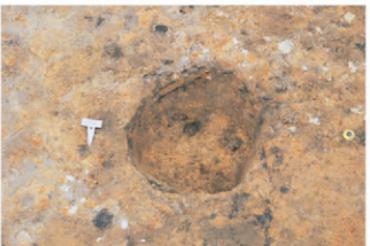
3区 SB36 完掘状況 (2) (東から)



3区 SB25・36 完掘状況 (北から)



3区 SB36EB37 断面（東から）



3区 SB36EB37 完掘状況（東から）



3区 SB36EB38 断面（南から）



3区 SB36EB38 完掘状況（東から）



3区 SB36EB39 断面（東から）



3区 SB36EB39 完掘状況（東から）



3区 SB36EB40 断面（南から）



3区 SB36EB40 完掘状況（東から）



3区 SB36EB41 断面 (東から)



3区 SB36EB42 断面 (東から)



3区 SB36EB42 完掘状況 (北から)



3区 SB36EB43 完掘状況 (南から)



3区 SB36EB44 断面 (北東から)



3区 SB36EB44 完掘状況 (東から)



3区 SB36EB45 断面 (東から)



3区 SB36EB45 完掘状況 (東から)



3区 SB36EB46 断面（東から）



3区 SB36EB46 完掘状況（東から）



3区 SB36EB47 断面（東から）



3区 SB36EB48 断面（北西から）



3区 SB36EB48 完掘状況（東から）



3区 SB36EB49 断面（東から）



3区 SB36EB49 完掘状況（東から）



3区 SB36EB50 完掘状況（北西から）



3区 SB36EB51 断面（北東から）



3区 SB36EB51 完掘状況（東から）



3区 SB36EB52 断面（北東から）



3区 SB36EB52 完掘状況（北から）



3区 SE36 精査状況（東から）



3区 SB56 完掘状況（北から）



3区 SB62 完掘状況（北から）



3区 SB56EB57 断面（北から）



3区 SB56EB58 完掘状況（南から）



3区 SB56EB59 断面（南東から）



3区 SB62EB63 断面（南西から）



3区 SB62EB64 断面（東から）



3区 SB62EB65 断面（南東から）



3区 SK21 検出状況（西から）



3区 SK21 遺物出土状況（東から）



3区 SK21 断面（南から）



3区 SK21 完掘状況（東から）



3区 SK53・54 遺物出土状況（南東から）



3区 SK53・54 完掘状況（北西から）



3区 SK53 断面（東から）



3区 SK53 遺物出土状況（東から）



3区 SK54 断面 (東から)



3区 SK54 遺物出土状況 (北東から)



3区 SK54RP203 出土状況（北西から）



3区 SK54RP204 出土状況（南東から）



3区 SK53RP206 出土状況（東から）



4区 SK61 断面（南東から）



4区 SK61 完掘状況（南東から）



3区 SK75 断面（南から）



3区 SK75 完掘状況（北から）



4区 SD60 断面（北東から）



4区 SD60 遺物出土状況 (1) (東から)



4区 SD60RP209 出土状況 (南から)



4区 SD60RP211 出土状況（南から）



4区 SD60 遺物出土状況（2）（北西から）



4区 SD60 遺物出土状況（3）（北から）



4区 SD60 遺物出土状況（4）（北東から）



4区 SD60RP219～222 出土状況（北東から）



4区 SD60 遺物出土状況 (4) (北から)



4区 SD60 遺物出土状況 (5) (西から)



4区 SD60 完掘状況 (西から)



4区 SD60RP234 出土状況 (北東から)



5区 SD60 東側断面 (東から)



5区 SD60 東側遺物出土状況（1）（東から）



5区 SD60 東側遺物出土状況（2）（北東から）



3区 SD74 完掘状況（東から）



5区 SD78 断面（東から）



5区 SD78 完掘状況（東から）



5区 SD80 完掘状況（東から）



5区 ST68RP225 出土状況（北から）



3区 RP201 出土状況（南東から）



SD5 溝跡、SK53・54 土坑出土遺物



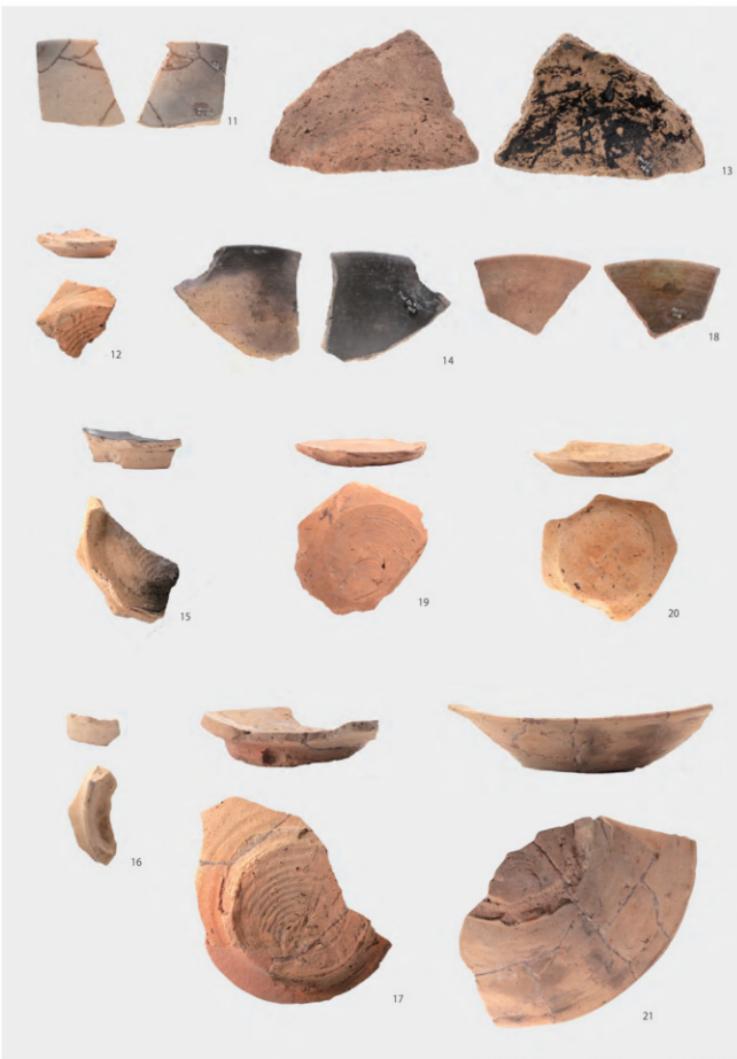
ST68 穹穴住居跡出土遺物



ST68 穹穴住居跡出土遺物（1）



ST68 穹穴住居跡出土遺物 (2)



SL13 炉跡、SE3・10 井戸跡、SK2 土坑出土遺物



SK2 • 53 • 54 土坑出土遗物



SK54 土坑、SD5 溝跡出土遺物



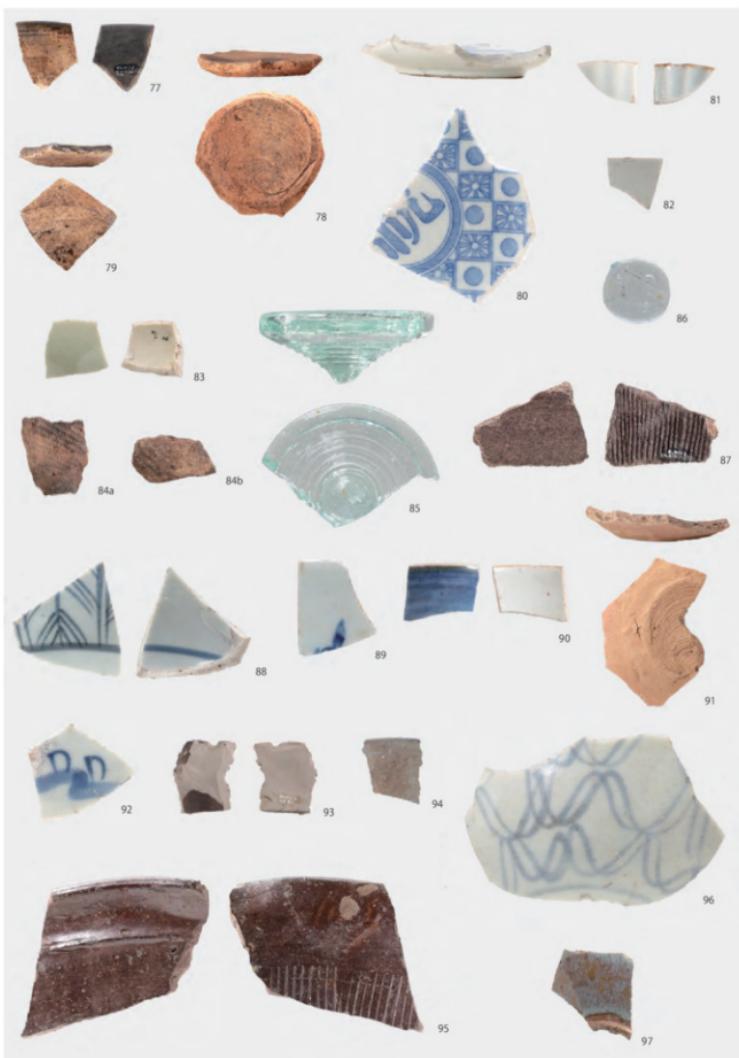
SD5 • 9 • 60 沟跡出土遺物



SD60 溝跡出土遺物 (1)



SD60 溝跡出土遺物 (2)



SD60・74・78 溝跡、SK4・8 土坑、ST68 穹穴住居跡、2～4 区遺構外出土遺物

報告書抄録

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第218集  
田向2遺跡第1・2次発掘調査報告書

2015年3月31日発行

発行 公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター  
〒999-3264 山形県上山市中山字壁屋敷5608番地  
電話 023-672-5301  
印刷 田宮印刷株式会社  
〒990-2251 山形県山形市立谷川3丁目1410番1号  
電話 023-686-6111

